

日本タンゴ・アカデミー機関誌

# TANGUEANDO EN JAPON

No. 30  
2012

タンゲアンド・エン・ハボン

# TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 30, julio de 2012

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

## タンゲアンド・エン・ハポン 第30号 (2012年7月)



オルケスタ・フルビオ・サラマンカで歌う

CHIYOKO

(1975年日本公演から)

(写真提供：山本雅生氏)

日本タンゴ・アカデミー



## Índice

SALUDOS DEL PRESIDENTE .....	4
ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN (De enero a junio de 2012) .....	5
REUNIÓN ANUAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN 2012 .....	8
ALBUM DE LAS ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA .....	10
COMENTARIOS SOBRE “CLASE DE TANGO”:	
Vol.77 LA PELÍCULA “DERECHO VIEJO — LA VIDA DE EDUARDO AROLAS” ..... COMENTARISTA : MASAMI TAKABA	17
Vol.78 FRANCISCO LOMUTO 1931-1945 ..... COMENTARISTA : TAMOTSU NAGATA	21
“RINCÓN DE TANGO” EN EL OESTE No.19	
REPORTAJE .....	TADAO SUZUKI 26
PROGRAMAS .....	29
“RINCÓN DE TANGO” EN LA REGIÓN CENTRAL No.10	
REPORTAJE .....	HIROSHI NIWA 32
PROGRAMAS .....	35
DESDE KOBE : LAS FOTOS DE UEDA Y YAMAMOTO (9) FULVIO SALAMANCA EN JAPÓN	
..... MASAO YAMAMOTO Y NOBORU UEDA	37
ENTREVISTA CON LOS AFICIONADOS : SR. KATSUO SATO .....	KAORU NISHIKAWA 42
¿POR QUÉ EL TANGO AÑORA A LOS DÍAS PASADOS? .....	YOSHIHIRO OHRUI 48
LOS LETRISTAS DEL TANGO (I) A.Villoldo / P.Contursi / S.Linnig .....	MASAMI TAKABA 53
IMÁGENES DEL TANGO CONTEMPORÁNEO (1955-1990) (I) ERNESTO BAFFA .....	HIDETO NISHIMURA 59
REVISITANDO EL TANGO EN LOS 70 (6) ELADIA BLÁZQUEZ .....	SHUNJI YOSHIMURA 67
EMBAJADORES DEL TANGO EN EUROPA (Apéndice III) TANGO EN ALEMANIA (I) .....	FUMIO SHIBANO 72
LAS DOS GUERRAS MUNDIALES Y EL TANGO .....	FUJIO SAITO 80
TANGOS QUE BRILLAN EN TODOS LOS TIEMPOS — MACHIKO KOMATSU Y SU TANGO CRISTAL... TAKAHIRO YAMAMOTO	87
HISTORIA DE LA ORQUESTA TÍPICA (10)(Final) .....	DR.LUIS ADOLFO SIERRA / TRADUCCIÓN DE AYAKO YUMITA 88
ORQUESTAS TÍPICAS JAPONESAS (7) .....	TAKEO KANIE 109
EL TANGO EN LAS PELÍCULAS : LOS ARTISTAS, LOS TEMAS, EL BAILE .....	HISAO IIZUKA 114
LOS TANGOS QUE ESCUCHAMOS (I) RONDANDO POR LOS DISQUERÍAS DE JINBOCHO .....	KOICHI ARAKAWA 116
CADENA DE ENSAYOS(10)TANGO MÍO .....	KAZO MIURA 118
TOKIO-CONCIERTO EN PRIMAVERA : TANGO ENSAMBLE ASTRORICO EN CONCIERTO .....	KAZUYA SUZUKI 123
CONCIERTO DE TANGO POR LA ORQUESTA YOKOHAMA “LA ÉPOCA DE SHOWA Y DESPUÉS” .....	FUJIO SAITO 126
REPORTEJE DEL CONCIERTO DE KAZUMA MIURA .....	KAORU NISHIKAWA 130
TARDE DE MÚSICA POR PABLO ZIEGLER .....	KAZUYA SUZUKI 133
ADIÓS AL GRAN GUITARRISTA: HOMENAJE A UBALDO DE LÍO .....	SHIGEICHI SUGIYAMA 135
RESEÑA : ANTOLOGÍA DE LAS LETRAS DE LOS TANGOS CANTADOS POR A. VARGAS	
(EDITADO POR TAKAO IZUTANI) .....	HIROSHI OHSAWA 137
ANUNCIOS Y NOTAS DE LA REDACCIÓN .....	139



全国会員の集いあいさつ

## 力をあわせ、さらに発展をはかる年に…

会長 島崎 長次郎

本日は第15回の“全国会員の集い”に当たり、早朝から沢山の方にご出席いただき、誠にありがとうございました。今日は、北は札幌の岩垂さん、函館の石島さん、そして南は延岡の野村ご夫妻、福岡の藤村さんをはじめ、全国各地から、例年をはるかに越える100名もの方にお集まりいただき、このように盛大なパーティができますことを心から感謝し、厚く御礼を申し上げます。

顧みますと、当アカデミーが発足したのは、今から14年前の1998（平成10）年の2月、丁度長野を舞台にした「冬季オリンピック」で日本全国が沸きに沸いていたときでありましたが、スタートしたときの会員数は僅かに86名でした。それが現在はどうか、といいますと、実に191名、発足当時の倍増をはるかに超し、念願の200名の大台も夢ではないところに参りました。

これも一重に、会員皆様のご理解のうえにたった、一致協力のお陰でありまして、心から感謝を申し上げるところであります。

ところで、昨年は東北の大震災でかつてない悲惨な年になりました。また昨年の秋には、わが国のタンゴ界では知らない人はいないベテランの愛好家の蟹江丈夫さんが急逝され、痛恨事はつづきましたが、当アカデミーの行事としては、初めての試みとしてミロンガを開催しました。いろいろと反省点はあるものの、お陰さまで大盛況で終了することができたのはうれしいことです。そして一方の機関誌においては、従来のレコードに関する記事に加え、国内におけるタンゴの活動状況などを幅広く取り上げ、全国の会員の皆さんにできるだけ今日のナマのタンゴ情報をお伝えするように工夫するなど、いろいろと努力を傾けてきたところであります。

さて、今年はさらにその上に立って何をなすべきか。従来の実績に甘えることなく、さらに前進をはかるよう役員一同が心を合わせて取り組む決意しておりますので、皆様のなご一層のご支援とご協力をお願いを申し上げます。

本日は、後ほどタンゴ・ワセダの演奏などもありますので、是非会員同士の交流などを通じ、今日のこの集いを楽しく、有意義にお過ごしくくださいますことを祈念して、ご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。

## 日本タンゴ・アカデミー 2012年上期活動実績

- 2012日本タンゴ・アカデミー“全国会員の集い”が、3月4日（日）12時45分から「ホテル銀座ラフィナート」において98名の参加者を得て盛大に開催されました。詳細は本号所載のレポートをご覧ください。
- タンゴ・セミナー（CLASE DE TANGO）
  - ◎ 第77回セミナー：3月4日（日）、「ホテル 銀座ラフィナート」においてNTA全国懇親会に先だって午前11時から午後12時30分まで、飯塚 久夫氏の司会と高場 将美氏の解説で映画「デレーチョ・ビエホ～エドゥアルド・アローラスの生涯」（1951年1月ブエノス・アイレス封切）を鑑賞しました。勿論、スペイン語で字幕もありますが、高場氏の行き届いた解説で十分楽しむことが出来ました。出席者は97名でした。
  - ◎ 第78回セミナー：6月10日（日）、午後1時30分から「東医健保会館」においてタンゴ・セミナー初登場の永田 保氏による「フランシスコ・ロムート楽団 1931～1945 栄光と苦悩の15年」というタイトルのお話がありました。長年のご研究の成果に基づいた永田氏の熱弁に参加者一同深い感銘を受けました。出席者は49名でした。
- 東京リンコン・デ・タンゴ（会場：東京原宿「原宿クリスティー」）
  - ◎ 1月24日（火）：積雪の翌日という寒い日で残念ながら参加者は会員37名、ビジター1名、計38名とあまり多くはありませんでした。プログラムは吉田義之さんによる「来日楽団による日本の歌のタンゴ」と中村尚文さんによる「新宿のタンゴ 第2回」（中身は1928年録音による名流楽団・歌手の名演集）の2テーマで、どちらも大変興味深い内容でした。この日の目玉はGYU（NTA会員）& 夏美しいのペアによるダンスデモで、2曲の予定がアンコールとさらにそのアンコールと結局4曲になり、出席者全員がお二人の妙技に酔い痴れました。
  - ◎ 3月27日（火）：今回のコメンテーターは丸岡将泰さん（初登場）と脇田富水彦さんです。丸岡さんは「思い出のタンゴアルバム」というタイトルで、オールドファンには懐かしいホルヘ・カルダーラのレシタードのコピーやチリのメルセ寺院の鐘の音の録音なども交えてのお話、脇田さんは「こてんこてんの古典（その2）」というタイトルで古典スタイルのコンフントによる古典曲の演奏を10曲紹介されました。それに続いて歌手のユリ・アスセナさんがトークショー形式で実際に煙草を吸いながらのフマンド・エスペロなど4曲を歌い、最後に飛び入りとして平田耕治さんのバンドネオンと徳武正和さんのギターのデュオでロ・ケ・ベンドゥラとミロンギータの2曲の演奏がありました。参加者は51名でした。
  - ◎ 5月22日（火）：季節外れの寒い日で、しかも雨天で参加者は43名を若干少なめでした。コメンテーターは町田静子さん（初登場）と山本幸洋さんでした。町田さんは「私の「Tangos Favoritos」から」と題して、ご自身の思い出深い曲目を紹介され、最後に番外曲目のMi Pibaをバックに黒木皆夫さんとのダンスを披露されました。山本さんは「カルロス・ガルシーアのピアノを聴く」と題して、彼のピアノが活躍するLPやCDを多数紹介されました。最後に特別出演として、ギタリストの飯泉昌宏さんのギター演奏を、飛び入りのグロリア米山さんの歌も交えて、皆で聴き入りました。

## ● 関西リンコン・デ・タンゴ

第19回関西リンコン・デ・タンゴ は2012年5月20日（日）13時より、神戸三宮「サロン・ド・あいり」において開催されました。参加者は会員13名、ビジター 17名の計30名でした。プログラムの第1部のⅠでは2010年7月10日に東京浅草公会堂で開催された「東京タンゴ祭」の映像を楽しみ、第1部のⅡでは星野俊路さん（bn）と米阪隆広さん（g）のデュオ「タンゴ・グレリオ」の生演奏を聴きました。第2部はゲスト・コメンテーターの福川靖彦氏さんが「ダリエンソを聴きなোস」というユニークでかつ中身の濃いお話をされました。詳細は本号所載の鈴木忠夫さんのレポートをご参照ください。

## ● 中部リンコン・デ・タンゴ

第10回中部リンコン・デ・タンゴは2012年4月8日13時より、四日市市内サロン「茉莉花 ジャズミン」において開催されました。参加者は会員11名、ビジター 42名の計53名でした。会は早川健太郎さん（会員、志摩市）による「ピアノの魔術師 ロドルフォ・ピアジその歌手たち」に始まり、第2部では本部招聘コンサートとしてNTA理事・編集長の齋藤富士郎さんが「オスバルドフレセド 一代記」というタイトルで、パソコンを用いたパワーポイント画像を併用しての、お話をされました。第3部では島田由美子さん（bn）、丹治清貴さん（cb）、長井美香さん（p）からなるフェリスタンゴ・トリオの生演奏を楽しみました。詳細は本号所載の丹羽 宏さんのレポートをご参照ください。

## ● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」29号が1月に発行されました。

## ● 副機関誌「タンゴランディア」24号が4月に発行されました。

## ● 会員動静

前号以降の新入会員（敬称略）：内田 省三（千葉県）、籾本 亜里（東京都）、  
間々田佳子（東京都）、関 明子（神奈川県）

退会者（敬称略）：村野 俊寛、山本 久子、高橋 哲（逝去）

## ● 理事会・役員会

\* 2月8日（水）：事務局より現在の会員数は188名との報告がありました。又、3月4日のNTA全国会員懇親会を控えて、財務関係の現状報告がありました。それに続いて主要議題として3月4日のセミナーと懇親会の具体的スケジュール・業務分担などについて討議を行いました。その他、東京リンコン・デ・タンゴの報告と次回の計画、次回セミナーの計画などを討議しました。

\* 3月15日（水）：事務局より現在の会員数が192名になったとの報告がありました。更に会計入出金状況や日本タンゴ・アカデミー“全国会員の集い”の報告があり、また東京、関西、中部のそれぞれのリンコン・デ・タンゴの計画、などを討議しました。なおNTA会員全国懇親会はこれまで呼び名が不統一でしたが、今後は「日本タンゴ・アカデミー“全国会員の集い”」とすることに決定されました。

\* 4月16日（月）：事務局より現在の会員数が193名になったとの報告がありました。今回は入出金状況、機関誌編集状況、各地のリンコン・デ・タンゴの結果と予定の報告に続き、今年もアカデミー主催のミロンガを開催するかについて議論がありましたが、具体的な決定には至りませんでした。

- \* 6月19日（火）：台風が上陸する日でしたので、議事は手短に進められました。主な議題は10月8日開催予定のミロンガの計画についてでした。

## ● 編集会議

- \* 2月8日（水）：役員会に先だって編集会議を開き、タンゴランディアとタンゲアンド・エン・ハポンの編集企画とその進行状況の報告と討議がありました。
- \* 3月15日（水）：役員会に先だって編集会議を開き、タンゴランディアとタンゲアンド・エン・ハポンの編集進行状況及び新規企画の報告がありました。
- \* 4月16日（月）：今回は（株）藤印刷においてタンゴランディア 2012年春号の校正を兼ねて開催されました
- \* 6月19日（火）：役員会に先だって編集会議を開き、タンゲアンド・エン・ハポン30号の編集進行状況とタンゴランディア秋号の編集計画を討議しました。

---

### —記事訂正—

1月発行の本誌29号のp.5及びp.10のバイオリン奏者のお名前を間違っ「鈴木恵子」としてしまいました。正しくは「鈴木慶子」です。又、p.118中程の「心を熱くするタンゴの名曲200選」は「心を熱くするタンゴの名曲20選」、p.120の見出しの「北緯45度のタンゴ」は「北緯43度のタンゴ」の誤りでした。慎んでお詫びと共に訂正させていただきます。

---

## 会 告

昨年につきNTA主催のミロンガパーティーを下記のスケジュールで開催を予定しています。振るってご参加ください。

日 時：10月8日 13：00～16：00

会 場：いきいきプラザ一番町（昨年とは違う会場です）

東京都千代田区一番町 12

TEL 03-3265-6317

アクセス：東京メトロ有楽町線 麴町5・6番出口 徒歩5分

東京メトロ半蔵門線 半蔵門駅 5番出口 徒歩5分

会費等の詳細は追ってご通知いたします。



## 〈報告〉

# 日本タンゴ・アカデミー 2012年全国会員の集い REUNIÓN ANUAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN 2012

齋藤 富士郎

「日本タンゴ・アカデミー 2012年“全国会員の集い”」は、2012年3月4日（日）12時45分から「ホテル 銀座ラフィナート」において98名の参加者を得て盛大に開催されました。又、これに先立って、「第77回タンゴ・セミナー」が同会場において11時より開催されました。例年、2月の最終日曜日は東京マラソンの開催日でもあり、懇親会参加者の方々に交通上のご不便をお掛けすることが多かったため、今回から開催日を1週間ずらして3月4日としました。

「第77回タンゴ・セミナー」では今回初めての試みとして映画の鑑賞を行いました。映画は『デレーチョ・ビエホ～エドゥアルド・アローラスの生涯』というタイトルで、その内容はアローラスを主人公とした1920年代初期のタンゴの世界を描写したものでした。厳密な意味でのアローラスの伝記ではありませんが、当時の情景が良く描かれていました。日本語の字幕はありませんでしたが、その代わりに高場将美氏による3回に分けての丁寧な解説がありました。セミナーの詳細については本号所載のレポートをご参照ください。

懇親会では恒例に従って、島崎会長の挨拶（本号の会長挨拶参照）、飯塚副会長によるNTA事業概況、杉山会計担当理事による2011年度決算と2012年度予算計画の報告（次頁参照）があり、それに続き新入会員の紹介がありました。今回はアトラクションとしてオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダによるライブ演奏があり、それに加えて小松真知子さんの飛び入りピアノ演奏があり、それらに惹かれて何組もの人たちがタンゴ・ダンスを始めるなど、大変楽しいひと時でした。参加者は98名でした。懇親会の情景は本号所載のアカデミー行事アルバムをご参照ください。又、今回初めての試みとして鈴木茂次氏と脇田富水彦氏のご努力によりセミナーと懇親会の情景を記録した映像レポート（DVD）を製作しました。このDVDはご事情により参加できなかった特に地方会員の方に貸出しますので、ご希望の方は事務局までお申し出ください。

なお会場となった「ホテル 銀座ラフィナート」は今後改装工事に入るため、この会場の使用は今回限りとなり、来年からは会場がメルパルク（芝の増上寺の近く）になります。なおこの会合はこれまで呼び方が統一されていませんでしたが、3月15日の役員会で今後は標記の呼び方に統一することが決定されました。



# 日本タンゴ・アカデミー 平成23年度収支報告書

単位：円

(2011年 1月 1日～2011年12月31日)

## \*収入の部

前期繰越金	3,348,810	(内、前会計166名分¥2,324,000)
会費、入会金	423,000	2011年会費、中途入会など 1月 1日以降入金分
特別会費	6,000	セミナー参加費
〃	285,000	懇親会参加費
〃	462,000	ミロンガ参加費
〃	60,200	C D頒布代金、雑収入など
当期収入合計	1,236,200	
戻入金	673,845	外部流出弁済戻入金
前受年会費	2,395,000	次年度(2012)会費 170名分

\*収入の部合計 7,653,855

## \*支出の部

事業費	1,670,907	懇親会、セミナー、リソソ、ミロンガ開催費用など
機関誌発行費	1,614,608	4回発行、印刷、発送、編集企画会議費用など
会議費	122,720	理事会開催会場費など
事務局運営費	348,123	催事案内文書、会員名簿、震災義援金、発送費など
当期支出合計	3,756,358	

\*支出の部合計 3,756,358

\*次期繰越金 3,897,497

平成24年(2012) 1月27日

監査の結果、適正かつ正確であることを認めます。

監事 佐藤 進



監事 弓田 綾子

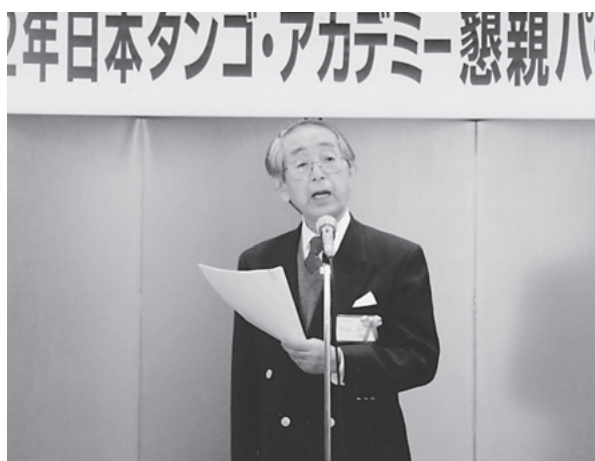


# ＜日本タンゴ・アカデミー 2012年 “全国会員の集い” 特集＞

2012年3月4日



島崎会長の挨拶



杉山理事による決算・予算報告



司会の飯塚副会長



齋藤理事による乾杯



福川理事による新入会員の紹介



島崎会長による地方からの出席者の紹介



小松 勝・真知子ご夫妻による挨拶



演奏するオルケスタ・タンゴ・デ・ワセダ



オルケスタ・タンゴ・デ・ワセダの演奏に合わせて踊る人々



小松真知子さんの飛び入りピアノ演奏



会場風景



大澤理事による閉会の辞



一本締めをする丹羽理事

# アカデミー行事アルバム



3班に分けての全員集合写真（その1）

# アカデミー行事アルバム



3班に分けての全員集合写真（その2）



# アカデミー行事アルバム



3班に分けての全員集合写真（その3）

写真撮影：吉澤義郎



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

# Clase de Tango

第77回タンゴ・セミナー

2012年3月4日

## 映画『デレーチョ・ビエホ ～エドゥアルド・アローラスの生涯』

Derecho Viejo (La vida de Eduardo Arolas)  
1951年1月ブエノスアイレス封切

司会：飯塚 久夫  
コメンテーター：高場 将美

### <当日配布資料>

#### ●監督：マヌエル・ロメーロ Manuel Romero (1891 - 1954)

青年時代は工場で働きながら、雑誌に執筆して文才を発揮。大衆演劇の世界に入り、タンゴの作詞もはじめた。1922年の劇『キャバレーのダンサー El bailarín del cabaret』の脚本執筆、挿入歌『パトテロ・センチメンタル Patotero sentimental』に作詞、劇も曲も大ヒットした。1929年には、レビュー劇場マイポの芸術監督になって芸能界のボスの存在。30年代から映画にも進出し、ルミトン社の芸術監督になる。1937年に脚本・監督した『昔の若者たちはポマードを使わなかった Los muchachos de antes no usaban gomina』が最大のヒット作。この映画は、劇中でウーゴ・デルカリアル Hugo del Carril が歌う（もちろんロメーロ作詞、作曲はフランシスコ・カナーロ）『古い時代 Tiempos viejos』の歌詞がそのまま台本……みたいな安直な作りだったが、大衆の心をつかんだ。ロメーロの監督ぶりは、早撮りで、いつもタンゴがいっぱい！ 商業的には、アルゼンチン映画史上もっとも成功した監督のひとりである。若いころから、華やかだが、いいかげんな性格だった。亡くなったときは極貧だったと、カナーロが言っている。彼の作詞した『ブエノスアイレス Buenos Aires』『ブエノスアイレスの歌 La canción de Buenos Aires』『交わす盃 Tomo y obligo』など数々の曲が今日も愛されている。

#### ●音楽（編曲指揮）：セバスティアン・ピアナ Sebastián Piana (1903 - 1954)

タンゴの作曲家として、1930年代にミロンガの歌を復活・再創造した人として名高い。ピアニスト

として、演奏活動もしたが、おもにクラシック音楽の教授として（自身の音楽学校～ブエノスアイレス市立音楽院）生計を立てていた。この映画では、ほとんどアローラス作曲の音楽を、巧みに編曲してバックグラウンドに使っているが、オリジナルな映画音楽も作曲したことがある。

### ●主演：ファン・ホセ・ミゲス Juan José Míguez (1913 - 1995)

1942年映画デビュー。47年に『音楽のロマンス Romance Musical』で、大スター、リベルタ・ラマルケ Libertad Lamarqueの相手役をつとめ、『サントス・ベガは帰ってくる Santos Vega vuelve』では主役で、伝説的な大草原の吟遊詩人を演じた。55年の、ルーカス・デマーレ監督『アバスト市場 El Mercado de Abasto』では、主演ティタ・メレーロ Tita Merelloの相手役をつとめた。

### ●その他の出演者：ラウラ・イダルゴ Laura Hidalgo (アローラスの恋人エルサ) ネリダ・ビルバーオ Nérida Bilbao (キャバレー経営者の情婦コカ) セベロ・フェルナンデス Severo Fernández (アローラスの親友ペピーノ)

演奏される曲——●アローラス作曲：酒宴の一夜 Una noche de garufa / デレーチョ・ビエホ Derecho viejo / ラグリマス (涙) Lágrimas / ラ・ギタリータ La guitarrita / レティンティン Retintín / ラウソン Rawson / ラ・カチーラ La cachila / カタマルカ Catamarca / 花火 Fuegos artificiales / コム・イル・フォー Comme il faut / エル・マルネ El Marne ●アグスティン・バルデイ Agustín Bardi 作曲：何という夜 ¡Qué noche! ●タイトル・バック——ミロンガ アローラスの思い出 Recuerdo de Arolas (作詞：レオン・ベナロス León Benarós 作曲：セバスティアン・ピアナ)

\*デレーチョ・ビエホ (古い法律) はいろいろな場面に使われるブエノスアイレスの慣用句ですが、この映画では「嘘のない、まっすぐな」といった意味で、アローラスの生き方を指しているのでしょう。同名のタンゴは、彼が法科の大学生のパーティに出演したとき初演したもので、この題は、単なる思い付きの言葉遊びのようなものです。

### ●あらすじ

ブエノスアイレス、1910年——建国百年祭式典の準備を見て、ペピーノは「さあ、酒宴の一夜だ！」これを聞いたアローラスは「酒宴の一夜？ すてきなタンゴの題になるね！」彼は、ペンキの看板描きを仕事にしていたが、バンドネオンで勝利をおさめることを夢見ている。そしてエルサとの結婚を。

ラ・ボカ地区の酒場へ売り込みに行き、「ぼくの作った曲でいいですか？」『酒宴の一夜』を演奏して大好評。家に帰ると、彼の部屋にいつも置いてあるヒネーブラ (ジンの仲間の酒) のボトルを見て、お母さんは「もう飲むのはやめて！」。父は「おまえはきっと大物になるぞ」

場末のフォルマティーボ (参加者がお金を出し合うダンス・パーティ) で『デレーチョ・ビエホ』を演奏して大好評。即興で生まれる曲を楽譜に書いてもらって出版……セントロ (中心街) 進出を目指してまっすぐ進むアローラスだが、飲みすぎて出演をやめてしまうことも……。医者も母親も「そんなに飲んではいけない。食べなくてはだめです」

キャバレーに出演して、遊び女コカがアローラスに魅かれる。彼女を家へ送ったとき、彼のポケットに500ペソものご祝儀が入っていた。彼女は情夫ドン・ペドロの経営するキャバレーへの出演を頼んでくれるという。「コカの男の店になんか行くものか！」

由緒あるカフェ《ロス・インモルターレス》——街角の名物男エル・ネグロ・ラウールがいる。詩人エバリスト・カリエゴが、悲しくロマンティックな青春の詩をよんでいる……。

アローラスのファンで、押しかけてきて彼の楽団のメンバーになったヴァイオリン奏者マルケスの働きで、一流のキャバレーに出演。楽しいコーラス入りの『レティンティン』が大好評。ついに名声を獲得！

ブエノスアイレスに初めて雪が降った！「何という夜だ！」——アローラスのことばに、作曲家バルディが「これで曲の題は決まりだ！」

アローラスはパリに渡り、キャバレーに出演。同地ではタンゴの王様である音楽家マヌエル・ピサーロもアローラスをたずねてきた。キャバレーのダンサー、レネと知り合う。彼女のことばから『コム・イル・フォー』のタイトルが生まれる。成功のいっぽう、ウィスキーに溺れ、ガウチョの服装をさせられることに嫌気がさしているアローラス。

ブエノスアイレスに一時帰国したピサーロは、エルサに手紙を書いてもらい、戻ってアローラスにとどけ、故郷に帰ることをうながす。「お金は出してあげる。とにかく、まずここでの契約を果たそう」

アローラスはピサーロ楽団のメンバーを借りて、リハーサル。「第2部は、もっとやわらかくやろう！」やる気まんまんだったが、レネとの親交をねたむ裏社会の男たちに襲われる。その後遺症から重い肺炎を患う。

病床のアローラス……レネと、ブエノスアイレスからやってきたエルサ……「雪だ、あのときのブエノスアイレスと同じ……ほくはもう二度と帰れない。夢はみんな壊れてしまった。あの雪のひとつひとつが、ほくのタンゴ……」

## ●現実のエドゥアルド・アローラス

バンドネオンの史上最高峰のひとりペドロ・ラウレンス（アローラスを生で聴いている）は、「私たちの奏法のすべては、アローラスから学んだものだ」と言っている。アローラスはつねに即興で、多数の珠玉のタンゴを作曲し、また彼の楽団は当時もっとも音楽的に洗練され、最高水準の演奏力をもっていた。

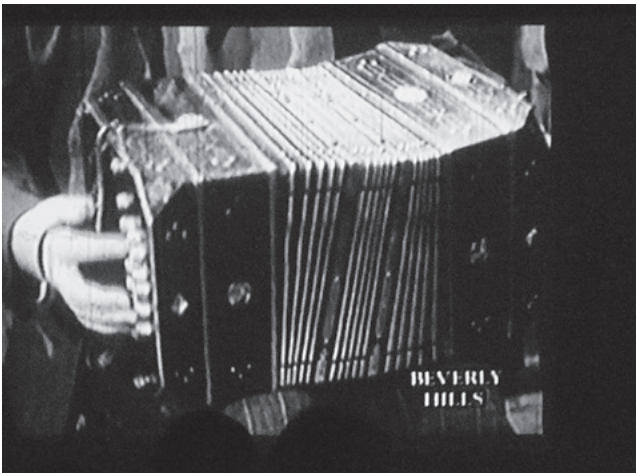
1892年、ブエノスアイレス南部の場末に生まれた。両親はフランス南西部からの移民で、家庭内ではフランス語を使っていたと思われる。しかし父親は、歌い手やギター弾きの集まる酒場を開いていたこともあり、アルゼンチン民衆文化にとけこんでいた。アローラスは、イラストレーターとしても才能があったが、兄から手ほどきを受けたギター、独学のバンドネオンで、音楽家の道に入った。17才で、最初の作品『酒宴の一夜』を作曲。そのころからグループ・楽団のリーダーとして活動、タンゴ最高の人気者のひとりだった。20代の半ばに、あるフランス系女性への愛をあきらめたときから、演奏していないときは、いつもペルノー（アブサン）を飲みつづける自殺行為に走った（ほんとうに死ぬまで）。しかし、契約を破ったことも、時間に遅れたことも、一度もない。30才でフランスに渡り、パリに定住し、同地で名声高い楽団指揮者・プロモーターのマヌエル・ピサーロに応援されて、楽団をひきい、スペインなどでもキャバレーやサロンに出演して、経済的にも大成功だった。1924年、パリで没（肺炎）。32才だった。



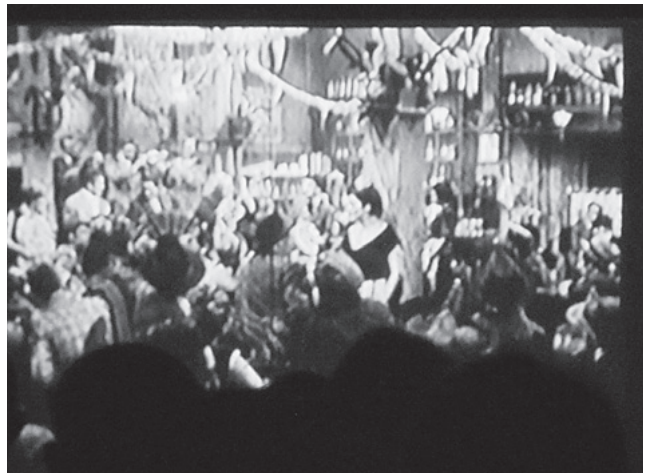
解説の高場 将美氏



司会の飯塚 久夫氏



映画の一場面（1）



映画の一場面（2）



会場風景



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

# Clase de Tango

第78回タンゴ・セミナー

2012年6月10日

フランシスコ・ロムート楽団

1931 ~ 1945

栄光と苦悩の15年

コメンテーター：永田 保

1 Lomuto (Héctor Quesada)	1940 38949
2 Rulitos (R.L.Brignolo)	1926 DNO 7657
3 A toda vela (O.Lomuto-F.Lomuto)	1928 DNO 7750
4 Alondra (Nerón Ferrazzano)	1931 DNO 7875
5 El irresistible (C.Pesce-L.Logatti)	1931 37098
6 Papanata (A.Botta-F.Lomuto)	1932 37286
7 Lonjazos (J.F.Blanco-A.R.Domenech)	1932 37300
8 Andá a verla (F.G.Jiménez-O.Napolitano)	1933 37534
9 Corrientes y Esmeralda (C.E.Flores-F.Pracánico)	1934 37583
10 Mi pesar (Mauricio Saiovich)	1935 37774
11 El caballo del pueblo (M.Romero-A.Soifer)	1935 37823
12 Después arreglamos (P.Laguna-F.Lomuto)	1936 37885
13 Don Juan Malevo (E.R.Beccar-F.Lomuto)	1937 38259
14 Si yo te contara (C.E.Flores-A.Rodio)	1937 38303
15 El día que yo pueda (C.E.Flores-F.Canaro)	1937 38358
16 El trece (Alberico Spátola)	1938 38411
17 Otra vez (J.M.Contursi-J.A.Fernández)	1938 38475
18 A mí qué me importa (M.Romero-F.Lomuto)	1939 38800

19	Qué linda es la vida (A.Navarrine-L.Demare)	1941	39263
20	El cantar de un tango (Martín Darré)	1942	39814
21	Catamarca (Eduardo Arolas)	1943	60-0075
22	Un vals (O.Rubens-H.Salgán)	1944	60-0436
23	Y sonó el despertador (Marvil)	1944	60-0450
24	Me llaman el solitario (E.Cadícamo-F.Lomuto)	1945	60-0868
25	Mi mejor canción (J.M.Contursi-Z.Canicoba)	1949	60-1849
26	Cachadora (P.Laguna-F.Lomuto)	1950	60-1978

※歌手 Charlo 3, 8 Fernando Díaz 5~7, 9, 20

Jorge Omar 10~15, 17 ~ 19

Carlos Galarce 22

Alberto Rivera 23~26

(編集部注：タンゲアンド・エン・ハポン誌31号掲載に向けて、編集部から永田氏に本セミナーでのお話の内容の文章化をお願いしてあります)



フランシスコ・ロムートについて長年の研究成果を基に熱弁を振う  
永田 保氏



会場風景

## ① フランシスコ・ロムートの兄弟達

誕生年	名前	備考
1890	Ángela María	
1893	Francisco Juan	ピアニスタ、作曲家、作詞家(Pancho Laguna)、楽団指揮者
1894	Víctor Dionisio	ギタリスト、バンドネオニスタ、作曲家、主としてパリで活躍
1896	Elvira Ana	
1899	Pascual Tomás	作詞家(Óscar Lomuto)、ジャーナリスト
1903	Rosalía	
1906	Enrique Blas	ピアニスタ、作曲家、楽団指揮者。 Daniel Lomutoの父
1912	Blas Alfredo	職業軍人
1914	Héctor Antonio	ピアニスタ、作曲家、楽団指揮者(Héctor y su jazz)

## ② 楽団員の変遷

パート	年代 / メンバー			
	1923	1925	1928	1932
(b)	Ángel Ramos	Ricardo Brignolo	Daniel Álvarez	
	Vicente Romeo	Pedro Polito	Carmelo Martino	Jorge Fernández
	—	Ángel Danesi	Fortunato Martino	Américo Figola
	—	Luis Zinkes		
(v)	Lorenzo Olivari		Leopoldo Schiffrin	
	Esteban Rovati	Eduardo Armani	Carlos Taverna	Armando Gutiérrez
	—	Esteban Rovati	Dante Napolitano	Carlos Taverna
(bj)	Ángel Corletto	Vicente Mutarelli	Alfredo Sciarreta	
(p)	Enrique Lomuto	Alberto Castellanos	Óscar Napolitano	
(clarinete)	—	—	Carmelo Agulla	
(batería)	—	—	Desio Salvador Cilotta	
(Director)	Francisco Lomuto			

パート	年代 / メンバー			
	1936	1938	1943	1947
(b)	Martín Darré			Guillermo Uria
	Américo Figola			Vicente Toddaro
	Luis Zinkes			Luis Koller
	Miguel Jurado	Gregorio Pérez	Juan Gutiérrez	Armando Rodríguez
(v)	Leopoldo Schiffrin			Alprela
	Armando Gutiérrez			Carlos Taverna
	Carlos Taverna			Núñez
	—		Luis Apicella	Enrique Porfi
(bj)	Hamlet Greco		Mario Sciarreta	Verázquez
(p)	Óscar Napolitano		Ángel Martín	Juan Carlos Howard
(clarinete)	—		Carmelo Agulla	—
(batería)	Desio Salvador Cilotta			
(pistón)	Candico Borrajo			—
(saxo alto y clarinete)	Carmelo Agulla		—	
(saxo tenor y clarinete)	Primo Staderi		—	
(Director)	Francisco Lomuto			





④ビクトル期における他楽団との録音数比較

年度	ロムート	ドナート	フレセド	ダリエンス	カナロ
1931	23				139
1932	34	2			97
1933	30	10	20		87
1934	34	24	10		82
1935	24	28	18	12	64
1936	22	16	8	24	54
1937	28	8	16	26	59
1938	28	14	8	28	64
1939	30	14	18	26	58
1940	22	16	10	22	46
1941	26	14	18	26	52
1942	30	6	17	32	41
1943	26	0	17	23	37
1944	20	2	16	24	36
1945	16	4	14	21	30
1946	4		8	25	24
1947	0		2	21	17
1948	0		8	12	10
1949	4			22	9
1950	6			24	11



---

# 第19回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 鈴木 忠夫 —

---

去る2012/5/20（日）に「第19回 関西リンコン・デ・タンゴ」が神戸三宮の「サロン・ド・あいり」で開催された。関西リンコンも最近出席率がジリ貧傾向でプログラム担当者や、リポーターのやり繰りに関西リンコンの東ね役の山本雅生氏は毎回四苦八苦されている。今回は幸い「タンゴ・グレリオ」がコメンテーター不足を埋めてくれたが、今後も続く問題で頭が痛い。

プログラムの第1部のⅠは「映像で楽しむタンゴ」で2010年7月10日に東京浅草公会堂で開催された「東京タンゴ祭り」を12楽団の各1曲演奏に編集されたもので、一昨年の公演を生でご覧になった方も多と思われる。雑誌ラティエナの同年9月号に山本幸洋氏の詳細なりポートもあったので今更小生の感想など蛇足と思うが、小生も含めて「東京は遠くにありて想うもの」の方にとっては初めての映像なので一言述べさせていただくと、日本には斯くも優秀なタンゴ楽団が斯くも沢山あったのだと今さらながら思ったことと若い演奏家の躍進ぶりに目を見張った。「東京はあの世並みの遠さ」と云う山本雅生氏も「今後タンゴ演奏家不足は心配なさそうだ。しかし聴き手側がどうもなァ」。同感！

第1部のⅡは、久しぶりの生演奏でバンドネオンとギタラのデュオを聴く。ギタラの米阪隆広氏はクラシックギターの教室を主宰されているがタンゴにも詳しく演奏曲の紹介など要を得たお話だった。バンドネオンの星野俊路氏は「オルケスタ・アストロリコ」の第2バンドネオンだが、当日会場にアストロリコのマエストロ門奈紀生氏、第1ビオリンの麻場利華さん（お二人はNTA会員）、第3バンドネオンの田中香織さんの3人が来られた。そんなことは夢にも思わなかった星野氏は会場に来て片隅に3人を発見して愕然！その大慌てぶりは気の毒やらほほえましいやらであった。

2010年結成の若いデュオなのでモダンな演奏を予想していたら落ち着いた伝統的スタイルの演奏でアリアス&モンテスのデュオが目標と感じた。平均年齢が少々高めの会場から一曲ごとに温かい拍手が送られていたが、中でも日頃無口がトレードマークの門奈マエストロが一番大声で「ブラボー！」と声援を送っておられたが、星野氏には何よりの励みだったことだろう。「オートラ」に応じてラ・クンパルシータが追加された。

第2部は当日のメイン・イベント、東京よりおいでのゲスト・コメンテーター福川靖彦氏の解説で「ダリエンソを聴きなおす」と題するプログラムだ。ダリエンソの絶頂期は40年代末から56年頃迄と考える向きが多いと思うが福川氏は絶頂の一手手前の40年代いわゆる「バレラ時代」にひかれるという。この時期のダリエンソはつまらないという声も聞くが福川氏は頂点に向かわんとする覇気ともにこの時期だけのゆったりとした情感、ダリエンソの長い演奏歴の中で二度と表現できなかったこの時期だけの境地だと云われる。これにはエクトル・バレラと歌手のエクトル・マウレの感性が大きく影響したと氏は推測される。「ダリエンソの福川」と云われる氏だけに既に語り尽くされていると思われが

ちなダリエソをユニークな角度から論じられ中身の濃いプログラムだった。時間があれば、ということでもラ・クンパルシータが追加されたが、それに更に45年録のエル・ペンサミエントも追加された。

終了後、毎度カメラマンをお願いしている吉澤義郎氏によって恒例の記念集合写真が撮影された。

しばらく休憩後テーブルの準備も整った頃合いを見計らっていよいよ懇親会の開幕だ。懇親会には東京の福川氏、久保田さんはじめタンゴ・グレリオの若い二人、地元関西勢等16名が参加、アリアス&モンテスのギターとバンドネオンのドゥオのBGMが流れる中、ともにタンゴを愛するもの同志の歓談はいつまでも尽きなかった。

当日のリンコン出席者	NTA会員13名	非会員17名
夜の懇親会出席者	NTA会員10名	非会員6名(含、グレリオ2名)



タンゴ・グレリオの演奏（ギターは米阪隆広氏、バンドネオンは星野俊路氏）



司会の山本雅生氏



ダリエンスを語る福川靖彦氏



懇親会風景



参加者集合写真

(写真撮影：吉澤義郎氏)

ープログラムー

\*\*\*\*\* 第 1 部 \*\*\*\*\*

1) 映像で楽しむタンゴ

「2010年7月10日 東京浅草公会堂に於ける 【東京タンゴ祭り】 より抜粋」

- |    |                   |                 |                        |
|----|-------------------|-----------------|------------------------|
| 1  | オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ   | ミロンタンゴ          | (フリアン・プラサ作曲)           |
| 2  | ロス・ポジートス          | オテル・ビクトリア       | (フェリシアーノ・ラタサ作曲)        |
| 3  | オルケスタ・スエニョス セステート | ミロンガの一夜         | (デル・シアンシオ作曲)           |
| 4  | ルナ・ブランカ オクテート     | パ・ケ・セ・ルスカ・オルケスタ | (オルランド・トリポディ作曲)        |
| 5  | 仁詩トリオ             | カナロ・エン・パリ       | (A・スカルピーノーJ・カルダレーラ作曲)  |
| 6  | 平田耕治 セプテート        | クロードの為のタンゴ      | (リシャール・ガリアーノ作曲)        |
| 7  | タンゴ・アンサンブル・アストロリコ | ウナ・オポルトウニダ      | (オスバルド・レケーナ作曲)         |
| 8  | 古橋ユキ タンゴ・キンテート    | オホス・ネグロ         | (ビセンテ・グレコ作曲)           |
| 9  | 小松真知子とタンゴ・クリスタル   | ガジヨ・シエゴ         | (アグスティン・バルディ作曲)        |
| 10 | 京谷弘司 タンゴ・クアルテート   | ベラノ・ポルテーニョ      | (アストル・ピアソラ作曲)          |
| 11 | オルケスタ・アウローラ・セステート | マラ・フンタ          | (フリオ・デ・カローペドロ・ラウレンス作曲) |
| 12 | 志賀 清とO・T・トーキョー    | エル・チョコロ         | (アンヘル・ビジヨルド作曲)         |

2) ライブで楽しむタンゴ

タンゴ・グレリオの演奏を聴く (バンドネオンとギターデュオ)

星野俊路 (バンドネオン) 「オルケスタ・アストロリコ」の第2バンドネオンとして活躍

「タンゴ・アンサンブル・コケータ」「タンゴ・ガルーファ」等でも……

米阪隆広 (ギター) 米阪クラシック・ギター教室講師

- |    |                         |            |                             |
|----|-------------------------|------------|-----------------------------|
| 1  | MALENA                  | マレーナ       | (L. Demare H. Manzi)        |
| 2  | EN ESTA TARDE GRIS      | 灰色の午後      | (M. Mores J. M. Contursi)   |
| 3  | EL CHOCLO               | エル チョクロ    | (A. Villoldo)               |
| 4  | QUEJAS DE BANDONEÓN     | バンドネオンの嘆き  | (J. D. Filiberto)           |
| 5  | PAYADORA (ミロンガ)         | 吟遊詩人       | (J. Plaza)                  |
| 6  | ROMANCE DE BARRIO (バルス) | 下町のロマンス    | (A. Troilo H. Manzi)        |
| 7  | BOEDO 【Bn ソロ】           | ボエド        | (J. De Caro D. A. Linyera)  |
| 8  | SOLEDAD 【G ソロ】          | 孤独         | (C. Galdel A. Le Pera)      |
| 9  | EL POLLO RICARDO        | エル ポジョリカルド | (L. A. Fernández)           |
| 10 | TIERRA QUERIDA          | 愛する土地      | (J. De Caro L. Díaz)        |
| 11 | CONTRATIEMPO            | 災厄         | (A. Piazzolla)              |
| 12 | DESDE EL ALMA           | 心の底から      | (R. Melo V. Pérez H. Manzi) |
| 13 | LIBERTANGO              | リベルタンゴ     | (A. Piazzolla)              |

ダリエンソを聴きなおす

205 福川 靖彦 (東京)

- |                |   |                |              |
|----------------|---|----------------|--------------|
| 1              | SÁBADO INGLÉS<br>(J. Maglio)                      |                | 1935. 11. 18 |
| 2              | MELODÍA PORTEÑA<br>(E. S. Discépolo)              |                | 1937. 12. 21 |
| 3              | BOLADA DE AFICIONADO (m)<br>(A. Villoldo)         |                | 1941. 07. 29 |
| 4              | EL REY DEL COMPÁS<br>(P. Cubano)                  |                | 1941. 09. 12 |
| 5              | LAS DOCE<br>(J. D'Arienzo—N. López)               | c : H. Mauré   | 1944. 05. 17 |
| 6              | LA MENTIROSA<br>(A. Aieta)                        |                | 1944. 06. 09 |
| 7              | AMARRAS<br>(C. Marchisio—C. Santiago)             | c : H. Mauré   | 1944. 07. 21 |
| 8              | PREGONERA<br>(A. De Angelis—J. Rótulo)            | c : A.Laborde  | 1945. 08. 25 |
| 9              | CARTÓN JUNAO<br>(H. Varela—J. D'Arienzo—C. Waiss) | c : A. Echagüe | 1947. 08. 08 |
| 10             | SEGUÍME SI PODÉS<br>(A. Scarpino—J. Caldarella)   |                | 1950. 05. 05 |
| 11             | FLORIDA<br>(R. Petillo—A. Polito)                 |                | 1952. 11. 12 |
| 12             | PAMPA<br>(F. Pracánico)                           |                | 1954. 12. 10 |
| 13             | TRAGO AMARGO<br>(R. Iriarte—J. Navarrine)         | c : A. Echagüe | 1955. 06. 24 |
| EXTRA (時間があれば) |   |                |              |
|                | LA CUMPARSITA<br>(G.H.Matos Rodríguez)            |                | 1943. 11. 23 |

参加者に依る記念撮影の後、17:00頃より「タンゴ・グレリオ」のお二人と東京からお越し頂いてダリエンソのお話しをして下さった「福川さん」を交えて、懇親会を行います。

懇親会ではBGMとして流しておきますので、肩肘を張らず、気楽に聞き流してください。

若い「タンゴグレリオ」に対抗をして年配のバンドネオンとギターの「アニバル・アリアス」(ギター)「オスバルド・モンテス」(バンドネオン)ガ演奏をするタンゴと「O・T・アストロリコ」です。

1) ANÍBAL ARIAS (Guitarra) OSVALDO MONTES (Bandoneón)  
WALTER GUTIÉRREZ (Cantante)

- |                             |               |
|-----------------------------|---------------|
| 1 ORGANITO DE LA TARDE      | たそがれのオルガニート   |
| 2 EL LLORÓN                 | 泣き虫           |
| 3 A MEDIA LUZ               | 淡き光           |
| 4 LA ÚLTIMA COPA            | 最後の盃          |
| 5 EL MOTIVO                 | エル・モティーボ (動機) |
| 6 LA BORDONA                | ラ・ボルドーナ       |
| 7 EL PAÑUELITO              | 白いスカーフ        |
| 8 CANZONETA                 | カンソネータ        |
| 9 RECUERDO                  | 思い出           |
| 10 SUR                      | スール (南)       |
| 11 GUITARRA, GUITARRA MÍA   | 私のギター         |
| 12 MALENA                   | マレーナ          |
| 13 LA CACHILA               | ラ・カチーラ        |
| 14 DECARÍSIMO               | デカリッシモ        |
| 15 CHIQUILÍN DE BACHÍN      | チキリン・デ・バチン    |
| 16 QUIERO VERTE UNA VEZ MÁS | 今ひとたびの        |
| 17 ADIÓS MUCHACHOS          | さらば友よ         |
| 18 LA CUMPARSITA            | ラ・クンパルシータ     |

2) ORQUESTA ASTRORICO 2009年7月25日 (京都府民ホール アルティ)

- |                                |               |
|--------------------------------|---------------|
| 1 OLE GUAPA                    | オレ・グアパ        |
| 2 IL TANGO DELLE ROSE          | バラのタンゴ        |
| 3 IL PLEUT SUR LA ROUTE        | 小雨降る径         |
| 4 TANGO NOTTURNO               | 夜のタンゴ         |
| 5 MI ALMA EN EL VIENTO CONTIGO | 千の風になって       |
| 6 A MEDIA LUZ                  | 淡き光           |
| 7 TANGUERA                     | タンゴ好きのお嬢さん    |
| 8 ADIÓS PAMPA MÍA              | さらば草原         |
| 9 JEANNE Y PAUL                | ジャンヌとポール      |
| 10 PRESENCIA TANGUERA          | プレセンシア・タンゲーラ  |
| 11 PA'QUE TE OIGAN BANDONEÓN   | 聴け・バンドネオンの調べを |
| 12 CORAZÓN DE ARTISTA          | 芸術家の心         |
| 13 META FIERRO                 | メタ・フィエロ       |
| 14 EL CHOCLO                   | エル・チョコロ       |
| 15 LEYENDA GAUCHA              | gaucho の伝説    |
| 16 CAFÉ DOMÍNGUEZ              | カフェ・ドミンゲス     |
| 17 A ORLANDO GOÑI              | オルランド・ゴニに捧ぐ   |
| 18 LIBERTANGO                  | リベルタンゴ        |
| 19 LA CUMPARSITA               | ラ・クンパルシータ     |



---

# 第10回 「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

丹羽 宏

---

第10回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以降、中部リンコンと略記）は4月8日（日）13時より、齋藤富士郎 理事を迎えて、三重県は四日市市内のサロン・バー「茉莉花ジャスミン」で開催した。

当日の中部リンコン管内は名古屋市を始めとして桜祭りのイベントが各地で催されたこともあって出足への影響が懸念されたが、結果は53名（会員11名、ビジター42名）と寧ろ過去最高の参加者数となった。

今回の開催に当っては、このところ日本タンゴ・アカデミーが事業啓蒙の一環として取り組んでいる「ダンス愛好家とのコラボ」実現に、一歩踏み出そうと手探り状態ながらも検討してきた。

愛知県と岐阜県でタンゴ・ダンス教室を主宰する会員・新美 豊さんのアイデアもあって、同教室の生徒さんが多様なタンゴに触れる機会になればと揃って参加頂いた。更に、台湾から来日中の男性ダンサーと一宮のパートナー女性は、新美さんの紹介で来会され第3部の生演奏をバックに素晴らしいステップを披露された。また、会員・島田由美子さんからの申し入れで、岐阜県で主宰するバンドネオン教室の生徒さん一行を引率して参加頂いた。前記の生徒さんも含め若さ溢れる参加者が加わったことで、今までになかった華やいだ雰囲気の中でタンゴ・タンゴの時間を楽しむこととなった。

**【第1部】** 昨年4月の第8回リンコンに続いての登場となる、志摩市のベテラン・ファン・早川健太郎さんによる地元会員のレコード・コンサート。再び「ロドルフォ・ピアジ楽団」をテーマにして、在籍した歌手たちの特徴に言及するという解説をされた。プログラムの全11曲各々に登場する6人の歌手（A.ファルガス、J.オルティス、A.アモール、C.サーベドラ、H.ドゥバル、C.アルマグロ、T.イバニェス）が歌う曲について、歌手の特徴紹介や歌詞の大意をブリーフィングするなど、ピアジ・ファンならではの解説であった。例えば、お好きなJ.オルティスの唄い方では、「リズムへの絶妙な乗り方が好きだ」という具合である。積み置いたLPレコードのジャケットをかざしての解説は健在であった。

ピアジに始まってピアジに終るといった早川さんの思い出がピンピンと伝わって来るお話であった。2回に亘る解説内容をつき合わせると、ピアジのタンゴ人生を僅かながらも垣間見ることが出来るようか。懸念される体調を押しての来会解説に心から感謝したい。

**【第2部】** 本部招聘コンサートに先立って、理事 齋藤富士郎さんより日本タンゴ・アカデミーの近況報告とアカデミーへの建設的な意見があれば聞かせて欲しい旨の挨拶があった。

本日は『オスバルド・フレセド一代記』という偉大なマエストロが送った波乱万丈の人生を縦軸として括りを入れたテーマで解説された。若い世代の来会者にも大いに参考になったと思う。

先ずは、本日の解説手段について報告させて頂こう。中部リンコンとしては初めて、講演会とか講義などで活用されているパソコンとパワーポイントを駆使しての解説（プレゼン）である。曲が流れている間にも、説明文や写真などの映像に視線を集めることで納得度を高めることが出来る。今後は

レコ・コンなどでも積極的に取り込みを図りたいものだ。

初めの3曲は1920年代前半のアコスティック録音である。音質は兎も角、各楽器が全合奏で押し寄せてくる迫力は凄い。これが次の電気録音時代（1920年代後半、オデオン専属）になると、荒々しさが消えてドッシリとした溜めのある迫力に変ってくる。ここで問題の専属契約破棄事件が起きる。時代が進んで欧州帰りの30年代初期になると、一転してサロン風の落ち着いた演奏を新興のレコード会社に録音している。縦軸から得る俯瞰シナリオだからこそ、新しいタンゴ・ファンもスタイルの変遷を自分自身で察知出来る。客席からもこうした意見を耳にした。他の楽団指揮者においても試みてみたいものだ。

ここで書き添えておきたいことがある。それは齋藤さんの持論であるが、多くのファンが好む第1期オデオン時代のメリハリのあるスタイルは「レコード会社から強制されたものではないか」という見解である。すでに会誌TANGUEANDO EN JAPÓNに投稿済で一部の識者からは評価されている。

解説が進行する中で、フレセド自身が狙っていたスタイルの典型は1933年から15年間続いたビクトル第2期時代の演奏かも知れないとの仮説も示された。確かに欧米旅行を積んだフレセドであれば、ソフトで和声的にしっかりしたスタイルに帰着したと考えることも出来よう。

50年代に入ってから演奏では、歌われることも多いフレセドの自作曲「ビダ・ミーア」（我が人生）を取り上げ、歌詞の後半部分には将に人生論があるとして訳詞を準えながらの説明があった。この部分は通常（ラグリマ・リオスは全歌詞録音）割愛して歌われていないという。

以上のように、奥の深い「フレセド一代記」の解説であった。

なお、液晶プロジェクターの画面は映してみると意外に見辛かった。機種選定は要再考。

**【第3部】** 今回も、中部のタンゴ・ファンからの要望もあって地場グループの招聘演奏を行った。主に中部地方を中心に活動する会員・島田由美子さんが率いる「フェリスタンゴ」である。

今回初めての楽器構成というトリオ（バンドネオン、ピアノ、コントラバス）での演奏であったが、丹治清貴のコントラバスがチェロのパートでオブリガードを弾き、ソロを入れたりと大活躍した。

長井美香のピアノとのコンビネーションも抜群で会場が大いに沸いた。今後の楽しみである。

予定プログラムは全11曲だったが、島田さん得意のピアソラの「孤独の歳月」が急遽追加されてプログラムに重量感が出た。「コム・イル・フォー」など古典曲6曲を中心に、「忘却」などのピアソラ・タンゴ、ヨーロッパ・タンゴやポップスのタンゴ・バージョンで変化を持たせた、幅広い選曲・構成であった。バンドネオン教室の生徒さんは先生の奏法を真近でみるいい機会ともなった。

今回のミニ・ライブの圧巻は、何ととってもボランティアで参加して頂いたHiromi-Shimon組のダンスであろう。まずはA.スレダのヴァルス、「夢の中で」の演奏が始まるや颯爽と登場し、広いとは言えないフロアでサロン風のステップを踏まれた。さらに、最近ではライブで聴く機会が少なくなった古典曲、「ティグレ・ビエホ（老虎）」では2人の妙技がタップリと披露された。

12曲を演奏し終えた後はアンコールとなった。国内では「フェリスタンゴ」だけのレパートリー、R.ルイス・モレノの「パンチョスバー」に会場の老若男女はうっとり。エンディングと共にブラボーで一気に盛り上がったことは言うまでもない。こういう曲でのフィナーレもいいものだ。

**【リンコン懇親会】** リンコン終了後に同じ会場において、本日の解説等で大活躍の3人の方々（齋藤さん、早川さん、島田さん）を囲んで、光廣会員（静岡）はじめ、タンゴと話好きの全16人がタンゴ四

方山話の時間を過ぎた。飲み物には会員持込の「ピノ・エン・メンドーサ」が目立った。

以上、コメンテータ各位、演奏者、会員・ビジター参加者のご協力により、予定通り無事終えることが出来た。記録担当の海津会員（伊勢市）、オーディオ担当の鈴木会員（愛知）と梶島さん、施設担当の松田さんと持田さん、会計担当の佐藤（和）さん、お世話様でした。

次回開催は、10月21日（第3日曜日）を予定しています。

開催実行幹事



ロドルフォ・ピアジ楽団とその歌手を語る  
早川健太郎さん



オスバルト・フレセドー代記を語る齋藤富士郎さん



Hiromi-Shimon組のバイレ



パワーポイントを使った齋藤富士郎さんの説明と会場風景



トリオ「フェリスタンゴ」の演奏風景



NTA会員による集合写真



会場風景

## 〈プログラム〉

### 【第1部】地元会員によるレコード・コンサート

13:00 - 13:50

#### ～ピアノの魔術師 ロドルフォ・ピアジとその歌手たち～

#### RODOLFO BIAGI SU ORQUESTA Y SUS CANTORES

日本タンゴ・アカデミー会員〈志摩市〉 早川 健太郎

1. バンドネオンまかせ SON COSAS DEL BANDONEÓN (E.Rodriguez—E.Cadícamo)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Andrés Falgás、EMI-821593 (G.1939)
2. もう一度君に逢いたい QUIERO VERTE UNA VEZ MÁS (M.Canaro—J.M.Contursi)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Jorge Ortiz、BMT-021 (G.1940)
3. メルセ寺院の鐘 CARILLÓN DE LA MERCED (E.S.Discépolo—A.Le Pera)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Jorge Ortiz、BMT-021 (G.1941)
4. 冷淡 INDIFERENCIA (R. Biagi—J.C.Thorry)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Jorge Ortiz、BMT-021 (G.1942)
5. ミロンガが泣くとき CUANDO LLORA LA MILONGA (J.de Dios Filiberto—L.Mario)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Alberto Amor、Latina DL-158 (G.1946)
6. さらば草原よ ADIÓS PAMPA MÍA (Fco.Canaro—M.Mores—I.Pelay)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Alberto Amor、EMI-821593 (G.1946)
7. 今宵われ酔いしれて ESTA NOCHE ME EMBORRACHO (E.S.Discépolo)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Carlos Saavedra、DMO-55592 (G.1946)
8. 聖なるミロンギータ SANTA MILONGUITA (E.Delfino—E.Cadícamo)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Hugo Duval、EMI-595171 (G.1955)
9. 青い湖で EN EL LAGO AZUL (R.Rufino—A.Romay)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Hugo Duval、CBS (HARM) 7.005 (G.1959)
10. 眠れ我が子よ DUERME MI NIÑA (M.Canaro—V.Prestipino)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Carlos Almagro、MH-236515 (G.1962)
11. 狂乱の恋 LOCA DE AMOR (R.J.Podestá—E.Caviglia)  
Rodolfo Biagi y su Orq. Típ. Canta : Teófilo Ibáñez、BMT-021 (G.1938)

### 【第2部】本部招聘コンサート

14:00 - 15:10

#### ～オスバルド・フレセド 一代記～

日本タンゴ・アカデミー理事・編集長 齋藤 富士郎

- ☆ オルケスタ・ティピカ・セレクト時代 (新進気鋭のバンドネオン奏者)
- 1. ドン・エドゥアルド DON EDUARDO (David “Tito” Roccatagliata)  
Orquesta Típica Select N.Y. VICTOR a72811 (G.1920) Harlequin HQ CD 47
- ☆ ビクトル第1期 (1922～1925) (速いテンポで押しまくる)
- 2. 毛が7本 7 PELOS (O.Fresedo)  
Orq. Típ. O. Fresedo VICTOR 73367-A (G.1922) A.V.ALMA CTA-282
- 3. 間抜け女 SONSA (R.De Los Hoyos)  
Orq. Típ. O. Fresedo VICTOR 79565-A (G.1925) A.V.ALMA CTA-282

- ☆ オデオン第1期 (1925 ~ 1928) (やや遅いテンポでどっしりと構えた重厚なスタイル)
- 4. ラ・クムパルシータ LA CUMPARSITA (G. H. Matos Rodríguez)  
Orq. Típ. O. Fresedo DNO 5137 (G.1927) A.M.P. CD-1150M
- 5. 皮肉 IRONÍAS (V. Russo)  
Orq. Típ. O. Fresedo DNO 5193 (G. 1927) A.M.P. CD-1227M
- ☆ ブルンスウィック (1930 ~ 1932) (欧州から帰国して新たな方向を目指す)
- 6. ラ・カチルラ (ラ・カチーラ) LA CACHIRLA (E. Arolas)  
Orq. Típ. Osvaldo Fresedo BRUNSWICK 1439 (G. 1931-1932) A.M.P. CD-1111
- ☆ ビクトル第2期 (1933 ~ 1948) (フレセドの演奏スタイルの典型、歌ものが増えてくる)
- 7. 苦しみの跡の中に EN LA HUELLA DEL DOLOR (G. Del Ciancio)  
O. Fresedo y su Orq. Típ. / Canta: R. Ray VICTOR 37581 (G. 1934) A.M.P. CD-1259R
- 8. 老虎 TIGRE VIEJO (S. Grupillo)  
O. Fresedo y su Orq. Típ. Euro Records ,EU 17048 VICTOR 37632 (G.1934)
- ☆ コロンビア第1期 (1950 ~ 1952) (古典曲に加えてピアソラの作品も手掛ける)
- 9. 輝くばかり (「大成功するために」又は「恥をかかために」?) PARA LUCIRSE (A. Piazzolla)  
O. Fresedo y su Orq. Típ. COLUMBIA 301008 (G.1950) DBN=EMI 4 95377 2
- ☆ オデオン第2期 (1952 ~ 1957) (自らが経営するナイトクラブ「ランデヴー」で悠々と演奏活動)
- 10. 我が人生 VIDA MÍA (O. y E. Freedo)  
O. Fresedo y su Orq. Típ. Canta: H. Pacheco, Odeón 55560 (G.1952) EMI=Odeón TOCP-6820
- 11. 何故? ¿ POR QUÉ ? (O. y E. Fresedo)  
O. Fresedo y su Orq. Típ. Odeón 51776 (G. 1955) CAPITOL T10053
- ☆ コロンビア第2期 (1959 ~ 1980) (ステレオ時代に入り過剰なまでに華麗なスタイルとなる)
- 12. 我が愛しのブエノス・アイレス MI BUENOS AIRES QUERIDO (C. Gardel – A. Le Pera)  
O. Fresedo y su Orq. Típ. CBS COLUMBIA 8829 (G. 1966) COLUMBIA 2-493821

**【第3部】 FELIZ TANGO TRIO “CONCIERTO EN VIVO” 15 : 30 – 16 : 40**

**生演奏：フェリスタンゴ・トリオ**

**島田由美子：バンドネオン、丹治清貴：コントラバス、長井美香：ピアノ**

- 1. オブリビオン 〈忘却〉 OBLIVION (Ástor Piazzolla)
  - 2. リベルタンゴ LIBERTANGO (Ástor Piazzolla)
  - 3. 亜麻色の髪の乙女 (すぎやまこういち—橋本 淳)
  - 4. 碧空 BLAUDEL HIMMEL (Josef Rixner)
  - 5. 夢の中で ENSUEÑO (A.Sureda) Vals
  - 6. 孤独の歳月 AÑOS DE SOLEDAD (A.Piazzolla)
  - 7. エル・チョコロ EL CHOCLO (A.G.Villoldo.)
  - 8. フェリシア FELICIA (E.Saborido)
  - 9. 老虎 TIGRE VIEJO (S.Grupillo)
  - 10. エル・カブレ 〈野鳥の名〉 EL CABURÉ (A.De Bassi)
  - 11. コム・イル・フォー 〈きっちりと〉 COMME IL FAUT (E.Arolas)
  - 12. ラ・クムパルシータ LA CUMPARSITA (G.H.M.Rodríguez—E.Maroni—P.Contursi)
- アンコール パンチョス・バー PANCHOS BAR (R.Ruiz Moreno)

# 《神戸発・上田・山本タンゴ写真館(9)》

—フルビオ・サラマンカ楽団日本公演から—

＜1975年 関西地区公演＞

写真・資料提供：上田 登氏、山本 雅生氏



ステージ



ステージ



ロス・ブリジャンテス



フリオ・ロドルフォ



チヨコ



フルビオ・サラマンカ



ウーゴ・ピシオーネ



ママウリシオ・マルチェリ



E. ナポリ (左)、 B. ヒスバール (右)



ペドロ・アギラール



イグナシオ・バルボーサ



ラロ・ミチェリ



カルロス・ニエシ



ミゲル・カラスコ



ロマン・アリアス  
(中央コントラバス)



メンバー紹介

ORGANISTE  
**FULVIO SALAMANCA**

フルビオ・サラマンカ 〈ピアノ・編曲・指揮〉  
**Fulvio Salamanca**

アルベルト・フォンタンの紹介記事をお読みください。指揮者としてのサラマンカは、民主的な楽団運営で、良心的な音楽家として尊敬されています。作品では「マトラーカ」「南の風」「都会を横切って」などが他のアーティストのレコードによっても知られています。



マウリシオ・マルチェリ 〈第1バイオリン〉  
**Mauricio Marcelli**

今日の、もっとも素晴らしいソロ奏者のひとり、特にかつてオスバルド・ブグリエーセ楽団のトップ奏者として活動し、多くの名演がレコードにのこされています。つねに一流楽団に参加してきた名手で、自分でグループをひきいることもあり、最近サラマンカ楽団に入りました。他に国立交響楽団の第1バイオリン奏者でもあります。

*Sinceramente*



ペドロ・アギラル 〈バイオリン〉  
**Pedro Aguilar**

1940年からプロ音楽家として活動しています。また、音楽教授としてアルゼンチン屈指の存在で、彼に和声学や対位法をならったお弟子さんには、フルビオ・サラマンカ、オスバルド・ブグリエーセ、エドゥアルド・ロビエラなど、タンゴ界最高の顔ぶれがいます。



ベンハミン・ヒスベル 〈バイオリン〉  
**Benjamin Gisbert**

国立ブエノスアイレス音楽院でまなび、はじめクラシック楽団で活動していました。1958年からフルビオ・サラマンカ楽団に加わっています。現在もアルゼンチン第一の文化都市といわれるラプラタ市の交響楽団に在籍しています。

エウヘニオ・ナポリ 〈バイオリン〉  
**Eugenio Nápoli**

1926年にタンゴ界に入ったという大ベテラン。このような音楽家がいることは、楽団にとってタンゴの味を濃くするのにたいへん重要なことです。サラマンカ楽団には1961年から参加していますが、他に室内楽団や管弦楽団でも演奏しています。



ウーゴ・ピシオーネ 〈バイオリン〉  
**Hugo Piccione**

すでに27年間もブエノスアイレス・フィルハーモニーのメンバーであり、マヌエル・デ・ファリア音楽院出身のクラシックでも活動する奏者です。1964年からサラマンカ楽団に加わっており、タンゴ界のもっとも信頼されるバイオリン奏者のひとりです。



**Chiyoko**

「タンゴのプリンセシタ（お姫様）」と呼ばれるチヨコは、日本生まれですが、心はブエノスアイレス娘。だからタンゴの本当の味をつかんで、歌いあげることができるのです。小さいとき日本を出たので、スペイン語の方が日本語より話しやすいとのこと。両親とも日本人で花の栽培で成功した事業家です。本名は大塚千代子（おおつば・ちよこ）といいます。10何年ぶりに故国に帰ってきたわけです。



*De todo corazón  
Chiyoko  
1/4/70*

ラロ・ミチュリ (第1バンドネオン)  
Lalo Micheli

1965年からフルビオ・サラマンカ楽団において第1バンドネオンをつとめ、またピアノ・トリオに加わって妙技をきかせているソロ奏者です。12歳の時から少年タンゴ楽団に加わっていました。オスマル・マデルナ、ミゲル・カローなどの一流楽団でトップをつとめてきた優秀な音楽家です。



*Afectuosamente  
Lalo*



イグナシオ・バルボサ (バンドネオン)  
Ignacio Barbosa

1961年にエクトル・バレラ楽団に加わって来日しました。民音タンゴ・シリーズをずっと鑑賞してこられた方にはおなじみの顔でしょう。最近までバレラ楽団にいましたが、サラマンカのもとに移ってきて、二度目の日本旅行となったわけです。

*Ignacio Barbosa*



カルロス・ニエシ (バンドネオン)  
Carlos Niesi

若手の成長株として注目されており、1961年から、しばしばフルビオ・サラマンカ楽団で活動してきました。またファン・ダリエソ楽団のメンバーとして、すでに2回来日しており、次代のタンゴ界をになうテクニシャンのひとりです。

ミゲル・カラスコ (バンドネオン)  
Miguel Carrasco

1941年からタンゴ界に入った奏者です。サラマンカ楽団では1958年からずっと演奏しています。タンゴの良き時代を知っている貴重な音楽家のひとり、またこの楽団のスタイルを識りつくした人でもあります。



ロマン・アリアス (コントラバス)  
Román Arias

1941年からタンゴ界に入った、屈指のベース奏者です。ことに1959年から、バンドネオンの名手レオポルド・フェデリコの楽団に加わり、69年まで演奏したことで、その高い実力が認められました。ほかにフロリンド・サッソーネやアルマンド・ボンティエルの楽団に参加し、最近サラマンカ楽団のメンバーとなりました。



*Para el amigo  
con mucho afecto  
Julio Rodolfo*



フリオ・ロドルフォ (歌手)  
Julio Rodolfo

このひとは、最初ベース奏者でした。それもサッソーネやホセ・パッソ、スタンボーニなどの一流楽団で演奏したのですから、一級のプロだったのです。そして1965年に歌手に転向し、サラマンカ楽団でデビューしました。音楽は良くわかっているし、声は美しい、たいへん好評をばくして、この変身は大成功でした。1970年には、ソロ歌手としてカーネギー・ホールに出演したこともあります。

# INTERVIEW

## 佐藤 勝夫 (秋田市) さん

聞き手 西川 薫

**西川** 佐藤さんとは昨年夏の“東京タンゴ祭”で久しぶりにお会いしましたが、あの時は懐かしかったですね。今回はそれ以来となりますが、今日は佐藤さんとタンゴとの関わりについて色々お聞かせ願います。

**佐藤** 本当にお久しぶりでした。でも趣味を同じくする者同士だから、タンゴを語れば長年の時間的な空白なんかはそれこそ消し飛んでしまって、終演後の酒の席は時間が経つのが早すぎる、そんな愉快なひとときでしたよ。みんな喜んでくれました。

**西川** 確かにあの席での佐藤さんのお友達も皆さん気さくでシンパティコでしたから、初めての出会いとは思えない雰囲気でした。それでは生い立ちから教えてください。

### 〈タンゲーロにしてポルテーニョ〉

**佐藤** 生まれも育ちも秋田の海の玄関口、秋田港がある土崎の生まれです。ブエノス・アイレスのBOCAと同じような雰囲気の町で自称ポルテーニョです。生まれは1944年（昭和19年）の7月です。土崎は太平洋戦争の終戦日前日（1945.8.14）に日本最後の空爆を受けた地で知られていますが、小さい頃は被弾で出来た沼地が遊び場でした。また昨年東北震災の復興作業が立ち上がった時に自衛隊による支援物資がここから連日輸送された港です。



**西川** 秋田のポルテーニョかあ、いいですね。ところで、タンゲアンド・エン・ハポン No. 6号の座談会で、「タンゴとの出会いはカナロ来日前後」と話してましたが、その辺りのことを詳しく・・・

**佐藤** 中学生の頃からラジオ放送の音楽番組をよく聴いていました。ラテン音楽のリズムが心地良く心に響いたのでしょう。1950年代からラテン音楽ブームが到来したおかげで、一気にカブれてしまいました。1961年に来日したFco・カナロ楽団のテレビ放映が決定的で、今でも忘れられない出来事として記憶しています。当時の公演のことは本誌No.29に詳細が載っていますが、私もあれから半世紀が過

ぎ、未だにタンゴをひたすら追い求め続けており麻薬の音楽？に取り憑かれたことにでもなりますか。で、初めて買ったレコードが東芝から発売された《Canaro en Japón》でした。

それと高校在学中に恩師の佐々木かはん氏（元タンゴ・アカデミー理事、正式な名前は嘉範）と出会ったことで、授業以外のタンゴ世界の教育？を受けて次第に知識も増えて話し相手にまで成長させてもらいました。（笑い）

**西川** 僕も、あなたと佐々木さん、ここでは僕も親しみを込めて“かはんさん”と云いましょう、お二人には35～6年前に初めてお目にかかって以来のお付き合いですが、タンゴに対する情熱、愛情には頭が下がります。健康を取り戻し、今でも地元FM放送でタンゴ番組を持たれていることはとても心強いことです。その“かはんさん”の薫陶を受けたあなたは若くしてタンゴの魔力に取り憑かれ、今では古参の中毒患者ですが（笑い）。今、話しに出ましたカナロの日本公演に前後して学生時代の思い出などで印象に残っていることがありましたら・・・

**佐藤** う～ん、中毒患者ねえ（笑い）。そのころ秋田の田舎でもタンゴ喫茶がありましたよ。後で話しますが、「ボルテニア」と「ブルボン」の2店へ友人とよく出かけてはリクエストをかけてもらいました。また雑誌「中南米音楽」もこの当時から読み始めて、少しずつタンゴへの理解を深めました。あの頃はラジオもタンゴやラテンの番組があり、NHKの「リズムアワー」やTBS中島栄司さんの「これがタンゴだ!」、帆足まり子さんの「S盤アワー」などよく聴きましたね。懐かしい青春の思い出です。

**西川** そうか、あなたは冒頭昭和19年の生まれ

と云いましたが、そうすると僕とは2歳半しか変わらないので、考え方や価値観など似ているところがありますよ。僕は今話に出たラジオ放送などは、東京に出て一人暮らしを始めてからは遊び呆けて全然聞かなかったなあ。ライブ・ハウスには時々顔を出していたけれど、真面目なあなたとはそこら辺りが違う。もうその頃から、並行してサークル活動とかグループに加わるなどしていたのでしょうか・・・

### 〈今に続くグループ活動〉

**佐藤** 高校を卒業してすぐに秋田中南米音楽研究会に入りました。この会は昭和28年の発足で、喫茶店（ボルテニア）などを経営していた今も元気な長田俊一氏が代表で、当時から定例コンサートやタンゴの自主公演なども開催し、活発な活動を行っていました。やがて1977年に先輩達から会を引継ぎ秋田中南米音楽同好会と名称を変えて今に至ってます。以来今日まで月例会は欠かさず開催して来ました。

音楽ジャンルもタンゴを主体にキューバ音楽からフォルクローレなど、多様なラテン音楽を聴けるコンサートの雰囲気をはがけてや



〈第48回 合宿コンサート〉  
～秋田：田沢湖高原 ロッジアイリス

ってます。来年は発会60年の節目の年に当たりますので、記念のイベントを企画したいと思ってますが・・・

**西川** 多彩な歴史をお持ちなんだ・・・どんなフェスティバルになるのか楽しみです。秋田の同好会は昔からラテンやフォルクローレに造詣の深い会員が健在ですから、そりゃ～バリエティに富んだ企画になるでしょうね・・・ところで秋田の皆さんは他県の愛好家達との交流も盛んで、以前から連帯活動をしていますね。

**佐藤** ええ、青森の3団体（津軽ラテンの会、弘前タンゴ・アミーゴス、青森ラテンの会）とは兄弟のような仲良しグループです。年3回持ち回りの宿泊、合宿コンサートを開催してもう40年以上経ちました。当会は毎年春に開催を重ねて今年もつい10日ほど前に第48回目を開催したばかりです。近年は関東、関西からもはるばる駆けつけてくれる愛好家もおりますし、今年は福島県白河市、東京のベテランも新規に加わり22名が集い賑やかな合宿でした。西川さんも以前何度か来会してくれましたし、音楽情報の交換と親睦が主な目的ですが、美味しいお酒と音楽をいつも用意し遊んでいます。

**西川** そうそう、男鹿半島での開催年には家内・子供連れで参加しましたよ。あの時の化け物みたいな大杯での鯛の骨酒回し呑みは痛快だったなあ。真面目な話に戻しまして、あなたは古いものからピアソラまで幅広く聴いていますが、お好きな傾向、演奏家というと、どんなところになりますか。

### 〈好みはやはり“伝統派”ということに〉

**佐藤** タンゴに関しては欲張りです。古典から現代物まで幅広く何でもという感じですが、所謂

古き佳き時代のガエルディア・ビエハが中心になりますか、泣かせるタンゴには弱いですね。これは先輩たちの影響のお陰でしょう。楽団ですとO・T・ビクトル、R・フィルポのオルケスタ、J・マグリオ（パチョ）楽団、またC・デイ・サルリ楽団、O・プグリエーセ楽団、A・アンジェリス楽団、歌手ではC・ガルデル、I・コルシーニ、近年の歌手ではR・ゴジェネチエ、J・ソーサ、女性歌手ではA・ファルコン、A・バレーラといったところでしょうか。またA・ピアソラの来日公演には三度上京して生のステージ演奏を観て納得しました。楽屋では写真も撮り、サインももらえて感激でしたよ。

**西川** 女性歌手でA・バレーラを挙げるなんて、佐藤さんは鉄火肌で波長が合うのかしら、T・メレージョも好きだし・・・(笑い)。

でもお訊きしてみると好き嫌いとか、えり好みとかの先入観なしに全方位にアンテナを巡らしているなあ。加えてあなたは大変な量のコレクションをお持ちですが、お宝というか、お気に入りには・・・

**佐藤** お宝というほどのものは持ってませんが、強いていえば、先ほどの楽団の復刻盤がLPからCDと次々に日本でも頒布がありました。大変な量になりましたが総て我が棚にあります。

**西川** それは凄い！ 具体的には・・・

**佐藤** A.M.P.ポルテニア音楽同好会のタンゴ・コレクション（故大岩祥浩さん）やアルゼンチン・タンゴ愛好会（馬場明人さん）の膨大なSPからの秘蔵盤、復刻音源はまさに未知との遭遇の連続で、有難く感謝をしながら愛聴しています。これこそ私の生涯のお宝でしょう。特に欧州盤などの戦前盤には聴く度にタンゴの歴史と奥深さを常に感じています。

**西川** 確かに現在、大手レコード会社はタンゴに対して冷淡で、これは商売にならないからですが、それだけに愛好家による私家盤は大切な情報源ですね。

ここでお訊きしたいんですが、その膨大なコレクションの整理はどのようにされていますか。

**佐藤** 整理整頓は正直苦手なんで特別のことはやっておりません。購入時の登録だけです。

**西川** 特定の曲、たとえばラ・クンパル…の演奏者の資料とか、好きな時、好きな演奏家で聴きたいという時にヒョイと抜き出せる保管の方法とか・・・、

**佐藤** これが出来たら有難い話ですが、特定の楽団や歌手だけのデータのみパソコン入力しておりますが他は整理してません。ですからオムニバスに入っていると探すのに大変な時間を労することになるけれど、これも楽しいひとときですよ。

**西川** だけど大事なものは全部頭の中のコンピュータに入っているんだ（笑い）。そのコンピュータ、クラッシュしないようにしっかりメンテナンスしてください。ところで佐藤さんはこれまで何度も訪垂されていますが、昨年11月のブエノス訪問の主たる目的はなんでしたか？

### 〈タンゴはリオ・プラテンセ音楽との視点で〉

**佐藤** 旅行気分ですので大きな目的はありませんが、今回はウルグアイのモンテビデオを初めて訪れました。旧市街を散策し、マトス・ロドリゲスの生家（Casa de Becho）が以前NHK「名曲アルバム」で紹介されたので、ネットで住所を確認しタクシーを飛ばしました。旧市街の普通の住まいでしたが、玄関口にはラ・クンパルシータのお馴染みの楽譜が



〈Casa de Becho〉

カラーのタイルで飾られ、また壁面には数々のレリーフが貼られて、大作曲家を偲び存在の大きさを感じました。残念ながら内部には入ることが出来ませんでした・・・

**西川** それは公開されていないと云うことですか。

**佐藤** 隣の住宅の方に聞いても、詳しいことは判らないという返事でしたね。

また、本誌で故石川浩司さんによる作詞家のオメロ・マンシのMUSEOの訪問記が掲載されておりましたので、この機会に訪ねて内部を見学しました。館長も気さくなうえ好意的な方で、お話を伺う事が出来ました。博物館といっても、ロドリゲスの生家同様民家の内部を改造したもので、故人の偉大な遺産を展示紹介するには少しお粗末な住宅でしたよ。

またこの地域はブエノスの郊外にありますが、タクシーの運転手によると夜は行かないそうです。まして旅行者には危険地帯だそうで、注意が必要とこのことを聞かされ驚きました。

**西川** グループ行動でなければいけない、ということでしょうか。この前に資料として纏められた今回の訪問印象記録をもらいましたが、A・ポDESTAとの再会や、ネリー・オマ



〈ネリー・オマール 100歳記念TV番組から〉

ール100歳記念コンサートの直前TVインタビュー映像のチェックなど、実り多い旅行でしたね。

ここでアルゼンチンの事情は措きまして、国内の演奏家についてなにか感じるところがありましたら？ 当会員でもある小松夫妻、門奈さんらベテランの活躍に加えて若手演奏家も育てておりますが・・・

### 〈若手演奏家擡頭と聴き手の裾野の広がり〉

**佐藤** 東京タンゴ祭が今年も企画されましたので、今から楽しみです。タンゴファンにとってはタイプの違うライブを聴けることはとても興味があるところですね。ようやく若手演奏家がここにきて実力と人気も兼ね備えて、アルティスタそれぞれが独創的な演奏スタイルとオリジナル作品で表現しています。実に聴きごたえのあるコンサートですので、きっと若い人たちにも受け入れられると思います。

時代の流れとはいえタンゴが文化財？にならないように、私達アカデミー会員も機会あるごとに支援と協賛をして、ライブの応援をしていきたいです。

実は3月に小松亮太のオーケストラによる仙台のコンサートに出かけましたが、11人編成

を初めて聴きました。バンドネオンが4人にチェロを加えての編成は、視覚的にも音色の面でもボリューム感があって心地良かったですね。ブエノスでも10人以上の編成となると最近は余り耳にしませんから、日本で復活したのは何よりも嬉しく思いました。会場は満員のお客で盛り上がりましたし、帰り際のサイン会では異常？な長い列が出来て驚きました。

地方はライブが少ないせいもあると思いますが、タンゴへの興味が徐々に音楽ファンに浸透してきていると感じたコンサートでした。活動の場をもっと地方にも広げて欲しいものです。

**西川** 若手では小松亮太君の次の世代である北村、早川、平田らのバンドネオン、バイオリンの吉田篤、更に若いバンドネオンの鈴木崇朗、ジャンルにとらわれない仁詩や最年少と言える三浦一馬などが期待されます。こういう若手演奏家に注目する若いファン層も裾野が広がってほしいですし、そこからタンゴの活性化に繋がれば嬉しいことですよね。

それではこれまでの経験をもとに、今後こうしたい、こうであればなあという将来への夢とか希望がありましたら・・・

**佐藤** 夢ですか？ 高齢となってきたので夢も幻となりつつありますが、時代の変化とともにラテン音楽に興味を持つ若者たちが減ってきてますね。

実は昨年当会で開催した竹村淳さんを迎えてラテン音楽講座を有料で開催したところ、予想に反して90名程が来会し盛会でした。潜在ファンが意外と多いのに驚きました。音楽の魅力を伝える手段も、プロジェクターを使い大型画面の映像で視覚的にも楽しめる内容が良かったと思いますが、最近の若い人たち

にも興味を持ってもらえるように、映像を取り入れたコンサートをもっと増やし音楽への理解が得られる努力をこれからも微力ではありますが、もう少し続けていきたいです。

**西川** 昨年のタンゴ祭で出演者達が演奏を始める前に、事前撮りした来場者へのメッセージ映像なんかは弾き手と聴き手の距離を縮めるいい企画でしたものね。

では最後に日本アカデミーに対するご意見・要望がありましたら・・・

### 〈メディアへの働きかけをNTAが…〉

**佐藤** 地方はナマのタンゴに触れる機会や音楽情報が少なくなっています。そこでNHKにはタンゴを含めたラテン音楽情報の定時番組（FM放送）の復活を機会あるごとに訴えてきましたが、番組の再編成は残念ながらありません。日本タンゴ・アカデミーの総意として、タンゴやラテン音楽の持つ魅力と素晴らしさ、その必要性などを是非提言してほしいところです。先頃BS・TVで放映された「栗山千明の恋するタンゴ・カフェ」や「Amazing voice」などの内容はかつてない本格的な番組だったので、若者たちにも音楽との出会いのきっかけが出来たと思います。

印象などNHKに評価を伝えたところですが、再放送要望の働き掛けや番組にタンゴ歌手の登場を願う一人として、この機会にアカデミーからアプローチを進めてはどうですか？

また、各地のタンゴ・セミナーも都市部を中心に定期的に活発に開催されていて羨ましい限りです。反面地方は会員も少ないので致し方ないですが、新たな仲間を増やし続ける活動作りの場をアカデミーの力を借りて何とか持ちたいと願っていますし、今後は声を



〈竹村 淳 ラテン音楽パラダイス・in 秋田〉

あげていきたいと思います。その節は全国持ち回り開催など実現に協力をお願いいたします。

**西川** 確かにメディアのタンゴに対する姿勢は冷めていますね。彼らがタンゴに注意を向けて貰えるように、全国的な盛り上げを醸成していく必要があるでしょう。その為にも日本の各所でその気運を盛り上げてもらいたいものです。現在アカデミーに参加されている東北の会員は6名です。皆様が核になって、是非東北6県をひとつのエリアと考えたうえで情報発信の拠点作りに期待します。アカデミー事務局も応援しますので・・・今日は楽しい時間を共有出来まして本当に嬉しく思います。有り難うございました。

(2012/5/31収録)



# タンゴは何故に過ぎし日を想うのか

— 大好きなタンゴの詩から私が読み取ったもの —

大類 善啓

## 1. タンゴは人と人との関係性のドラマだ

『SHAME』（シェイム）という映画を見た。手元の辞書を引けば、「恥ずかしい思い」とか、「恥」とか「羞恥心」と出てくる。悪いことをした時などに感じる「恥（の気持ち）」や「不真面目」の意味としてあるようだ。

映画はこんな内容だ。主人公のブランドンは、ニューヨークに住む有能なエリートビジネスマン。しかし私生活では性依存症の男である。自分のアパートにコールガールを呼び、セックスする。地下鉄に乗れば、向かいの若い女性を視線で誘う。パソコンでポルノサイトを見る。彼の日常は、仕事以外はセックスがあるだけだ。なかなかの男前だが、恋人がいるわけではなく、ただただ勤勉にセックスに没頭するのだ。

そんな日常の中に突然、恋人に捨てられた妹が出現する。人との繋がりを捨てたようなブランドンに対して、愛情に飢え、傷つきながらも必死に生きる妹。その妹を見て、感情を殺していたような彼に人間的な感覚が甦ってくる。

妹に触発されるようにブランドンは、彼に好意をもつ職場の女性に声をかけ、デートに誘いベッドを共にしようとするが、できない。不能に陥ってしまう。恋人関係ではセックスができないのだ。

自暴自棄になる妹を責め、助けを求める妹を無視してニューヨークの街をさ迷うブランドン。翌朝のラストシーンは、ひとり嗚咽をもらし、声にならない声で泣くブランドンだ。救いようのない、深い孤独の男の涙である。

## 2. タンゴ、孤独な男の涙

このラストシーンの孤独な男の涙を見て、同じようにラストシーンで、男が一人泣く映画を思い出した。フェデリコ・フェリーニの作品『道』である。

やさしくて繊細で、やや痴呆的な女性ジェルソミーナは、母親に1万リラでザンパノに売られる。ザンパノは無口で乱暴な大男だ。自分の胸で鎖を引きちぎる怪力芸で縁日の舞台に立っている。ジェルソミーナは彼の助手になりパートナーになる。

ザンパノは放浪芸人のように村々を訪れ、客たちに芸を見せる。ジェルソミーナは仲間の放浪者イル・マット（狂人の意）というあだ名の綱渡り芸人から、どんなに目立たない小さなものでも何かの役に立っていると諭される。ジェルソミーナの存在も貧しい旅を共にしているザンパノの役に立っているのだ、ということ教わるのだ。

ひどい仕打ちばかりするあの無知なザンパノも、生きるために自分を必要としているのだとジェルソミーナは理解し、ザンパノに愛情を覚え別れることを諦める。

だがある日ザンパノは、いつも自分をからかってばかりいるイル・マットを殺してしまい、ジェル

ソミーナは正気を失ってしまう。ザンパノは、頭がおかしくなったジェルソミーナが自分を裏切るのではないかと疑い、眠っている彼女を置き去りにして身をかくす。独りになったザンパノはやがてジェルソミーナが死んだことを知る。

彼女のいない人生がいかに空しいかを悟ったザンパノは独り海を見ながら、ジェルソミーナとわが身を思ってしまうのだ。

### 3. 人間的な、より人間的なタンゴ世界

『道』は1950年代後半の作品である。それから約50年後の、2011年に制作された『SHAME』との違いは何だろうか。

ブランドンの世界には人と人とのつながりがない。人間的な感情がほとんど欠如している。セックスも極めて無機質だ。恋人同士だとセックスはうまくいかず、娼婦とはうまくいく。そこに見えるのは、人間的な交流や感情がなく極めて機械的な性の営みだ。

ところがザンパノには人間的な感情が横溢している。ジェルソミーナを失った悲しみがある。ブランドンにはそんな悲しみはない。人と人とのつながりがない、人と人との関係性がないのだ。

なぜかこの二つの映画作品を比べて「タンゴの世界」を思った。タンゴはまさに人と人との関係性のドラマだといえるだろう。最もタンゴ的世界から遠いもの、それが『SHAME』の世界であり、『道』の世界こそタンゴそのものではないだろうか。

タンゴは実に人間的な世界を描いていると思う。

そこで、私の好きなタンゴを5つほど古い順から取り出して考えてみたい。

まず、『MI NOCHE TRISTE (わが悲しみの夜)』、パスクアル・コントゥルシ作詩、サムエル・カストリオータ作曲)を挙げよう。1916年の作品、カルロス・ガルデルがタンゴ歌手として歌った最初の曲だ。ガルデルはこの作品を気に入って、レパートリーにしている。

「俺の人生が一番良かった時に 俺を捨てていった女 俺の魂を傷つけ、心に刺を残したまま・・・俺がおまえを愛していることも おまえが俺の喜びであり 燃えたぎるような夢だということも みんな知っていながら 俺にはもう慰めもなく おまえの愛を忘れようと 酒に身をまかせている」(西村秀人訳、CD:SC-3140-41カルロス・ガルデル『大いなる遺産』)

次は『VOLVER (帰郷)』(アルフレド・レ・ペーラ作詩 カルロス・ガルデル作曲)だ。1935年、映画『想いの届く日』でガルデルが主演し自ら歌った。

「帰郷 額にはしわ 私のこめかみには 時を感じさせる白いもの 今実感している人生なんてただ一吹きのみ風 二十年なんて取るに足らない 視線は熱く 闇の中をさまよい おまえを探してその名を呼ぶ 生きてゆく そのたび



泣けてくる 甘い昔の思い出に つながれたまま」(西村秀人訳、前掲作品から)

レ・ペーラはもともと脚本家で、映画『メロディーア・デ・アラバル』(場末のメロディー)の脚本も書いている。この『場末のメロディー』も私の大好きなタンゴである。

#### 4. 郷愁(ノスタルヒアス)がタンゴを生み、心を癒す

『NOSTALGIAS(ノスタルヒアス)』は1936年の作品。エンリケ・カディカモ作詩 ファン・カルロス・コビアン作曲のこの作品は、失った恋へのノスタルジーをテーマにしている。

「私は心を酔わせたい。苦しいこの愛を消すために。バンドネオンよ、灰色のタンゴを嘆け、おまえもセンチメンタルな愛に傷ついているのか。懐かしい! 彼女の狂おしい笑い声、炎のような息吹き。兄弟よ、私は乞いたくない、泣きたくない、もう生きられないと言いたくない。悲しい孤独の中から、私は見るだろう、青春のバラが死んで落ちてゆくのを」(石川浩司編 飯塚久夫・蟹江丈夫・高場将美・高野利雄著『タンゴ名曲事典』)

『UNO(男とは・・・だ)』は、ディセポロ作詩マリアーノ・モーレス作曲、1943年の作品だ。

「すでに失ったと同じ心を今もぼくが 持っていたのなら、昔ぼくの心をずたずたにした女のことなど忘れて 君を愛することができたのなら、情熱をこめて 君を抱き、ぼくも恋の涙を流したかもしれない。(中略)

君のような清らかな女性は、その愛で ぼくの希望をかなえてくれたかもしれないのに苦しみの中で男はただ一人 ただ一人煉獄の責め苦を受けるものなのだ けれど残酷な冷たさは憎しみよりも尚始末が悪い どうすることもできない魂の廃趾 身の気のよだつ愛の墓場 ぼくは永遠に呪う、だって、すべての夢をぼくは奪われたのだから」(細川幸夫著『対訳注解 永遠のタンゴ』)

そして最後が『SUR(南)』、オメロ・マンシ作詩、アニバル・トロイロ作曲の作品だ。

「サンファンとポエド通りの古い街角、そして一面の空  
ポンページャ地区、その先は洪水。思い出の中の恋人の  
きみの黒髪 そしてくさようなら>の中に浮かぶきみの名前

鍛冶屋とぬかるみと大草原の街角、きみの家、きみの歩道、そして軒先、そして雑草とアルファルファの薫りが ふたたび私の心を満たす。

南・・・土の長い塀・・・南・・・酒屋の明かりひとつ もうきみは 昔のように店の窓に寄りかかって きみを待っている わたしを見ることはないだろう

もうわたしは ポンページャ地区の夜ごと夜ごと 静かに語り合うふたりの歩みを 星たちで照らすことはないだろう

場末の通りたちと月たち そしてきみの窓にいるわたしの愛 すべては死んでしまった、もうわた



しにはわかっている・・・。」(高場将美訳)

## 5. タンゴ、望郷へ<sup>さまよ</sup>彷徨う魂の叫び

移民の街、ブエノスアイレスの港町ボカ。その裏町ボカで恋に生き、また女に振られ、人生に彷徨った末の彼らの望郷の念は、痛いようにわかる。しかしどうしてこうも、失われた恋や過ぎ去った日々<sup>に</sup>に拘泥するのだろうか。強い懐郷への想いがそうさせるのだろうか。

「(深い哀愁とはげしい訴えをもつタンゴの性格の) 根本は、悲劇性を好む民族の性格に由来するもの」(『タンゴ入門』(大岩祥浩、島崎長次郎、中島栄司共著)だという指摘もある。しかし、もし「悲劇性を好む」というのであれば、それ

は民族性と言いきれないのではないか。もともと固有の民族性というものは確としてあるわけではないと思う。その時々<sup>の</sup>の社会状況や環境、その民族を取り囲む状況によって性格は規定され生まれてくるものではないだろうか。

言えることは、異郷に来て挫折を体験し、過去を悔やむ思いなどをナルシスティックに語り、そのことによって自己を慰め、後悔に満ちた過去を乗り越えたいと思う人々の心情である。それは同じような状況に置かれれば、どのような人間であれ民族であれ、大なり小なり、そのような心情に浸るものだと思う。

私が考えるのは、タンゴはなぜ過去に固執するのか なぜ回想なのか、ということである。なぜ綿々たる恨み節なのかである。それもほとんどは男の悔恨の情だ。タンゴほど孤独な男たちのメランコリックな心情を歌っているものはない。

こうも言えるのではないか。タンゴは何故、未来を語ろうとしないかである。

タンゴは、およそ前向き志向でない。いわゆるポジティブ思考でもない。タンゴほど、生産的ではなく、科学や工業や経済の発展を目指すといった発想からはほど遠いものはない。というよりも、まるで反対の発想だ。更に云えば、タンゴほど国家的発想から嫌われるものはないと思う。そこに私などは魅力を感じ、もしかしたらそれはタンゴの本質の一つではないかとも思う。

ある種のマゾヒズムの心理に浸っているとも言えそうだ。故郷に帰りたくとも帰れないやるせなさ。新天地で夢破れた男たちの、故郷を遠く離れた深い思いと侘しい思い。その憂鬱なる心情が痛いように響き、そこに私(たち)の思い、聴くものの思いが重なる。

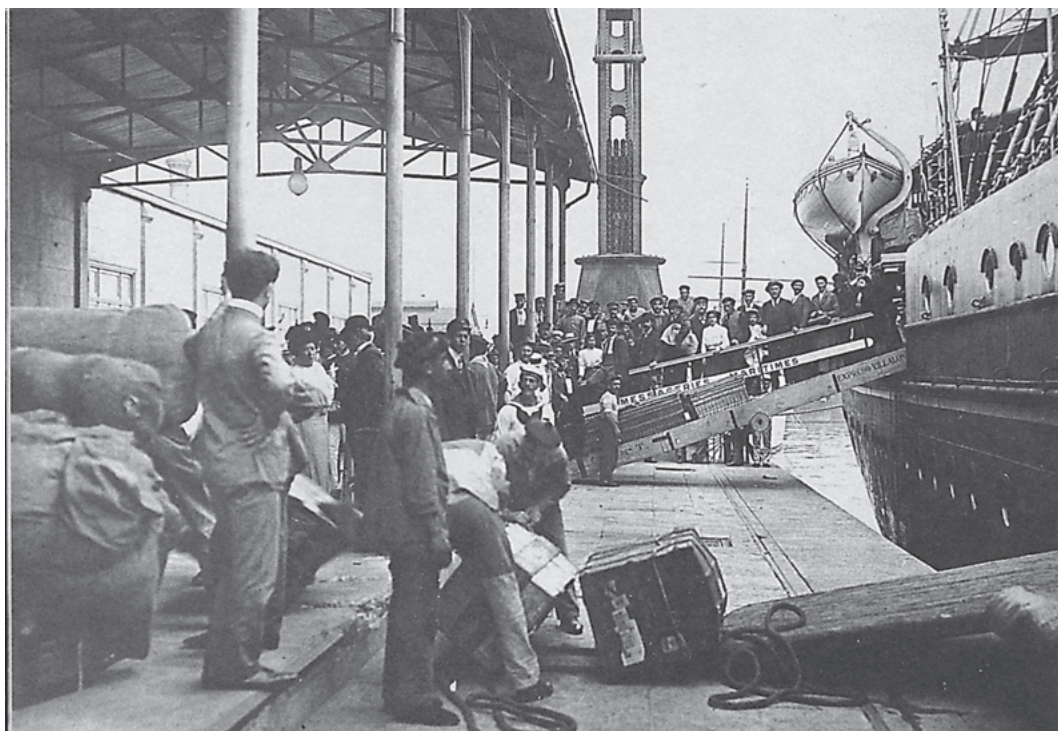
自ら命を絶つわけでなく、生きる。生きなければいけない。苦しい現実の中で傷ついた己<sup>おのれ</sup>のやるせないような感情。荒んだ気持ち。そんな心模様を郷愁(ノスタルヒアス)は癒してくれるのだと思う。

移民たちの夢破れた思い、その挫折した心情を癒してくれるのはナルシスティックに「自らの物語」を創ることにあるのかもしれない。「自らの物語」を創ることによって、辛うじて生きることが出来るのだ、とも言えようか。

現代でも、夢破れた過去の移民たちの亡霊が今なお連綿とブエノスアイレスの男たちにまわりつ



いているのかもしれない。ブエノスアイレスが「精神分析の都」（大嶋仁著『精神分析の都　ブエノス・アイレス幻視』）といわれる所以も、そんなところに遠因があるのかもしれない。



フランス船からブエノス・アイレスに上陸する移民たち（1900年代初頭）



1900年代初頭のブエノス・アイレスの陋巷の子供たち

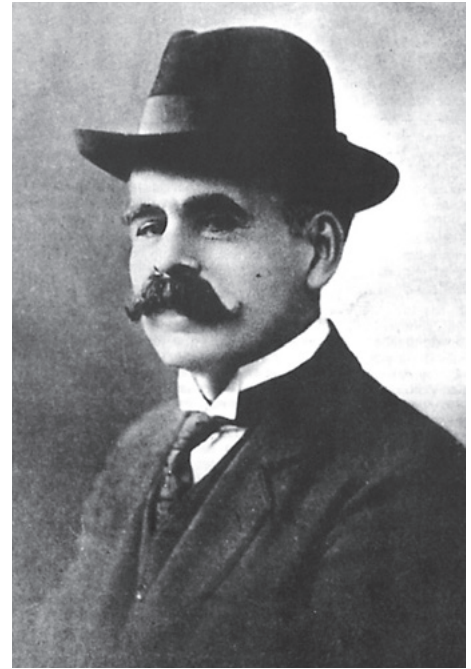
A. ビジョルド / P. コントウルシ / S. リンニグ

高場 将美  
Masami Takaba

## アンヘル・ビジョルド Ángel Villoldo

タンゴはダンスとして生まれたので、初めは歌は付かなかった。ただし、娼婦のいる酒場や、そんな街角で、酔っばらいたちが、ふざけた歌詞で、タンゴのリズムでうたうことはあった。

一般の人々が楽しむタンゴの歌は、サルスエーラ（スペイン起源の大衆・民衆的オペレッタ）にあった。スペインのタンゴと、アルゼンチン＝ウルグアイのタンゴは、19世紀には、音楽の形は同一といってよいものだった（表現法、感情は異なったが）。1897年にブエノスアイレスで上演されたサルスエーラ『土地っ子の正義 *Justicia Criolla*』で、ダンス自慢の黒人がうたう楽しいタンゴが、たいへん受けたようだ。作詞者エセキエル・ソリア *Ezequiel Soria* はアルゼンチンの劇作家。作曲者アントーニオ・レイノーソ *Antonio Reynoso* は、スペインのバスク地方出身で、18才のとき両親とともにブエノスアイレスに移住してきたクラシック音楽家だった。



また、ミュージックホール系（呼び名はいろいろだが）の小劇場・演芸場でも、タンゴのリズムに乗った歌があった。今のタンゴのリズムとは違う、現在は「ミロンガ」と呼んでいる軽やかな楽しいリズムである。歌詞の内容は、サルスエーラと同様で、主人公の楽しい性格をアピールするものだった。「歌のタンゴ」というより、「タンゴのリズムをもったコミック・ソング」だった。

アンヘル・ビジョルドは、このような、歌のタンゴが確立する以前の、タンゴの歌の第一人者である。タンゴ最初の作詞家と呼んでもいいだろう。『エル・チョコロ *El choclo*』を筆頭に、今日も愛されつづける数々のすばらしいタンゴの作曲者でもある。1900年代のタンゴ最高の表現者といえる。作曲家としては今日も超有名人だが、ここでは作詞家としての面をご紹介します（人格・個性は、作詞と作曲で変わるものではないけれど）。

ビジョルドは、1861年（文久元年！）2月16日にブエノスアイレスに生まれ、同市の南の場末バラカス地区で育ったらしい。父親はウルグアイ人だったと伝えられる（確証も反証もない）。早く亡くなったか蒸発したと思われる。母親はアルゼンチンの地方出身らしい。アイロン掛けなどの仕事をしていて家はたいへん貧しく、アンヘルはイタリア移民の一家に養育されたらしい。

子どものころから、雑多な仕事で働いた。クワルテアドール（ぬかるみにはまった荷馬車を引き出す職業）もしたし、サーカスの道化にもなった。また近隣の酒場・演芸場の芸人でもあった。ひとり

でギターを弾きながらハーモニカを吹く芸もした（ずっと後年、有名人になって後だが、ギター入門の教則本を出している）。彼が18才のころ、ミロンガ（いわゆる社会の底辺の人たちのダンス・パーティ）で、乱暴で即興的なダンスのスタイルが「タンゴ」という名前で流行しはじめた。

ビジョルドが34才のとき、1895年（明治28年）の国勢調査では「職業：活版工」と申告しているそうだ。小学校（寺子屋？）には行っていないので、自分で読み書きを勉強したのだろう。また、印刷所で働けば、ますます言葉が学べる。ただし、わたしの考えでは、これほどの人は、生まれつき言葉の感覚・才能といったものが豊かなので、教育なんか必要ないはずだ。

1903年に、タンゴ『エル・ポルテニート（ブエノスアイレスっ子）*El porteño*』を作詞作曲、コメディアンでテノール歌手のアルフレード・ゴッビ *Alfredo Gobbi*（1877 - 1938）がうたって、大流行した。ゴッビは親友で、じぶんでも作詞作曲したので、即興的に歌詞を一部変えてうたっていたかもしれない。彼の録音（1907年？）による歌詞は、イタリア移民のなまりが入っている。

\* スペイン語の詩では、改行は非常に重要だが、スペースの都合で、この記事では、/（スラッシュ）で代用させていただく。美しくなくてごめんなさい。

*“Soy hico de Buenos Aires, / por apodo El Porteño, / criollo más compadrito /  
que en esta tierra nació. / Cuando un tango en la vigüela / rasguea algún compañero, /  
no hay nadie en el barrio entero / que baile mejor que yo.”*

（わたしはブエノスアイレスの息子。あだ名はエル・ポルテニート（あのブエノスアイレスっ子）。この土地に生まれた、いちばん男意気の土地っ子。タンゴを1曲、ギターで、だれか仲間がかき鳴らせば、この町内にはひとりも、わたしよりうまく踊れる者はいない）

1905年には、ミュージックホールの女性歌手のために、ピアノ奏者エンリーケ・サボリド *Enrique Saborido*（1876 -1941）の既成曲に作詞して成功した。今日も、女性歌手の必須レパートリーみたいになっている『ラ・モローチャ（褐色の肌の女性）*La morocha*』である。

*“Yo soy la morocha, / la más agraciada, / la más renombrada / de esta población. /  
Soy la que al paisano, / muy de madrugada, / muy de madrugada / brinda un cimarrón.”*

（わたしはモローチャ。この村で、いちばん魅力たっぷりの、いちばん名高い女。あの村男に、朝とっても早く、そう 朝早く、お砂糖を入れないマテ茶を上げるのが、このわたし）

このころから、ビジョルドは、人気のある新聞雑誌に、ブエノスアイレスの街角の風俗を描いた読み物を寄稿する文筆家の仕事もした。ある大新聞の印刷所にいたときスカウトされたのだそうだ。

ビジョルドの街角スケッチは、すべて会話体で、しかも定型詩の形をもった韻文だ。

1910年前後（年代はおおざっぱに考えてください）、自作の曲に歌詞をつけて、ギターを弾きながらうたい、かなり多くのレコードも録音した。アーティスト仲間から尊敬される存在だった。

オペレッタや大衆演芸場の舞台にふさわしいタンゴ……機知に富んだ、だれでも心が浮き立つような歌詞……でも、1910年代には、タンゴはメランコリックな悲しい音楽になった。ビジョルドが生きているうちに、彼の時代は終わったのだ。子どもと同じ貧困にもどって、1919年10月14日没。58才だった。

## パスクワール・コントウルシ Pascual Contursi

タンゴの音楽がメランコリックで悲しくなったとき、はじめて「タンゴの歌」というジャンルが本物になった。単に「歌詞の付いたタンゴ」ではなく、タンゴによる大衆歌曲というジャンルの創始者がパスクワール・コントウルシである。

彼の創作には、ふたつの源泉がある。ひとつは、ビョールドに代表されるような、舞台の登場人物がうたうのにふさわしい、タンゴのリズムをもった楽しい歌。もうひとつは、パジャドール（ガウチョの吟遊詩人）の物語り歌である。パジャドールの歌詞（つねに自作）には、文語体ともいべき硬いことばと、ガウチョ独自のことば（アルゼンチン＝ウルグアイの地方的表現）が混在する。コントウルシは、文法はときに文語体だが（大衆向けの歌詞といえども「詩」なので）、単語は日常語ばかりで、ルンファルド（この地方の都会のスラング）も自然に、たくさん使った。背景は大草原ではなく、都市の狭い部屋が舞台だった。パジャドールとの共通点は「孤独」にある。



コントウルシは、1888年11月18日に、ブエノスアイレス州の町で、イタリア移民の家に生まれ、幼いときに首都のサンクリストバル地区に引っ越してきた。子どものときから、アーティストにあこがれ、詩をつくり、語っていた。1914年に、いろいろあって（貧乏と人間関係のもつれで精神不安定になったのだろう）、ブエノスアイレスにいられなくなり、ウルグアイの首都モンテビデオに流れてきた。10代なかばの女性を新婚そうそう、置き去りにした。

モンテビデオでは、アルティーガス劇場の上階にあるキャバレー《ムーラン・ルージュ》に、歌手として出演した——その店の前にあるホテルの屋根裏部屋に住んだ。ギター弾き語りで、カルロス・ガルデール *Carlos Gardel* (? - 1935) のレパートリーなどフォルクローレ（そういう用語はなかったが）そして、ピアノ奏者カルロス・ワーレン *Carlos Warren* の3重奏団で、タンゴを歌ったらしい。タンゴは、その時の流行曲に、自分で歌詞を付けたもの。その歌詞は、曲によっては、ビョールドの流儀の楽しいもの、皮肉なもの、機知に富んだおもしろいもの……でも、1916年に、こんな歌詞をつくって歌った。

*“Percanta que me amuraste / en lo mejor de mi vida, / dejándome el alma herida /  
y espina en el corazón, / sabiendo que te quería, / que vos eras mi alegría /  
y mi sueño abrasador, / para mí ya no hay consuelo / y por eso me encurdelo /  
pa' olvidarme de tu amor. / . . . . /  
La guitarra, en el ropero / todavía está colgada: / nadie en ella canta nada /  
ni hace sus cuerdas vibrar. / Y la lámpara del cuarto / también tu ausencia ha sentido /  
porque su luz no ha querido / mi noche triste alumbrar.”*

（わたしの人生のいちばんすてきな時に、わたしを置き去りにした女よ——わたしの魂に傷を、心



にトゲを残して。わたしがあなたを愛していたことを、あなたがわたしの喜びであり、わたしを熱く燃やす夢だったことを、知りながら。わたしにはもう、なぐさめはない。だからわたしは酔っぱらう、あなたの愛を忘れるために。……………ギターは洋服戸棚に、いまだに吊るされている。それに乗ってうたうひとも、その弦を弾いて震わせる人も、いない。そして部屋のランプもまた、あなたのいないことを嘆いているのにちがいない。なぜなら、その光は照らしてくれようとしなから——わたしの悲しい夜を)

——この曲の主人公のモデルが誰かについて、いくつか説があるが、それはこのさい重要なことではない。この歌詞には、作者と一体化した、場末の孤独な男が生きていて、心の真実を、現実的に語っている。詩作のスタイルは、ガウチョの吟遊詩人の語り歌と同じ形の定型詩である。

コントウルシは、ピアニスト、サムエール・カストリオータ *Samuel Castriota* (1885 - 1932) が演奏する自作タンゴ『リタ (女性の名前) Lita』のメロディが気に入って、そこに歌詞を乗せた。コントウルシほど才能がない人でも、1～3回聴いたくらいでメロディをすっかり暗記してしまう人はたくさんいる。不思議なのは、カストリオータが、歌詞が付くなんて思ってもいないで、ガウチョの定型詩にぴったりの寸法・構成のメロディをつくっていたことだ。運命ですかね？

この曲は、『わが悲しみの夜 *Mi noche triste*』と、歌詞にふさわしい題に改められ、1917年にカルロス・ガルデールが録音したことで、広く知られ、人々の深い共感呼んだ。「タンゴ歌曲」の第1号と認められている。時期的には、コントウルシのモンテビデオ時代のはじめ(1914年)にも、すばらしい歌詞があった。たとえば、ピアニスト、コビアーン *Juan Carlos Cobián* (1896 - 1953) 作曲の『エル・モティーボ (音楽用語の「動機、モチーフ」) *El motivo*』に乗せた『あわれな女 *Pobre paica*』は、転落してゆくキャバレーの女性に歌いかけて、聴くものを泣かせる。

歌われるタンゴの大成功によって、大衆演劇でも、挿入歌のタンゴ新曲が興業成績を左右する時代が来た。コントウルシも芝居の台本作家・作詞家になった。1924年の『もしもあなたが知ってくれたら *Si supieras*』は、芝居の挿入歌、そしてガルデールのレコードで大評判になった。この曲の原題は『ラ・クンパルシータ *La cumparsita*』で、コントウルシが1916年に出演したモンテビデオのキャバレーで、ブエノスアイレスから来たピアニスト、ロベルト・フィルポ *Roberto Firpo* (1884 - 1969) の楽団の演奏で聴いて覚えていたのだ。作曲者はキャバレー経営者の息子、マトス・ロドリゲス *G.H. Matos Rodriguez* (1897 - 1948) と、フィルポ (著作権登録はせず) だ。コントウルシは、マトスのつくった部分——後年、演奏でもっとも愛されている部分——を、自作の新しいメロディに変えた (原作の和音はそのまま)。その程度の「作曲」もできたわけだ。

タンゴのアーティストがヨーロッパで活躍する時代が来て、コントウルシも活動の場を求めて、1927年にパリに渡った。でも、作詞・台本作家では仕事はむずかしい。1928年に、ギタリスト、オラーシオ・ペットロッシ *Horacio Pettorossi* (1896 - 1960) 作曲の——著作権登録は、この曲を買い取った楽団指揮者バチーチャ *Juan Deambroggio "Bachicha"* (1890 - 1963) ——『場末のバンドネオン *Bandoneón arrabalero*』を発表したのが唯一の、そしてすばらしい足跡。

この間に精神が悪化し、彼が危険な状態にあることに気づいたカルロス・ガルデールが、費用を負担して、パリからブエノスアイレスに送り返した。帰国して病院に入り、1932年5月29日に没。偶然だろうが、その2ヶ月後に『わが悲しみの夜』の作曲者カストリオータも亡くなった。

## サムエル・リンニグ Samuel Linnig (1888 - 19)

前書きもなく始めてしまったが、この列伝は、その作詞家の最初の重要な作品が公表された時の順番で書いていこうと決めていた。量（作品の数）は関係ないし、作品の質で優劣を比較することなどは論外だからだ。どの作詞家も（この列伝に出てこない人でも）ぜんぶ大事な存在だ。

最初のふたりは、創始者だから問題ないのだが、その次の時代になって困った。1920年に、複数の重要な作詞家が同時に登場してくる。細かく調べれば、曲の初演日がわかるものもあるけれど……以下の登場順は、厳密ではないことを、お断りしておきたい（まったく順不同でもありません）。

さて、『わが悲しみの夜』の大成功によって、タンゴの歌というジャンルが確立し、ミュージックホール系の小劇場（お客は男性ばかり。女性は同伴の愛人たち）でも、一般的な芝居の劇中にも、そのレパトリーが増えてきた。特に、大衆演劇では、ふつうの人は行かない場所であるキャバレーを舞台にした男女関係のドラマが、たいへん喜ばれた。その場面で、俳優がタンゴ（劇に合わせて作詞作曲された新曲）を歌うのである。



作詞作曲の実態については、いろいろな場合があるだろうが、一般的には、まず作曲家が、歌詞の付けやすい形・構造のメロディをつくり、それに乗せて歌詞を付けたと思われる。

サムエル・リンニグは、1888年6月12日にモンテビデオで生まれた。父親はベルギー人（姓はフランドル語で「リンニヒ」か?）、母親はスペインのバスク地方からの移民だった。父は商人で、ある有力政治家の秘書だったというから、いわゆる社会的地位は高かったようだ。

いつのころか、サムエルは、サーカス劇団のコメディアンを経て、ブエノスアイレスのボヘミアンの集まるカフェの常連になっていた。客は、文学青年・役者・演劇関係者などである。彼は金髪で、いつも山高帽に白手袋、ステッキを持った正装で異彩を放っていた。見るからに神経質な若者だった。彼にとっては、ギャンブルが人生のすべてだった。ふつうに生活する気持ちはまったくなかった（結婚しなかったが、息子をひとり残したとのこと）。たいへん高い教養をもっていたいっぽう、売春婦の隠語にも精通していた。彼が、あるカフェで文学論をふるっていたところを、一流の文芸雑誌からスカウトされ、そこに芸術・演劇評論や詩を発表するようになった。1912年、彼は20代のなかばだった。

1915年から実際に自分で劇をつくるようになった。作品は少なく、劇作家としての評価は低い。ただし、とても人柄がよく（いい意味でのお坊ちゃんでしょうか?）、また組合での献身的な働きから、演劇関係者の間では、とても愛され、尊重される存在だった。

1922年に、1幕のサイネーテ（スペイン起源の民衆的題材のコメディ）『デリカテッセン・ハウス *Delikatessen Hauss*』を発表した。共作者がアルゼンチン演劇の代表者のひとりである大物ワイスバック *Alberto Weisbach* (1883 - 1929) だったのに、出来が悪く、初演の幕が下りると、ブーイングを受けた。そのとき作者サムエルは毅然として舞台に出て行き、「拍手をくれた皆様、ありがとう。拍手しなかった人は愚か者だ」と述べたので場内は怒声で満ちた。怒った客が待ち構えているので、サムエー

ルは、変装して裏口から逃げ出さなければならなかった。

ただし、劇中で女優マリーア・エステール・ポデスター *María Ester Podestá* がうたったタンゴ『ミロンギータ *Milonguita*』は、劇の不評からは信じられない大流行をした。

“¿Te acordás, Milonguita? Vos eras / la pebeta más linda 'e Chiclana; /  
la pollera cortona y las trenzas, / y en las trenzas un beso de sol. /  
Y en aquellas noches de verano, / ¿qué soñaba tu almita, mujer, /  
al oír en la esquina algún tango / chamuyarte bajito de amor? /  
Esthercita, / hoy te llaman Milonguita, /  
flor de noche y de placer, / flor de lujo y cabaret. /  
Milonguita, / los hombres te han hecho mal /  
y hoy darías toda tu alma / por vestirte de percal.”

（覚えているかい？ ミロンギータ。きみはチクラーナ地区のいちばんきれいな娘だった。そしてあの夏の夜、おんなよ、きみの魂は何を夢見ていたのか？ 街角で、なにかタンゴが、小声できみに愛を語るのを聞いて。／エステール、きょう人はきみをミロンギータと呼ぶ。夜と快樂の花。贅沢（ぜいたく）とキャバレーの花。ミロンギータ、男たちがきみを傷つけた。そしてきょう、きみは魂のすべてを与えるだろう、ふたたびベルカールのドレスを着ることができるものなら」

ミロンガ（愛称ミロンギータ）ということばは、大衆のダンスする場所、そこから広がってキャバレーをも意味したが、ここではキャバレーのダンサー（男の相手をする）を指している。また、ベルカール（日本名キャラコ）は、日本で「貧乏人の絹」と呼ばれた木綿の布地で、場末の女性の盛装に使われた。これらのことばの、こういう使いかたは、サムエールの発明ではないにしても、この歌詞によって広く知られ、一般のイメージに定着した。この曲——作曲：エンリーケ・デルフィーノ *Enrique Delfino*（1895 - 1969）——は、カルロス・ガルデルと、スペインのディーヴァ・歌姫ラケール・メリェール *Raquel Meller* のレコードで国際的に有名になった。

この曲の成功にあやかろうと、サムエール・リンニグは、『ミロンギータ』と題する芝居を執筆、1922年に人気劇団が上演したが、たいへん不評だった。しかし劇中でスター女優マノリータ・ポリ *Manolita Poli* が歌った、カルロス・フローレス *Carlos Vicente Geróni Flores*（1895 - 1953）作曲のタンゴ『長い金髪の娘 *Melenita de oro*』は評判になった。キャバレーである夜知った女性……枕に金髪を残して去っていった……みごとなメロドラマで、わたしはとっても好きな歌詞である。

彼が作詞したのは、あと1曲だけ。1925年に、同じ劇団・作曲者で上演された芝居『アルシーナ橋 *Puente Alsina*』の挿入歌『銀の鐘 *Campana de plata*』である。やくざものが登場し、ナイフがきらめき、悪くない歌詞だが、コーラスが必要な長い構成なので流行曲にはならなかった。

この劇の初演の夜、舞台挨拶するべき作者は来なかった。翌日、劇界の友人たちが自宅を訪ねると、原因不明の高熱で苦しんでいた。救急車で運ばれた病院で、治療のすべなく、1925年10月16日没。37才だった。病室のドアに書かれた数字「13」を見て、「こんな数に賭けるとはね！」と言ったのが、最後のことばとなった。

## エルネスト・バッファ

por 西村秀人

今回から「現代タンゴ群像」のタイトルのもと、これまで本誌で単独の記事で取りあげられることが少ない、あるいは、市販のディスコグラフィーがないアーティストを中心に各回読み切りでまとめていきたいと思う。

今回は映画「アルゼンチン・タンゴ～伝説のマエストロたち」でも健在ぶりを見せていたバンドネオン奏者エルネスト・バッファの自己名義作品をまとめておきたい。

エルネスト・ギジェルモ・バッファは1932年8月20日生まれで、本年で80歳になる。フランシスコ・セスタに音楽の基礎を、バンドネオンをマルコス・マドリガルに学ぶ。1940年代末、エクトル・スタンポーニ楽団に参加、その後アルベルト・マンシオーネ、アルフレド・ゴビ、ペドロ・ラウレンスの各楽団、アルベルト・マリーノの伴奏楽団を経て、1953年、レオポルド・フェデリコに代わってオラシオ・サルガン楽団の第1バンドネオンとなる。サルガンとはオルケスタ解散の1959年まで行動を共にし、その少し前から並行してアニバル・トロイロ楽団の第2バンドネオンとして活躍。1968年頃からトロイロ楽団のピアニスト、オスバルド・ベリンジェリと共同名義でトリオとオルケスタを編成、1971年頃まで活動したのち、エルネスト・バッファ四重奏団を結成、時折オルケスタ編成でもレコーディングを行い、タンゲリーア「エル・ビエホ・アルマセン」にも長く出演、数年来定期的な活動からは離れているが、「セレクション・ナショナル・デ・タンゴ」やオラシオ・サルガンへのトリビュート・コンサートなどに出演している。

バッファの名前を関した最初のアルバムは、ウバルド・デ・リオとの1967年の「クアルテート・ドス・ポル・クアトロ」(Cuarteto 2 x 4)であろう。バッファはトロイロ楽団在団中だったはずで、おそらくレコーディングだけの企画だったものと思われる。アンプを通したエレキ・ギターで有名なデ・リオが弾くアコースティック・ギターが聞ける録音としても代表的なものだろう。

その後バッファ=ベリンジェリでの活動を経て、バッファが自己のクアルテートを結成したのは71年頃だったと推測される。最初のアルバムはRCAビクターからのものだった。

## (1) RCA Víctor AVLP-4005 “Para la muchachada”

- ①Trasnoche ②El arranque ③Griseta ④Fortín Cero  
 ⑤La racha ⑥Bardiana ⑦Para la muchachada  
 ⑧Independiente Club ⑨El remate ⑩Flor de lino  
 ⑪Chamuyo tanguero ⑫Tiny

自己のグループのデビューにあたって、特色を出そうとかなり気合の入ったレパートリーになっている。バルディの⑤⑧、そのバルディに捧げた自作⑥、デ・カロ②、マフィア⑫、



ブグリエーセ⑨、プラサ①など実に通好みの選曲と言える。演奏の方はその後のフィリップス時代に比べてリズムが重く、軽妙さに欠ける。今日までこのアルバムがCD化されていないのはその辺が理由だろうか。オリジナル盤にもメンバーは記載されていないが、この後紹介するアルバム(2)のライナーでオスカル・デル・プリオーレは結成時のメンバーをホセ・コランジェロ pf、ウバルド・デ・リオeg、ラファエル・デル・バーニョ bとしている。

## (2) Polydor 2387034 “A paso firme”

- ①Nueve de julio ②Inspiración ③Fortín Cero ④Mala junta ⑤Contrabajando  
 ⑥Canaro en París ⑦A paso firme ⑧Responso ⑨La tablada ⑩Tierra querida  
 ⑪Verano porteño ⑫Quejas de bandoneón

結局RCAでのアルバムは(1)の1枚だけで終わり、以後1977年までポリドール・レーベルでアルバムを制作していくことになる。ライナーの日付が1972年8月なので、録音は1972年前半だろう。当時日本でもフィリップス SFX-5136「輝かしい出発」として発売された。オリジナル盤では裏面にメンバーの写真があり、オマール・(オラシオ・) バレンテ pf、ウバルド・デ・リオeg、キチョ・ディアスbであり、デル・プリオーレの記述が正しければ、2枚目で早くも2名が交替したことになる。ピアノのバレンテは当時ラプラタからオマール・ルピ率いるキンタンゴと共に上京し、そのままブエノスに残って活動を始めたばかりの頃だったはず。結局バッファ四重奏団への参加はこの時だけだったようだ。よりポピュラーな選曲になったものの、全体のサウンドはその後のバッファ四重奏団を特徴づけるスタイルを確立しており、名手のキチョの名人芸が聞ける「コントラバヘアンド」、両手弾きの見事な変奏でその後も長くバッファの十八番となる「マラ・フンタ」の最初の録音も入った傑作である。



## (3) Polydor 2387036 “Bienvenido bandoneón”

- ①Bienvenido bandoneón ②Pablo ③La última cita ④El vals y tú ⑤Patético  
 ⑥Adiós Nonino ⑦La topadora ⑧Chiqué  
 ⑨La cachila ⑩Silbando ⑪Amigazo ⑫La yumba

レコード番号で前作のわずか2番あとで発売されたポリドール2枚目のアルバム。1973年の発売と推測される。(2)の日本盤のジャケットは実は(3)の写真を加工したものであり、オリジナルとは異なっている。(2)に比べ選曲が少し渋くなったが、古典や歌曲の器楽化も含めいいバランスで並んでおり、個人的にはこの時期のベストと思う1枚。カルダーラ⑤やブグリエーセ⑫など小編成ではなかなか聞く機会のないレパートリーである。ライナーにはバッファに与えられた「ブ

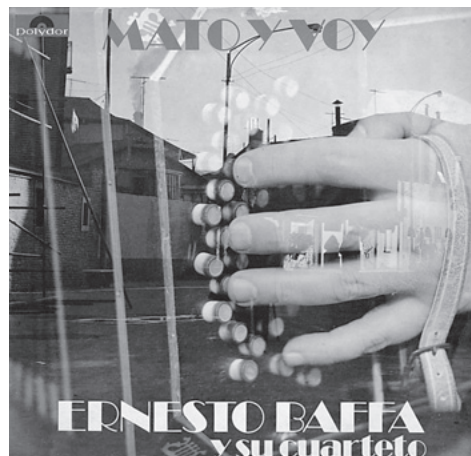


エノスアイレスの黄金のバンドネオン」という称号が初めて登場している。メンバーの記載はないが、デル・プリーオーレの別CDのライナーによれば、コランジェロpf、ウバルド・デ・リオeg、デル・バーニョb。

#### (4) Polydor 2387083 “Mato y voy”

- ①Mato y voy ②La revancha ③Fueye ④Relumbrante ⑤Comme il faut ⑥Los mareados  
⑦Racing Club ⑧Nobleza tanguera ⑨Pa'que bailen los muchachos ⑩Madreselva  
⑪Mucha contra ⑫Milonga triste

1975年のアルバムで、凝ったレパートリーを含みつつ、古典や歌曲をうまく含ませている点は前作と同様。バッファとパンセラの共作による①は1979年にオスバルド・プグリエーセに取り上げられ、やはりアルバム・タイトル曲となった作品。パンセラとの共作はもう1曲⑪があり、④と⑧はポンティエルと長く行動を共にしたバンドネオン奏者ファン・サロモーネとの共作。トロイロ⑨、バンドネオンがテーマになっている③、ラウレンス②もあり、全体にバンドネオン奏者による作品が多く、バッファの持ち味を聞かせる内容になっている。メンバーの記載はないが、別資料によればパンセラpf、デ・リオeg、デル・バーニョbとされている。



#### (5) Polydor 2387108 “A Don Julio De Caro”

- ①A Don Julio De Caro ②Mal de amores ③Aquellos tangos camperos ④Cordón de oro  
⑤Bandoneón para siempre ⑥Todo corazón ⑦Pa'l cambalache ⑧Carta lunfarda  
⑨El bulín de la calle Ayacucho ⑩Corazoncito ⑪Por derecha ⑫Sueño malevo

1976年のアルバムで、前期Polydorでは唯一のオーケストラ編成によるアルバム。A面（①～⑥）が器楽演奏で、B面（⑦～⑫）がトロイロ楽団時代の仲間でもある歌手ティト・レジエスの歌が入る。当時バッファはタンゲリーア「エル・ビエホ・アルマセン」に出演し始めた頃で、ティト・レジエスも同時期の出演者だったのではないかと思う。A面の選曲はなかなか素晴らしく、作曲者のサルガン本人はだいたい後に録音することになる③、珍しい古典④、期待通りのラウレンス作品②があり、①⑤はルイス・スタソとの共作で、①は同時期にセステート・マジョールも録音している。B面にも1曲スタソの作品が入っており、すべての編曲がルイス・スタソによるものという可能性が高いように思われる。B面ティト・レジエスのちょっと重い語り口もこれらの渋めのレパートリーにはぴったり。傑作の一つと言ってよいだろう。メンバーの記載はないが、別資料によればリベルテラ、スタソbn、エンリケ・フランチャーニ、マリオ・アブラモビッチ、マウリシオ・



ミセ、フェルナンド・スアレス・パス他 vn、アルマンド・クーポpf、オマール・ムルタbなどである。Meloepa CDMSE-5138 “Cadeneando las palabras” として全曲CD化されている（CDにはバッファ不参加の音源3曲が追加されている）。

## (6) Polydor 2387123 “Orgullo tradicional”

- ①Orgullo tradicional ②Shusheta ③Bien moderna ④Un placer ⑤Del 1 al 5 ⑥Mala junta  
⑦El de la zurda ⑧Qué noche ⑨Coqueta y bailarina ⑩Se han sentado las carretas  
⑪Tanguendo en el contrabajo ⑫Duelo criollo

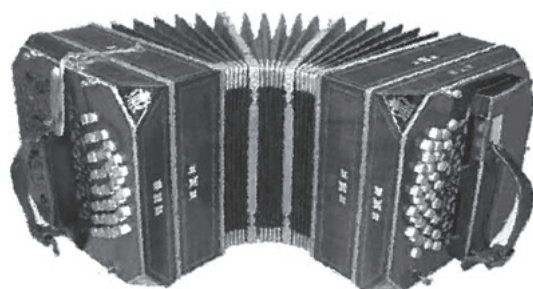
1976年、いったんポリドールを離れる前の作品。再びクアルテート編成に戻り、バッファのお気に入りなのであろうバルディの作品2曲（⑧⑩）が含まれるが、サロモーネとの共作①⑨、パンセラとの共作⑦、ロス・シエテ・デル・タンゴの録音もあったスタソ＝クーポの共作③など自作や仲間のバンドネオン奏者の曲の割合が多くなってきている。メンバーの記載はやはりないが、コントラバスをフィーチャした⑪はラファエル・デル・バーニョの演奏であることが記されている（曲はデル・バーニョとフリオ・アウマーダの共作）。



## (7) Microfon SE-60005 “Señero”

- ①Una lágrima en el tango ②Pa' que bailen los muchachos ③Azucar, pimienta y sal  
④Recuerdo ⑤La yumba ⑥Señero ⑦Malena ⑧Sabor a Buenos Aires ⑨Sur  
⑩Balada para un loco

マイクロフォンに移って最初のアルバム（1978年）。いつものクアルテートのサウンドで、②⑤はポリドールにも録音していたレパトリーの再録音。リベルテラの旧作⑧、タンゴ界久しぶりの大ヒットとなったエクトル・バレラの③、ベレス・プレチとの共作①、スタソとの共作⑥などやはりバンドネオン奏者の曲が多い。



## (8) Microfon SE-60108 “Color de tango”

- ①Color de tango ②Organito de la tarde ③Recuerdos de bohemia ④Madreselva  
⑤Asi bailaban mis abuelos ⑥Intelectual ⑦Ave María ⑧Más allá de la media noche  
⑨Berretín ⑩El africano

マイクロフォンでの2枚目で1979年。これまでと異なり3種類の編成を含んでおり、①④⑥⑧がピアノ、ギター、ベースとのクインテット（音はクアルテートのように聞こえるが、コントラバスとエレキ・ベースが両方使われているらしい。メンバーはベリンジェリpf、キチョ・ディアスb、ウバルド・デ・リオeg、ガブリエル・デ・リオeb）、②⑤⑨⑩がギター2（うち1人はウバルド・デ・リオ）、コントラバスとのクアルテート、③⑦はバンドネオン・ソロである。クインテットでの4曲は再録音となるカナロの④以外は、例によって仲間のバンドネオン奏者たちとの共作。久しぶりのデ・リオのアコースティック・ギターとのクアルテートはポピュラリティがあってよく、ラウレンスの名作⑨や渋めの古典⑩もいい。



## (9) Microfon SE-60153 “Tango sin edad”

- ①A los amigos bandoneonistas ②Selecciones populares ③Tango sin edad ④Amurado  
⑤Las dos P del tango ⑥De asfalto y barro ⑦Romance de barrio ⑧Color de rosa ⑨Pelele  
⑩La chocada

1980年のアルバム。②は「さらば草原～ウノ～カミニート～ gauchoの嘆き～軍靴の響き～バンドネオンの嘆き」のメドレーだが、バッファはその後もメドレーをよく録音しているし、エル・ビエホ・アルマセンのステージでデ・リオとのデュオでこのメドレーを聞いた方も多いただろう。ほぼ同様のメドレーをレオポルド・フェデリコ、オスバルド・ベリンジェリもやっているが、もともとは誰がオリジナルなのだろう？（フェデリコ＝グレラでピアソラ、モーレス、デ・カロ、ワルツなどのメドレーをやっていたのがおおもとの原型のような気がするが）有名曲はこのメドレー②と古典の⑧⑨、デ・カロ＝ラウレンス④ぐらい。①はバッファとペレス・プレチの曲で、盟友たちと師であるマルコス・マドリガルに捧げられた作品。⑤は自作ではなく、「ナダ」「ファイモス」で知られる不遇のバンドネオン奏者ホセ・ダメスの作品で、はっきり書かれていないが「2つのP」とはマフィアとラウレンスのことだろう（だとすればピアソラ作のバンドネオン独奏曲「ペドロとペドロ」と対をなす作品ということになる）。





## (10) Polydor 5357 “A nivel porteño”

- ①A nivel porteño ②Buen amigo ③B.B. ④Pequeña ⑤Al tordo José María  
⑥No rompan nada ⑦La cumparsita ⑧Anticipo ⑨Tecleando ⑩Porteña y nada más

1981年、再びポリドールに復帰して最初の作品。日本でもポリドール 25MM-0167「ブエノスアイレスの心情」として発売された。メンバーの記載はないが、日本盤ではホセ・コランジェロpf、ウバルド・デ・リオeg、オマール・ムルタbと推測しているが、別資料によればベリンジェリpf、ウバルド・デ・リオeg、キチヨ・ディアスb（曲によりガブリエル・デ・リオeb）とのこと。自作の代表作の一つ③をクアルテートで初めて録音、名曲⑦も初録音となる。デ・カロ②、意外なカルロス・フィガリの作品⑨などもあり、有名曲はこれまでにかなり録音したので少なめだが、順調な内容。



## (11) Polydor 5422 “Con la precisa”

- ①Señero ②Par de dos ③Dogor querido ④Selección popular ⑤Una lágrima en el tango  
⑥Sabor a Buenos Aires ⑦Con punto y coma ⑧Saltarín de Buenos Aires  
⑨Tango para una yunta ⑩El guri ⑪Con la precisa ⑫Milonga de bandoneón

1982年の作品。バッファ四重奏団のアルバムの中で唯一オリジナルの曲順のままCD化されているが（Polydor 511409-2 Ernesto Baffa）、ジャケットは異なっている。①④⑤⑥はマイクロフォンに録音済みでアレンジも大体同じだが、もちろん別の録音。自作の割合が多いが、ほとんどが共作というのが面白い（②はベリンジェリ、③はロベルト・バジェホス、⑪はエクトル・レッテラとロベルト・バジェホス、⑧はスタツ、⑨はパンセラとの共作）。実際半分づつ作ることもあるとは思いますが、互いの新作を持ちよって共作で登録する、といったことも多いのではないかと推測される。「エル・ビエホ・アルマセン」での仕事仲間でもあるフリオ・アウマーダの代表作⑩は渾身の演奏。



## (12) Polydor 24159 (817883-1)

### “Buenos Aires Hoy”

- ①Qué chaparrón ②Qué dupla ③Caprichosa y traviesa  
④Molto vivace ⑤Rallentando  
⑥Sentimental Buenos Aires ⑦Al amigo Julio Vizental  
⑧Andante y allegro ⑨Techo catreara y pan  
⑩Selección de tangos famosos ⑪Al pelado Roque



## ⑫Para Beto

⑩をのぞき全部新作という1984年のアルバム。セステート・タンゴの録音もあるプラサの⑥、師であるマルコス・マドリガルとペレス・プレチ合作⑧、ダンテ・ジラルドーニ他3名によるミロンガ③以外はバッファと誰かの共作品。有名曲メドレー⑩は「心はどこに～淡き光に～想いのとどく日～古道具屋～ジーラ・ジーラ～エル・チョコロ」という変わった組み合わせ。メンバーは記載がないが、別資料によればベリンジェリpf、ウバルド・デ・リオeg、ドミンゴ・ディアニb（曲によりガブリエル・デ・リオeb）。

## (13) Polydor 24231 (827727-1) “Te quiero bandoneón”

- ①Te quiero bandoneón ②Selecciones populares de tangos famosos ③El marne  
④Pa'l rojo, celeste y blanco ⑤De común acuerdo ⑥Boedo ⑦Buenos Aires, hoy  
⑧Taconeando ⑨Oda a floresta ⑩Organito arrabalero ⑪Codito de oro ⑫A lo cadica

1985年の作品。まったく表記がないが、音で判断するにセステートぐらいのオーケスタ編成。③⑥⑧といった古典のレパートリーが復活、②は「わが懐かしのブエノスアイレス～パストーラ～南（スール）～ウノ～パリのカナロ」というユニークなもの。あとは相変わらずバッファと誰かの自作多数。スタソ＝バッファ合作の①はどう聞いてもホルヘ・カルダラ＝ルイス・スタソ合作でエストレージャス・デ・ブエノスアイレスが録音した「パラ・ボス...バンドネオン」にそっくりだが... 別資料によればマルコーニbn、マウリシオ・マルチェリvn、マリオ・アルセvn、コランジェロpf、デ・リオ父子が参加しているとのこと。



## (14) Polydor 27417 (833670-1) “Bien acompasado”

- ①Bien acompasado ②Selección de Gardel ③De gran estilo ④Tango terapia ⑤Danzarín  
⑥Reverie ⑦El recorrido ⑧Con imagen ⑨Afirma las manos ⑩Burocracia ⑪Fortín Cero  
⑫Ave María

1987年のアルバムで、①②⑤⑪がいつものクアルテート、③④⑦⑧⑨⑩が久々のオーケスタ、⑥（シューマン作）と⑫がバンドネオン・ソロ。メドレー②は「想いのとどく日～帰郷～閉ざされし瞳」。またまた共作者ありの自作が並ぶが、バッファ＝デ・リオ作となっている⑨はネストル・マルコーニの「タンギッシモ」来日公演で取りあげていたのでご記憶の方もあろう。本作にはマルコーニ＝バッファの共作が③④⑦と3曲も含まれている。オーケスタのメンバーはバンドネオンがバッファとマルコーニ、バイオリンがスアレス・パスとマウリシオ・マルチェリ、チェロにホセ・ブラガート、



コントラバスにアンヘル・リドルフィ、エレキ・ベースにガブリエル・デ・リオ（ウバルドの息子）、エレキ・ギターにウバルド・デ・リオ、ピアノはホセ・コランジェロ。クアルテートはバッファ、コランジェロ、デ・リオ父子の4人（つまりコントラバスではなく、エレキ・ベースを使用）。

### (15) Polydor 0000351 (タイトルなし) (17cm)

①La cumparsita ②Recordando este vals ③Volver ④Esta noche me emborracho

1989年に出されたと思われる4曲入り17センチ盤。レーベルにカセットからのセレクト、と書いてあるのでカセットのみで発売されたアルバムがあると推測されるが、内容は不明。音で判断する限りはいつものクアルテートだがエレキ・ベースになっている。③④はやはり「エル・ビエホ・アルマセン」の常連であった元オスバルド・ピーロ楽団の専属歌手で、録音を残す機会はなかったがアニバル・トロイロ楽団最後の歌手だったというロベルト・アチャバルが歌っている（アチャバルは1996年に64歳で亡くなっている）。

前後期合わせポリドール時代の音源は編集盤だがMelohea CDMPV1203 “Todo corazón” (2007) と Melohea CDMPV1217 “Buen amigo” (2009) で一部がCD化されている。マイクロフォンの音源はオムニバスに収録されているもの以外は未CD化のままである。いずれもぜひアルバム単位での復刻を希望したいところだ。

一応この連載は1990年までを対象とするので以降は対象外だが、簡単に触れておく。1991年からバッファはAlmaliにアルバムを録音し始める。発売順に

(16) Almali 35001 (LP) “Con todo mi corazón” (1991) オルケスタ

(17) Almali 35003 (LP) “Al amigo Daniel Scioli” (1992) オルケスタ

(18) Almali 135007 (Casette) “Ernesto Baffa y su conjunto con la voz de Mabel Aguilar”

(19) Almali 001 (CD) “Tango” (Ernesto Baffa-Alberto Morales) (1993-1994) クアルテート&オルケスタ (8曲にアルベルト・モラレスの歌が入る)

(18) は5曲がマベル・アギラルの歌、残り5曲が器楽演奏だが、器楽演奏はすべて(16)(17)の収録曲である。(19)は以後一度も再発されていないが、(16)(17)の音源はM&M TK28147 “Ernesto Baffa y su gran orquesta” (1996)、M&M TK28162 “Calavereando” (1996)、Fonocal 855 “Baffa de Buenos Aires” (2006) として編集盤の形ではあるがCD化された。

その後もMelohea CDMPV-1095 “Ernesto Baffa” (1996)、MBM Producciones A 0003/2000 “El nuevo sonido de Ernesto Baffa - La esperanza” (2000) (曲により異なるが、ドラム、バイオリン入りの曲もある)、Melohea CDMSE-5137 “Dos al corazón” (2003) (新録は2曲のみで、あとは1967年のクアルテート・ドス・ポル・クアトロのアルバムを全曲収録) が出ており、さらに“Café de los Maestros” で2曲、“Selección Nacional de Tango” にも参加している。

バッファは他の歌手の伴奏に回ったアルバムはほとんどないが、例外的にフリオ・ソーサのそっくりサンであるマリアーノ・レジェスのソロ歌手として3枚目のアルバム Music Hall 2642 “No fallas en un final” (1978) はバッファのクアルテートが伴奏している。

## ～その6 エラディア・ブラスケス

吉村 俊司

### はじめに

今回はエラディア・ブラスケスを取り上げる。彼女は歌手であると同時に作詞・作曲家であり、いわゆるシンガーソングライターに相当する。コンスタントに多くの曲を書き、それらが自身で歌う以外にも多くの歌手に歌われており、現代タンゴの最も重要な作詞・作曲家の一人と言えるだろう。

### 略歴

1931年2月24日、ブエノスアイレス州アベジャネーダでスペイン移民の両親のもとに生まれる。幼い頃より音楽に親しみ、ピアノ、ギターも独学で学ぶ。8歳の頃にはスペイン歌謡の歌手として活躍、ラジオ・アルヘンティーノへも出演する。すぐに作曲も手がけるようになり、11歳の時には最初の作品（ボレロ）を書いている。1948年には最初のレコードをRCAからリリース、1950年代にもミュージックホールにスペイン歌謡などの録音を残し、1957年にはシンガーソングライターとして自作のブルースなどをRCAに録音する。1964年頃からはフォルクローレの作詞・作曲家として活躍。

一方、ブラスケスがタンゴと関わるようになるのは、これらの経歴を経た後のことである。最初に知られるようになったタンゴ作品は「風の夢」で、書かれたのは1959年だがしばらく人目に触れず、1968年になって世に出ている。クラウディオ・ベルジェ、ロベルト・ルフィーノらが録音。1970年にはRCAから自作のタンゴばかりを収録した最初のアルバムをリリースし（それ以前にマイナーレーベルでのアルバムもあったらしいが）、以後はタンゴを活動の中心に据えるようになる。

その才能から「スカートをはいたディセポロ」とも呼ばれるが、歌手がレパートリーの殆どすべてを自作で固めるといふ、いわゆるシンガーソングライターのスタイルは、タンゴにおいては新しい存在と言えるだろう。

その後も録音、ステージ、作詞・作曲と幅広く活動を続け、エクトル・ネグロ、チコ・ノバーロ、ルベン・フアレス、ラウル・ラビエら同世代のアーティストとの関係も深い。アストル・ピアソラの「ブエノスアイレスの冬」「アディオス・ノニーノ」に歌詞をつけて歌い、これらの曲に歌詞が必要かどうかで論争を巻き起こしたりもしている。

1988年にはアベジャネーダから「最愛の娘」の称号を、また1992年にはブエノスアイレスから「名誉市民」の称号を与えられる。2005年8月31日に惜しくもブエノスアイレスにて亡くなる。

### 1970年代のエラディア・ブラスケスのレコード

以下、1970年代のレコードを発表順に紹介していこう。

## **BUIENOS AIRES Y YO (RCA AVLP-3972)**

【曲目】 1-1 DESNUDA LA CIUDAD\* 1-2 CONTAME UNA HISTORIA\* 1-3 SIN PIEL\*\* 1-4 MARÍA DE NADIE \*\*\*1-5 QUÉ BUENA FE\* 1-6 AMOR SIN AVENTURA\*\* 2-1 HUMANO\*\* 2-2 SUEÑO DE BARRILETE\*\*\* 2-3 DOMINGOS DE BUENOS AIRES\*\* 2-4 MI CIUDAD Y MI GENTE\* 2-5 RETAZOS\*\*\* 2-6 CERRAME LAS VENTANAS\*\*\*

【メンバー】 Eladia Blázquez (vo) , \* Osvaldo Berlingieri (arr & dir) , \*\* Raúl Garelo (arr & dir) , \*\*\* Trío Leopoldo Federico (arr & dir)

【発表】 1970年、モノラル録音



RCA AVLP-3972

ブラスケスにとっての最初のタンゴ・アルバム。曲はすべて彼女が作り、1-1はアルマ・ガルシア、1-2、1-4はマリオ・イアキナンディ、2-1はオメロ・エスポイトが作詞、他は詞も彼女が書いている。大ヒットした1-2、上述の最初のタンゴ作品2-2をはじめとして、1-3、2-4など作品は粒ぞろい。歌唱も非常に表情豊かである。

伴奏はオスバルド・ベリンジェリ、ラウル・ガレーロ、およびレオポルド・フェデリコのトリオが担当。詳細なメンバーは明らかではないものの、ピアノはすべてベリンジェリであることはまず間違いない。単なる伴奏にとどまらず、演奏自体にも聴きどころは多い。

2007年にアルゼンチンのSony BMGからCD化されたいが、現在は入手は難しい模様である。

## **YO LA ESCRIBO Y YO LA VENDO**

【曲目】 1-1 PARA ENTENDER NOS 1-2 TE LLAMAN FUEYE 1-3 EL PRECIO DE VENCER 1-4 EL COSO QUE TIRA LA MANGA 1-5 EL CORO 1-6 SI BUENOS AIRES NO FUERA ASÍ 2-1 AL DE LA ZURDA 2-2 OYENDO TU VOZ 2-3 TU REBELIÓN 2-4 UN CABALLERO 2-5 EL MIEDO DE VIVIR 2-6 LA CARTERA DE ECONOMÍA

【発表】 1973年

残念ながら入手がかなわず未聴であるため詳細は不明だが、やはり全曲彼女の作品で占められている (1-1はフェデリコ・シルバ、2-2はオスバルド・レケーナと共作)。これらの中では1-3が大ヒットしている。

## **SOMOS O NO SOMOS...? (TROVA JTX 60006)**

【曲目】 1-1 SOMOS COMO SOMOS\* 1-2 A UN SEMEJANTE\*\* 1-3 PATENTE DE PIOLA\*\*\* 1-4 VAMOS EN MONTÓN\*\*\*\* 1-5 EL COSO QUE TIRA LA MAGNA\*\*\*\*\* 2-1 EL CORAZÓN AL SUR\*\* 2-2 LA PASIÓN DEL ESCOLAZO\*\*\* 2-3 LA BRONCA DEL PORTEÑO\*\*\*\*\* 2-4 DOÑA FIACA\*\*\*\* 2-5 POR QUÉ AMO A BUENOS AIRES\*

【メンバー】 Eladia Blázquez (vo) , \* Raúl Garello (arr & dir) , \*\* José Carli (arr & dir) , \*\*\* Roberto Grela (arr & dir) , \*\*\*\* Jorge Kenny (organ) , \*\*\*\*\* Trío  
【発表】 1975年

収録曲はすべてエラディア・ブラスケスの単独作品で占められている。中では2-1が最も知られている曲であろう。ブラスケス本人の生地アベジャネーダはブエノスアイレスの南に位置し、「贅沢は運次第」というような土地だったようだが、そこへの想いを「私の心はいつも南を向いている」と歌い、大ヒットした。ブエノスアイレス市民にとっては、おそらくトロイロの時代からの「南」のイメージともリンクするものがあったものと思われる。

一方2-5は、前回取り上げたラウル・ラビエがアルバムタイトル曲に据えている。この時代のブエノスアイレスの声としての立場を確立していることが伺える。

伴奏は1枚目でも参加していたガレーロに加え、ホセ・カルリが2曲で担当。弦楽アンサンブルを中心としたアプローチが新鮮である。2曲で単に「トリオ」とクレジットされているのは、それ以上は全く情報がない。レコード会社の契約の問題であろうか（レオポルド・フェデリコのトリオのように聴こえるが…）。ロベルト・グレーラのギター・アンサンブルは味わい深く、ホルヘ・ケニーの Hammondオルガン・ソロも面白い。全体にバラエティーに富んだスタイルとなっている。

近年CD化され（Random music, 1409296）現在も比較的手に入りやすいようである。



TROVA JTX 60006

### SI TE VIERA GARAY (EMI 8839)

【曲目】 1-1 SI TE VIERA GARAY\* 1-2 VE Y CORRE HASTA EL FUERTE NEGRA\* 1-3 LA VOZ DE BUENOS AIRES\*\* 1-4 UN CIELO DE SERENATA\* 1-5 VIEJO TORTONI\*\* 2-1 TU PIEL DE HORMIGÓN\*\*\* 2-2 INVIERNO PORTEÑO\*\* 2-3 ABRIL EN MI CIUDAD\*\* 2-4 Y SOMOS LA GENTE\*\*\*\* 2-5 VIVIR EN BUENOS AIRES\*\*\*

【メンバー】 Eladia Blázquez (vo) , \* José Carli (arr & dir) , \*\* Raúl Garello (arr & dir) , \*\*\* Juan Carlos Cirigliano (arr & dir) , \*\*\*\* Julián Plaza (arr & dir)

【発表】 1980年



EMI 8839

1980年の発表だが、1970年代の活動からの連続性もあるので、次作とともに取り上げることにする。やはり2-2が本作の目玉であろうか。ピアソラの器楽曲に独自の歌詞をつけて歌うというのはかなりの冒険であるが、ピアソラの楽曲の中でも一、二を争う美しいメロディーと叙情的な歌詞がうまくマッチして、まずは成功しているといえるだろう。伴奏のラウル・ガレーロも見事な演奏である。なお、

前回取り上げたラウル・ラビエの同曲の録音は1979年で、本作に先立って発表されている。

これまでの作品での共作は、他者の詞を得て彼女が曲を書くことのほうが多かったが、本作では2-2以外にも2-1でダンテ・アミカレリ、2-3でエミリオ・バルカルセ、2-4でオスバルド・プグリエーセといった作曲家と共作している。自身の書くメロディーとは異なる楽曲での歌唱も新鮮で、特に2-4はバルスとタンゴが交錯する面白い作品。一方、タンゴ界のシンガーソングライターとしてブラステスと並ぶ存在であるエクトル・ネグロとの共作1-5は有名なカフェ・トルトーニをテーマにしたノスタルジックな内容で、ヒット曲となった。1-2はフェデリコ・ミテルバックとの共作で、パーカッションとコーラスを加えたカンドンベのスタイル。これらのほかは彼女の単独作品である。

伴奏陣には、上述のガレーロとホセ・カルリが前作から引き続き参加。カルリは前作よりもポピュラーな要素を増やし、親しみやすいアレンジを提供している。さらにフアン・カルロス・シリリアーノがエレキギター、エレキベース、パーカッションを加えたスタイルで変化を加え、フリアン・プラサは重厚な演奏を提供している。

### ELADIA (EMI 6303)

【曲目】 1-1 ADIÓS NONINO\* 1-2 ESE MUCHACHO TONI\*\*  
1-3 HONRAR LA VIDA\*\*\* 1-4 EL CORAZÓN DE TU  
VIOLÍN\* 1-5 GRACIAS A PESAR DE TODO\*\*\*\* 2-1  
QUIERO AMARTE AQUÍ\*\*\*\* 2-2 EL MIEDO DE VIVIR\*  
2-3 FIESTA Y MILONGA\*\* 2-4 MI DOBLE ROL\* 2-5 EL  
AMOR TOTAL\*\*\*

【メンバー】 Eladia Blázquez (vo) , \* José Carli (arr & dir)  
, \*\* Atilio Stampone (arr & dir) , \*\*\* César Gentili (arr &  
dir) , \*\*\*\* Oscar López Ruiz (arr & dir)

【発表】 1981年



EMI 6303

シンプルに自身の名前をタイトルに据えた作品。前作に続きピアソラの器楽曲、しかも一番の代表作に独自の歌詞をつけた1-1が冒頭を飾る。「ブエノスアイレスの冬」同様ラウル・ラビエの歌唱の方が先に発表され、賛否を巻き起こしたが、ピアソラ自身がこの詞と歌唱を強く支持したのは前回の記事のとおり。こちらの録音もホセ・カルリの弦と管を使った壮大な伴奏と彼女の力強い歌唱で、聴き応えのある楽曲に仕上がっている。1-2、2-3は今回伴奏陣に加わったアティリオ・スタンポーネとの共作で、いずれもキャッチーなメロディーによりヒット作となった。他は彼女の単独作で、1-3は代表作の一つ。タンゴというよりポップス、バラード的な作品が多くなっている。

伴奏はホセ・カルリがシンフォニックなスタイル、アティリオ・スタンポーネがパーカッションを加えてポップなスタイル。またアルベルト・コルテスやスペインの歌手ラファエルとの共演で知られるセサル・ヘンティリ、ピアソラ五重奏団他のギタリストとして知られるオスカル・ロペス・ルイスがそれぞれの持ち味を生かした伴奏を提供している。

### その他の音源、復刻音源など

他の歌手との共演はいくつかあるはずだが、今回は充分調べることはできなかった。ここでは1976年にチコ・ノバーロとの共作として発表された "CONVENCERNOS" (チコの1978年のアルバム "POR FIN AL TANGO" MICROFON SUP-80133 にデュオで収録) を挙げておく。この曲も後年多くの歌手に取り上げられているが、愛国的歌詞と当時の軍事政権を照らし、批判の対象ともなったようである。

単独盤としての復刻は既述のとおり、現在入手しやすいのは "SOMOS O NO SOMOS..?" のみである。編集盤としては、EMIの2枚 "SI TE VIERA GARAY" と "ELADIA" からの楽曲が "Serie de Oro: Grandes Éxitos / Eladia Blázquez" (EMI 576928) として2004年にリリースされ、現在も比較的容易に入手できる。

## おわりに

彼女に与えられた「スカートをはいたディセポロ」という称号は、確かにその才能にふさわしいものではあるが、一方でその歌詞の深さはディセポロのような哲学的なものとは至っておらず、また音楽的にもピアソラらの現代タンゴに比べるとそれほど新しいことをしているわけではない。あくまで同時代の市井の人々の目線で語った歌詞と、それにマッチした美しく親しみやすいメロディーで、多くの人々の心を掴んだ歌手なのだと思う。

そんなわけで、我々日本人にとって、彼女は今ひとつ遠い存在のような気がする。まして1970年代においては、アルゼンチン国民、ブエノスアイレス市民の間での人気の割には日本では知る人ぞ知るような存在であり、日本盤がリリースされるようなこともなかった。

ただ、現在は、インターネットで歌詞の内容を知ることができたり、多くの歌手に取り上げられた彼女の作品を聞く機会も増えてきたりしているので、彼女自身の歌ももっとしっかり聴かれるようになることと思う。その原点となる1970年代の音源を探る上で、この記事が一助になれば幸いである。

## 参考文献

Wikipedia - Eladia Blázquez ([http://es.wikipedia.org/wiki/Eladia\\_Bl%C3%A1zquez](http://es.wikipedia.org/wiki/Eladia_Bl%C3%A1zquez))

Todotango - Eladia Blázquez (<http://www.todotango.com/english/creadores/eblazquez.asp>)

Todotango - A memory for Eladia By Antonio Rodríguez Villar ([http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/cronica\\_eladia.asp](http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/cronica_eladia.asp))

Homenaje | Eladia Blazquez (<http://www.elportaldeltango.com/especial/EBlazquez.htm>)

Eladia Blázquez (<http://eladiablazquez.blogspot.jp/>)

10tango.com - エラディア・ブラスケス (Blazquez, Eladia) (<http://goo.gl/CAM81>)

Patio del Gotán ゴタンの中庭 (タンゴの訳詞) (<http://www.kitanoit.com/~gotan89/>)

アストル・ピアソラ 闘うタンゴ、斎藤充正・著、青土社

アルゼンチン・タンゴ アーティストとそのレコード、大岩祥浩・著、ミュージック・マガジン



# タンゴ もう一つの祖国…

欧州で活躍したタンゴの使節たち (補足Ⅲ)

—ドイツ編 その1—

芝野 史郎

この稿を起こす前に、島崎会長よりB. von Géczy (フォン ゲッツイ) の”Mama yo quiero un Novio” (R. Collazo) 日Col. M316が落ちているとのご指摘がありましたので前稿の捕捉をいたします。さて、げても (下手物) なるものを、辞書で引きますと 1. 上手物の反対語、2. 下世話なもの、3. 作りの粗末な安価な品物、4. 偽物、とあります。一般的には本物 (ほんもの) に対する偽物の意味でよく使われるまがいもの、一寸本道はずれたもののこととして、げてもという言葉が使われます。

我がタンゴ界でも、アルゼンチン タンゴを本流とすると、このタンゴのリズムのみ真似た欧州タンゴ楽団とかをげてもと称して区別するのですが追々、アルゼンチンよりタンゴ楽団や歌手が欧州に上陸するに及び、内容も向上し、中には本場物に匹敵するような楽団や歌手が生まれるようになりました。

げてもの一例、

カルロス ガルデルが唄う “パルレ モア ダ ムール (聞かせてよ 愛の言葉を)” Od.18880 (e7365) Parlez moi D'Amour / Acquaforte (e7333-1)、またガルデルの英語での挨拶 (BVE8945-1) 等は私はげてもと考えました。カナロ楽団が取り上げたOd.4631 (Mz 5283) Cantante Bajo La Lluvia (ft.) - Singing in the Rain (T. Shapiro) / Pajarito Cantor (M. Canaro) (Mz.5282) なんかもげてもですね。こんなことで、これからとりあげるレコードは少々げてもがかったものもまじるのを、お許し下さい。

まずクラシック畠のピアノ奏者のドゥオから

仏) Col. LF38 (日コロ) J1436 (昭和9年発売)

Novelty Piano Duet M.M. Jean Wiener et Clement Doucet.

Garufa (Juan Antonio Collazo) (Mz WL2280)

La Cumparsita (G. H. Matos Rodríguez) (Mz2281)

クラシック界での名声は存じませんが、フランスのマエストロ二人組のレコードです。ラ クムパルシータは当時流行し始めた所で日本に最初に紹介されたラ クムパルシータの名誉を担うもので、裏のガルーファに至っては出来てすぐの録音と思われます。まあ珍しいレコードです。

つぎに同じくコロムビア レコードのアルバムもの (6枚組) のギター音楽集の中の一枚

S-37 La Cumparsita (Matos Rodríguez) (Mz Co195190)

Solo de Guitarra por Julio Martínez Oyangren

Rosarina (R. González) (Mz. d 3646)

Solo de Guitarra por Alberto Diana Lavalle

ラ クムパルシータはウルグアイの海軍士官で、クラシックのギタリストのオヤングレン (1901年生まれ) の演奏。さすが自国の名曲だけにじっくりと誇りをもったプレーをみせてくれます。なおオ

ヤングレンは同国の芸術団の代表として1931年7月にBsAsを訪問、大歓迎を受けた後、1936年からレコーディング活動を行っています。

ロサリーナの方は想像ではブエノス アイレスのギター奏者と思うのですが名曲ロサリーナをかなり奔放に演奏し、しかもさっぱりと終えるようにしています。どちらかと言えばロサリーナの方が勝れていると言えるでしょう。

さてそこで、こんな目線から見まわしますと実に多くのげてもものが存在しまして、いちいちあげつらうのもシンドイ話ですが事の成り行き上とに角集めたものを披露いたします。(主にドイツのオークションより)

実に55年も前になりますが、私が京都在住の頃、河原町竹屋町下ル西側に“渡辺古レコード店”がありまして、時々これはと思う古レコードを見出し得ました。これもまた、その一つで多分大阪当たりから仕入れてきた古レコードを思われます。実は渡辺店主は大阪出身の戦災被害者でした。

Fco. Lomuto y su Orq. Sinfónica (カムデン盤)

Vic.37056 Arroz con Leche -Ranchera- (Claudio Frollo - F. Lomuto)

Muñequita (Adolfo Herschel - Fco. Lomuto)

Vic.37286 Afilador -Ranchera- (Emilio Magaldi - Fco. Pracánico)

Papanata (Antonio Bogtta - Fco. Lomuto)

の2枚と

TANGO Kapelle Manuel Romeo (Eden-Hotel, Berlin)

Vox 8516 Crépusculo (E. Bianco - J. de Kel- Sar)

Yegüecita (Bachicha - Bachicha)

Vox 8648 Lueño (Laupie)

Cursilona (Aberico / Supparo)

マヌエル ロメオ楽団を私は永い間マヌエル ロメオの誤植ではないかと思っておりました。しかし私は当時床屋の寺田太作氏と交流しておりましたので、ついロムートの2枚を入手したと洩らしたらどうしてもほしいと言われて、ついゆずってしまいました。さてこのマヌエル ロメオの方ですが入手したときはクレプスクーロ/ジェグエシータが既に入手していたビアンコ・バチーチャのものと編曲も全く同じでした (Bianco-Bachicha Orq. Típ. Crépusculo 74352, Yegüesita 74354) のでドイツの二流楽団かと思っていたのですが、その後、HQのドイツ楽団集や“ベルリンへ”、等のCDを聴いて、やはりドイツで頑張っている楽団と言うことを、認識するに至りました。編成 Bn 3, Vl 2, Gt, Cb, Celo 各1。

またこのVoxレーベルではBernardo Ettéと言う楽団があり、かなりのアルゼンチン タンゴを出しております。例えば

12吋盤 Vox 1439 Java (M. Yvain) Mz 1395A

Rosina (Etté) Mz 1396A



ギター演奏



フリオ・マルティーネス・オヤングレン

61 (JD 6047)

(新付録)

- Vox 1482 A la cumba (Etté) Mz 1439A  
 Viotetera (J. Padilla) Mz 1427A
- 10吋盤 Vox 1680 Como los Nardos en Flor (M. De Groth) Mz 2294B  
 La Nasquita (Fusellas) Mz 2295B
- Vox 8168 Fredyse (G. Espósito) Mz 3209B  
 Montevideo (T. Marwell - F. Grümbaum) Mz 3211B
- Vox 8458 Donna Vatra! (O. Köpping) Mz 1722BB  
 La Cumparsita (G. H. Matos Rodríguez) Mz 1721BB
- Vox 8620 Olivero (Wills) Mz 2394G  
 Aranjuez (J. d' Alba) Mz 2395G

(いずれも推定1927年録音)

- Imperial 3096 Es sprach der weis Marabu  
 (Egen Gorman - Rosen Lion) Mz C550  
 Leb' wohl Matrose  
 (Ralph - Pölster Ludwig) Mz C552



(インペリアル レーベルはブルンスウィック レコードの第2会社のレーベルと聞いております。)
 さてここで一寸欧州のレコード関係の参考となることを申しておきますと (収集家の皆様には既によくご存じのことですが...)

- 1917年 ・デッカ レコード社が第一次大戦の戦線用に兵隊用のポータブル蓄音機を開発。
- 1923年 ・カルル リンドストロームがロンドン、ベルリンにパーロフォン有限会社を設立する。
- 1925年 ・ドイツ エレクトローラ社設立 (電気録音)。  
 5月8日 (ビクターの電気録音の特許使用権を持っていたロンドンのグラモフォン カンパニーがエレクトローラ社を設立す)
- 1927年 ・リンドストロームがブリティッシュ コロムビアと共同でパテ フレールを買収。
- 1928年 ・ドイツ グラモフォン社が日本にポリドール社を設立。  
 〃 ・ドイツ国内にウルトラフォン社を設立。
- 1929年 ・リンドストロームが支店をパリ、ミラノ、バルセロナ、アジア、リオ、ブエノスアイレス、サンチアゴへ出店す。
- 1929年8月 ・エミール ベルリーナ永眠す。
- 1930年 ・テレフンケン (ドイツ) はアルコファル ラジオとレコードプレーヤーを組み合わせて発売
- 1930年4月 ・ブルンスウィック社はレコードと蓄音機部門を手放す  
 →ワーナーブラザーズ社に売却す。
- 1931年3月 ・イギリス グラモフォンとコロムビア社合併す。  
 ・Electric and Musical Industries LimitedいわゆるE.M.I.の誕生、両社の管理会社となる

E.M.I.の傘下 フランス=パテとラ ボアソンメートル (ビクター)  
ドイツ=リンドストロームとエレクトローラ

1932年3月22日・テレフンケン コンツェルン ウルトラフォンを吸収合併す。

1933年1月 ・ヒトラー ナチ総統に就任 ゲッベルス宣伝相となりレコードを管理  
上記がレコード初期のかなり変動の激しかった時代の動きを要約したものです。

さてベルナルド エッテのラ クムパルシータはVoxが一応電気録音をしているので、録音推定で  
1925年12月～1927年2月頃迄のものと考えます。欧州のタンゴ楽団の中では一番古いラ クムパルシ  
ータの録音ではありませんか、また比較的このエッテはアルゼンチン風のタンゴの録音を沢山やって  
いたとも思いますが何しろバンドネオンを使用せず替りにアコーディオンを使用している様で、マヌエ  
ル ロメオはちゃんとバンドネオンの音を入れておりますので軍配はマヌエル ロメオに上がるでし  
ょう。

・Geraldos Gaucho Tango Orchestra

ヘラルドス ガウチョ・タンゴ楽団と言うのが沢山のレコードを出しておりました。凡そは日本コ  
ロムビアが出しておりましたがほんの少し日本デッカよりも出ておりました。その中では

日 コロ J 1838 ① Where are you, My dear? (Berto) Mz 13975

② Zaraza (Tagle Lara) Mz 13976

①はドンデ エスタス コラソン、②はそのままサラーサでこのあたりは仲々良いものです。

日 コロ J 1384 My Sunshine is You (Green halgh&Stolz)

Yira… Yira… (Discépolo)

日 コロ JX 1210 In einer klein Konditorei (Raymond - Dobrindt)

La Cumparsita (Rodríguez)

日 コロ JX 1211 Ich küsse ihre hand Madame (Otto Dobrindt)

Poema (Melfi)

ここでのジーラ ジーラやラ クムパルシータはまるでカナロ楽団やその他の謄写版刷りの様な演  
奏であるの批判を受けております。しかし今となつてはそのカナロのラ クムパルシータ等も遠くな  
り原曲を熟知している人も少なくなり、最早、知られざる曲となつて参りました。

日 デッカ (ポリドールデッカ) では

日 ポリ A 139 チェ パパーサ オイ (ああ何たるパパーサ)

ノーチェ デ レージェス (夢の今宵)

日 ポリ A 407 クムパルシータ (ラ クムパルシータ)

ホセ ラーモス タンゴ オーケストラ

バンドネオン アラバレーロ

ジェラルド ガウチョ タンゴ オーケストラ

なかなか良いレパートリイですがこの方がコロムビア時代より良かったかも知れませんね。

ドイツではPeter Kreuder楽団もタンゴの演奏にバンドネオンを使用しているとのことでしたので、  
アルゼンチン タンゴをやっていないかと探しましたがドイツのものしかやっておらず、落胆しました。  
何か情報があればお知らせ下さい。日本では日本テレフンケンで3枚程出ております。それは

日本テレフンケン 20657 (昭和13年)

Peter Kreuder Tanz-Sinfonie Orchester

- 日テレ 20657 La Palomita (J. Cantico) —小鳩—  
Abendglocken (Arno Gichler) …Jack Alban mit seinen Tanz Orchester  
—夕べの鐘—
- 日テレ CS219 Jalousie (Jacob Gade) —嫉妬—  
Amargura (Fronzel Joselito) —皮肉ばかり—
- 日テレ R-4 Gewitter (Temporale) (P. Codevilla) —驟雨—  
Blumen aus den Anden (P.Codevilla) —アンデスの花—

このR-4の解説書によりますと（顔写真あり）バンドネオンが随所に活躍するように書いてありますが、実はバンドネオンも入っておりますが、まあ一台又は二台であとはアコーディオンであることは私の古いプレーヤーで聴いても明らかです。しかしドイツの楽団でさすがにバンドネオンの製造国でもありますので、一台でも入っておればそれを誇ったのでありましょう。このTelefunkenには他にEduardo Bianco, Adalberto Lutter, Barnabas von Géczy, Orq. Típ. “El Aguilar”, Bernardo Alemany, Erich Börschel, Oscar Joost等があります。

昭和16年発売のコロムビア新ドイツ タンゴ レコード集No.1及びNo.2各6枚組計12枚は当時のタンゴ楽団の各種のレコード全部がマトリス本プレスでして音の良いものが出ました。

以下内容を紹介しますと

- 第一集 S 84 Cabecita (G. Filipini) —カベシーター—  
Heinz Huppertz and his Orchestra  
Rosen aus Spanien —P.d.— (P. Marquina - L. Moreillo) —西班牙の薔薇—  
Robert Renard and his Orchestra
- S 85 In Südlicher Nacht —T. Bolero— (R. M. Siegel) —南国の夜—  
Heinz Huppertz and his Orchestra  
Butterfly (L. Miguel) —蝶々—  
Robert Renard and his Orchestra
- S 86 Vision① (J. Rixner) —まぼろし—  
Heinz Huppertz and his Orchestra  
Alice im Wunderland (Tobias, Scholl, Mender) —お伽の国のアリス—  
Robert Renard and his Orchestra
- S 87 Rosita —P.d.— (Nino Iviglia) —ロシーター—  
Dajos Bela and his Orchestra  
In deinen Augen (Schmidseder and Schwenn) —君が瞳—  
Eugen Wolff and his Orchestra
- S 88 Wovon Träumt Jedes Mädchenherz im Frühling? ② (Julio Blanco)  
—夢みる乙女—  
Robert Renard and his Orchestra  
Beim Walzer mach ich die Augen zu (Fr. W. Rust) —優雅なワルツ—  
Robert Renard and his Orchestra

- S 89 La Última Canción (G. Filippini) —別れの唄—  
Heinz Huppertz and his Orchestra  
Arm in Arm mit dir (Emil Palm) —腕組みて—  
Robert Renard and his Orchestra
- 第二集 S 90 Olé Guapa<sup>③</sup> (A. Maland) —オレ グアパー—  
Eugen Wolff mit seinem Tanz Orchester  
Donna Juanita —P.d.— (Wilhelm Gahniel) —ファニタ奥様—  
Robert Renard mit seinem Tanz Orchester
- S 91 Feuerblemen (Edmund Kotcher) —ひなげし—  
Heinz Huppertz mit seinem Tanz Orchester  
Fruchling und Sonnen schein —waltz— (E. de Cutis - E. Bammann) 憂鬱  
Eugen Wolff mit seinem Tango Orchester
- S 92 Carola Carolina —P.d.— (R. M. Siegel) —カロラ カロリナー—  
Eugen Wolff mit seinem Tanz Orchester  
Eine welt voll Glueck (H. Ebert - Bruno Balz) —楽天地—  
Heinz Huppertz mit seinem Tango Orchester
- S 93 Ich bin verliebt in dein Schelmisches laecheln —ほほえみ—  
(Wetzel & José) Robert Renard mit seinem Tanz Orchester  
Ay de mí (Otha) —ひとりぼっち—  
Heinz Huppertz mit seinem Tango Orchester
- S 94 Violetta (Gorhard Mohi) —すみれ—  
Robert Renard mit seinem Tanz Orchester  
Land der Liebe —ft.— (Alois Melchar & K.F. Heine) —懐かしの故郷—  
Eugen Wolff mit seinem Tanz Orchester
- S 95 Tang Anjuschka (W. Jaeger & E. Nebhut) —アニウシカー—  
Eugen Wolff mit seinem Tanz Orchester  
O, Kastagnetten —P.d.— (Walter Schutze) —おお、カスタネット—  
Robert Renard mit seinem Tanz Orchester

内訳は

Heinz Huppertz . . . 7 曲  
Robert Renard . . . 10 曲  
Eugen Wolff . . . 6 曲  
Dajos Bela . . . 1 曲

ここで断然多いのがRobert Renardでして曲種に拘らず10曲、次いでHeinz Huppertzで7曲、第3位はEugen Wolffで6曲、Dajos Belaがわずか1曲で最下位です。当時の国情は三国同盟（日、独、伊）を軍部が唱えて主導権を握っておりましたので米英のものは排斥され、一方アルゼンチン等ラテン諸国物は排斥されず、かと言って援護もされませんでした。従ってドイツものは大手を振ってまかり通ったのです。

この中で①のVisión (J. Rixner) は先に1936年に発したEin Tangomärchenを1939年に発表したタンゴの題名に移しかえ (このタンゴはビクター VA10029BのEin Tangomärchen - Robert Gaden mit seinem Orchesterとして発売されました)、先の1936年のものを別名Visiónと改題しました。ですからこのVisiónは元のEin Tangomärchenと同一曲です。また②のWovon Träumt Jedes Mädchenherz im Frühling? はフリオ ブランコ (ラテン系か?) のCuatro Besosと同じです。(日コロ J1659のCuatro Besos… (El Dorado Tango Bandを参照) また③のOlé Guapa (A. Maland) は今日では有名になりましたが、作曲者マランドより早くオイゲン ヴォルフが取り上げた吹込みです。このRobert Renardは発売当時からOtto Dobrindtの別名であることが明らかにされていましたが、バンドネオンを持った彼の楽団写真が紹介されており、今日ではハーレクインのCD HQ CD88の表紙写真がRobert Renard楽団であります。このRobert Renard楽団の目ぼしいところを紹介しますと



写真はRobert Renard楽団

- 日コロ J 1889 La Paloma (Yradier) Mz Be 10399  
O sole mio (di Capua y Wilhelm Lindemann) Mz Be 10400
- 〃 J 1981 Caro Mio (J. Cibolla) Mz d Be 10609  
Femme et Roses (J. Cibolla) Mz d Be 10610
- 〃 J 2004 Che Papusa Oí④ (Matos and Kiritescu) Mz H75136  
Dark Eyes⑤ (Strock and Trilljary) Mz d H78013  
Otto Dobrindt and his Dance Orchestra  
④→Canta / Jean Moscopol  
⑤→Canta / Paul Mets
- 〃 J 2191 Poema (Melfi) Mz d Be10681  
El Monito (de Caro) Mz d Be10680
- 〃 J 2241 Mamma io ti chiedo perdono (Gergoli) Mz d Be10872-1  
Aromas de los Andes (Pörschmann) Mz d Be10873-1
- 〃 J 2268 Serenata Criolla (Frondel y Joselito) Mz P Be10814  
Blumen aus Tucuman (Pörschmann) Mz P Be10815
- 〃 J 2407 Pachita (Roberto y Leonardi) Mz d Be10592-1  
Romagnola (Appolon... Mz d Be19133
- 〃 J 2494 Ecuador (L. Nicolas) Mz d Be11135-1  
Mendoza (Juan Llossas) Mz d Be11133-1
- 〃 J 2966 Wovon Träumt Jedes Märchenherz in Frühling? (Julio Blanco) Mz P Be10770  
O, Kastanetten (Schütze) —P.d.— Mz d Be10739-1
- 〃 JX 1174 Santuzza —P.d.— (Otto Berco) Mz Be 11140  
Amargura (Frondel and Joselito) Mz P Be10928

♪ JX 1198 Was weisst du von mir? (Werner Bochmann) Mz Be10644

Der schönste Tango ist ein Tango mit dir (L. Schundseder) Mz P Be11045

Otto DobrindtとRobert Renardは同一人とのコロムビア レコードの解説書にありましたので、この欄で一曲紹介しました。Che Papusa Oiを唄っている言葉が判らないので故小野正孝氏に聞きましたらエストニア語だそうです。今日、相撲界に居ます把瑠都関に聴いてもらいたいものです。

まだこの他にもRobert Renardの名のあるレコードが多くあると思われまます。何しろドイツは世界大戦の半ばまで三国同盟の間柄にありましたので原盤も遅くまで輸入出来、昭和16年になっても原盤プレスの質の良い（音の良い）レコードが出来ました。

Heinz Huppertzはアルゼンチンものを得意とする楽団でしたので、可成りのアルゼンチン タンゴを本国では出している様です。例えば



独 Odeon O31762

A media Luz (E. Donato) Mz Be13565-2

La Plata mía (Eugen Charmon) Mz Be13564

日 コロ JX 46

Vieni... Vieni... (Vincet Scott) Mz Be11944-1

Ein Abschiedsbrief (Lesso - Valerio) Mz d 11860-1

♪ JX 1165

Schön ist die Nacht (Hübner Dahn & Evelyn Rehs) Mz P Be12466

Destino (Eduardo Bianco & Schwenn Schaffers) Mz P Be12465

♪ J 2846

Punta Arenas (P. Codevilla) Mz P Be11532

Juanita yo te amo (P. Codevilla) Mz P Be11531

♪ J 2697

Blauer Himmel (Joe Rixner)

Asunción (L. Nicolas)

Joe Loss and his Band

日 コロ JX 1041

Yo no sé (F. Canaro) Mz Ar 5214-1

La conga (Orefiche) Mz Ar 5215-1

Yo no séは言うまでもなくF. カナロのジョ ノ セ ポルケ テ キエロです。

(以下次号)



# 2度の世界大戦とタンゴ



齋藤 富士郎

## (1) まえがき

20世紀前半、我々は2度の世界大戦を経験しているが、それは北半球で起きたことであって、南半球諸国は平穏に過ごした（太平洋戦争時にオーストラリアでは日豪の戦いがあったが）。タンゴの歴史に関する書物・資料の多くはアルゼンチン・タンゴに焦点を当てているので、2度の世界大戦がタンゴに与えた影響については記述が少ない。それでここではタンゴやタンゴ人について2度の世界大戦に関連する事柄を諸資料から拾い出した結果をヨーロッパが中心になるけれども雑記帳程度に書き並べてみた。

## (2) 20世紀初頭（1900年頃）から第1次世界大戦勃発（1914年）まで

我国ではかつて「タンゴは1910年代に一度パリに進出したのであるが、それは下層階級の人々に向けてであったために、大きな流れにはならなかった。タンゴが本格的にパリに進出したのは第1次世界大戦の終結後である」という説明がなされ、筆者などもそれを受け入れてきた。しかし実際はそうではなく、1910年代にパリを中心にヨーロッパ主要都市で我々の想像を絶するタンゴ（厳密にはタンゴ・ダンス）の大流行があったらしい。誰がどうやってタンゴ・ダンスをヨーロッパに持ち込んだかについては諸説あるが、勿論ある人が単独でやったことではない。それらの人々の中で最も影響力があったのはアルゼンチンの有閑階級の出で、詩人で作家であり、ボカ界隈に出没する金持ち不良青年でもあった、リカルド・グイラルデス（Ricardo Güiraldes）であった。そしてタンゴは、ローマ法王やドイツ皇帝（カイゼル）ウィルヘルム2世をはじめとする支配階級の人々による



タンゴ茶会の様子

禁令や批難にもかかわらず、富裕階級、貴族階級を中心に大流行した。フランス・アカデミー（当然、富裕な人々の集まりである）ではタンゴの是非に関する激論が交わされたが、そうしているうちにもタンゴはフランス社会に浸透した。ドイツでは貴族や閣僚、高級軍人が出席する婚礼披露宴で、皇帝の禁令にもかかわらず、タンゴが踊られた。英国の貴族階級でもタンゴは受け入れられた。その流行の様は我々の想像の域をはるかに越えるものであったらしい。人々は「タンゴ茶会」に行き、「シャンパン・タンゴ」を飲み、「タンゴ色」のローブを身にまとい、あふれる「タンゴマニア」の中を泳ぐように踊った。マヌエル・アロステギが作曲したシャンパン・タンゴ（*Champagne tango*）は誰でも知っているが、実際のそのような名前の飲み物があったとは筆者はこれらの資料を繙くまで知らなかった。

当時のアルゼンチンの上流・富裕階級の人々は徹底した「フランスかぶれ」、「パリかぶれ」であっ

た。彼らはパリに習慣的に長期滞在し、フランス語で読み書きした。これらの人々がパリのタンゴをアルゼンチンの上流社会に逆輸入したことは当然あり得ることである。当時のヨーロッパで踊られていたタンゴ・ダンスはブエノス・アイレスの土着のものとは違い、上流階級向けに変形されたものであった。それでそのころ多数のアルゼンチン人がダンス教授で稼ぐつもりでパリにやって来たけれども、実際に成功する者は少なかったという。エンリケ・サボリドは1912年頃、パリにやって来てダンス教室を開いたが満足のゆく結果とはならず、その後ロンドンでも教室を開いたがこれもわずかの成功しか収めず、結局、彼のヨーロッパでの活躍は第1次世界大戦で中断した。アルフレド・ゴビ夫妻はアンヘル・ビジョルドと共に1907年にパリにやって来た。ゴビは演奏、作曲、録音活動を行い、またヨーロッパ・スタイルとアルゼンチン・スタイルを折衷したスタイルのダンスを教授した\*)。ゴビ夫妻はかなり成功してパリに自分の店を持つまでになった。戦争がなければゴビ夫妻やビジョルドはそのままパリに居着いた可能性が高いが、1914年7月に第1次世界大戦が勃発すると彼らを含めた大部分のアルゼンチン人はフランスを脱出し、帰国した。春秋の筆法をもってすれば、第1次世界大戦によってこうしたタンゴ好きな富裕なアルゼンチン人が多数帰国したことがアルゼンチン・タンゴのブエノス・アイレスのセントロへの進出を促進したとも言えるのではなかろうか。

竹村 淳氏によれば、1913年にすでにこの時代のヨーロッパでのタンゴの流行が日本に紹介され、1914年には横浜で米国人ダンサーがタンゴを踊って見せたという。しかし第1次世界大戦によって日欧の交流は途絶し、日本への本格的なタンゴの紹介は1920年代の目賀田男爵の登場まで待たねばならなかった。

### (3) 第1次世界大戦期 (1914年－1918年)

第1次世界大戦は1914年7月28日に始まった。開戦から1か月余の9月5日－11日に、パリからそう遠くないマルヌ河畔において有名なマルヌの戦いがあり、英仏連合軍がドイツ軍の進軍を阻止した。しかしマルヌの戦いで戦争が終わったのではなく、以後、両軍は塹壕に潜んで対峙し、戦線は膠着し、歩兵による突撃とそれを迎え撃つ機関銃の掃射が繰り返される悲惨な状況が4年間続くことになる。その状況はシレンシオ (*Silencio*) (作曲は1932年) の歌詞の一節 “Los hombres se matan cubriendo de sangre los campos de Francia (男たちはフランスの野原を血に染めて殺し合う)” そのものであったろう。なお、この曲はフランス大統領となったポール・ドゥメ (Paul Doumer) の5人の息子がすべて第1次世界大戦で戦死したという史実に基づいている。



タンゴも兵士の慰問に一役買った。前線から賜暇で戻った若い兵士たちは悲惨な塹壕戦を忘れるためにナイトクラブやダンスホールで一夜の快樂を過ごした。彼らの相手をした女たちも彼らがもう決して戻ってこないことを知るだけであった。このような事情はフランス側もドイツ側も似たようなものであったろう。

エドアルド・アローラスはマルヌの戦いの勝利を耳にして直ちにエル・マルネ (*El Marne*) を作曲したとはよく言われることである。もしそれが事実ならエル・マルネの作曲年代は1914年のはずであるが、INVENTARIO DEL TANGO では1917年作曲となっている。恐らく1917年に著作権登録

\*) この意味でゴビは折衷派(l'eclectique)と呼ばれることもある。

されたのだろう。ラファエル・トゥエゴスの回想によればアローラスは演奏中に曲想が浮かびその場で作曲することがしばしばで、エル・マルネもデレーチョ・ビエホもそうであったというから、或いはすでに出来上がっていた曲に登録時にエル・マルネと命名した可能性も否定はできない。

アルゼンチン出身のタンゴ人は皆開戦と共に帰国したので、彼らが戦争の犠牲になったという話は無い。しかしタンゴ人ではないが画家 (artist) のホセ・ガルシーア・カルデロン (José García Calderón) という人は志願してフランス軍に加わり、1916年のヴェルダンでの戦いで戦死した。

この戦争ではフランス政府は海外在住のフランス人も徴兵の対象にしたらしい。当時まだフランス国籍であったカルロス・ガルデル (Carlos Gardel) は1915年11月17日にフランス領事館から入隊のための呼び出しを受けた。それでガルデルはあわてて手を尽くしてアルゼンチン出生とする偽の証明書を作成してもらい、徴兵を逃れた、という話がある (Juan Carlos Esteban, [http://www.todotango.com/english/gardel/CRONICAS/cronica\\_70\\_anos/asp](http://www.todotango.com/english/gardel/CRONICAS/cronica_70_anos/asp))。

カジェタノ・プグリシ (Cayetano Puglisi) は始めクラシック音楽のバイオリン奏者を志し、1914年12歳の時にプロ・バイオリン奏者としてのデビューを果たした。同年、ヨーロッパへの奨学金留学を許可されたが第1次世界大戦勃発によりその話は立ち消えとなり、結局、タンゴへの道を歩んだ。

ハンガリーの恐らくは下級貴族 (ユンカー?) であったバルナバス・フォン・ゲッツイ (Barnabás von Géczy) (1897年、ハンガリーのブダペスト生まれ) は第1次世界大戦ではオーストリア-ハンガリー軍に加わっていたという。生年を考えると20歳になったかならないかの頃である。

アルゼンチンのレコード業界も戦争の影響を被った。1912年頃、アルフレド・アメンドラによって設立されたアトランタ・レコードは録音だけをブエノス・アイレスで行い、それ以降のレコード製作工程は最終製品に至るまですべてドイツの会社に委託していた。この生産方式は開戦後も1915年末頃までは続けられた。しかし結局それは困難となり、代わってブラジルのポルト・アレグレのレコード製造業者と契約を結び、初めは録音だけはブエノス・アイレスで行っていたが、間もなく録音も含めてすべてを現地で行う方式に切り替えてレコードの製造・販売をした。それで演奏家たちはブラジル国境までは鉄道で、入国後は自動車でポルト・アレグレまで赴かねばならなかった。しかしある時、アトランタ・レコード製品を最大の積み荷としてブエノス・アイレスに向けて輸送していたドイツ船が魚雷攻撃を受けて沈没するに及んで、アトランタ・レコードは経営破綻に陥り、消滅した。ビクトルやコロンビアのような大手のレコード会社もヨーロッパにおける彼らのレコード資産を凍結・保護したためにアルゼンチンにはレコードが入らなくなり、ブエノス・アイレスのレコード市場は冷え切った。

#### (4) ナチスの政権掌握 (1933年) から第2次世界大戦前夜 (1939年) まで

1920年代は、各国の経済は安定した成長をとげ、人々の生活にゆとりが生まれ、大衆文化が登場した。アルゼンチンも大いに繁栄した。タンゴの第1期黄金時代である\*\*)。しかし1929年に始まった世界大恐慌はそうした東の間の繁栄を打ち砕き、世界経済は混乱し、ヒトラー率いるナチスの台頭をもたらすことになった。

\*\*) 最近のブエノス・アイレスでは1935年から1950年までをタンゴ黄金時代とする考え方が一般的であるが、ここでは日本のタンゴファンの考え方を踏襲した。

1933年にナチスが権力を掌握すると、それまでドイツで活躍していた多くのユダヤ系のタンゴ人はドイツ国外に逃れた。多数のアルゼンチン人とウルグアイ人の音楽家もドイツを去った。

ユダヤ系ルーマニア人を両親とするマレク・ウェバー (Marek Weber) は1933年に英国に移り、更に1937年に米国に移住し、典型的なウィーンのカフェ音楽の代表者として人気を博した。彼は1962年にコロラドのデンヴァーで亡くなった。

ドイツのホモコード・レーベルに多数の録音をしたユリアン・フース (Julian Fuhs) は1937年にパリに行き、そこから更に米国に渡った。ユダヤ人であるかどうかははっきりしないがベルナルド・アレマニー (Bernardo Alemany) も1940年に米国に移住し、市民権を得た。

バルセロナを拠点として活躍していたトリオ・アルヘンテイーノ (デマレーフガソールスタ・イ・ス・オルケスタ・ティピカ) は1930年代半ばにその活動を終えたが、それは1936年から1939年までのスペイン内乱 (市民戦争) と無関係ではないだろう。因みに1931年に国王の座を追われたスペインのアルフォンソ13世はタンゴ愛好家でもあった。

一方、ナチスに近いタンゴ人もいた。その代表はアクティブなファシスト支持者であったエドアルド・ビアンコ (Eduardo Bianco) で、彼の作品のデスティノ (*Destino*) は何とムッソリーニに捧げられたという (ギリシャのゲオルゲ国王に捧げられたという説もある)。彼はヨーロッパの王侯貴族や上流社会の人々に向けて演奏活動を続けた。また彼はナチス・ドイツで録音許可をもった唯一のアルゼンチン・マエストロであった。



マレク・ウェバー



エドゥアルド・ビアンコ楽団の出迎えを受けるアルフォンソ13世。ギターを持っている人物はオラシオ・ペトロッシ。

## (5) 第2次世界大戦期 (1939年—1945年) 及び戦後期

太平洋戦争の時代、日本人はタンゴどころではなかった。それは以下に引用した加年松 城至氏の文章によく表れている。1971年、ロシータ・キロガが観光で日本を訪れた時、加年松氏は人を介して一面識もなかったキロガに1通の手紙を送った。そこには以下のような文章がある：

「…私は戦争の末期の頃、米軍機が来襲するたびにレコードを抱えて防空壕に逃げ込みました。それらのレコードは貴女がビクトル社に録音したビエハ・ギタラ、センチミエント・マレーボ、ビエホ・コーチェ、ネグロでそれらは何時も私と共にありました。



加年松 城至氏

夜毎、敵機が音楽の音を聞きつけるのではないかという無知な人々の苦情にもかかわらず、私は蓄音器を布団でくるんでタンゴを聴いて居りました。しかし不幸にも1945年5月29日、我が家は爆撃を受け、愛聴していたレコードも含めてすべてが灰になってしまいました。…」 (Luis Alposta, [http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/carta\\_de\\_yoyi.asp](http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/carta_de_yoyi.asp))

キログがこれをどう受け止めたかはわからないが、現代の日本の若者でもこの記述をどの程度実感を持って理解できるかは疑問である。しかしこれは紛れもない事実である。

日本でも桜井潔楽団に代表されるようなタンゴ楽団（タンゴばかり演奏したわけではないが）は1942年頃までは存在したが、戦況が厳しくなって消滅していった。楽団員の中には召集・戦没された方も多いと思うが、それに関する資料は無い。そして日本は加年松氏の手紙にあるような状況に追い込まれていったのである。

1920～1930年代のドイツではベルリンを中心に多くのダンス・オーケストラ（タンゴ以外のダンス音楽も多数手がけた）が腕を競い合ったが、戦況が厳しくなるにつれて楽団の維持が困難になり、また戦争に駆り出される楽員も少なくなかった。

バルナバス・フォン・ゲッツイは戦時中も演奏活動を続けたが、1942年には召集された楽団員の補充が困難になった。彼は戦後、オーケストラを再編成し50年代半ばまで活動を続けたが、すでに彼の音楽は時代遅れになったことを悟って活動を停止し、ミュンヘンに引退生活を送り、1971年に亡くなった。フォン・ゲッツイはナチスに近かったという話を筆者は耳にしたことはあるが、諸資料にはそのような記述は見いだせなかった。



バルナバス・フォン・ゲッツイ

バイオリン奏者で1920年代半ばからオーケストラを率いて演奏・録音活動をしていたオスカル・ヨースト（Oskar Joost）

（1898年生まれ）は1933年にナチスに入党した。そして1940年1月に召集を受けて入隊し、中尉にまで昇進した。彼は1941年に東部戦線で重傷を負い、ベルリンに戻ったもののその年の5月にインフルエンザで亡くなった。



オスカル・ヨースト

1930年代にエレクトロラ・レーベルに精力的に録音していたウィル・グラエー（Will Glahé）も召集を受け、恐らく連合軍と戦い、やはり重傷を負い、スコットランドの戦争捕虜収容所に送られた。彼はそこに終戦まで留められたが、そこで戦争捕虜収容所オーケストラを結成し、指揮を取ったという。戦後、彼は録音活動に戻り、1989年にボンで亡くなった。

ドイツの多くのタンゴ楽団の中でファン・ジョサス（Juan Llossas）の楽団は戦前、戦中、戦後を通して活躍を続けた。1900年にバルセロナに生まれた彼は1920年代半ばに楽団を持ち、初めはいろ



ファン・ジョサス



飛行機に乗り込むファン・ジョサス楽団

いと苦勞もあったようだが、遂にはドイツ以外の国々への演奏旅行には飛行機をチャーターするまでの成功者になった。彼は召集は受けなかったようだが（恐らくスペイン国籍であったためだろう）、1942年から1944年まで、恐らく軍隊の慰問活動のためにロシアに派遣された。そのままロシアに留まっていたら悲惨な目に合うところだったが、彼は幸運であった。戦後、彼はハンブルグのダンス・クラブに出演していたが、戦後のこととてその観客の中には英国の進駐軍兵士たちが多数おり、またその中に進駐軍放送局（BFN）の関係者が居た。彼らはジョサス楽団の演奏を高く評価し、ジョサス楽団を徴用の形でBFNに出演させたが、その結果、彼の名前は英国でも知られることとなった。それでBFNはジョサスと徴用演奏を含む正規の演奏契約を結んだが、それにはBBC ロンドンの放送番組「タンゴ・タイム」のために毎週タンゴの新曲を1曲作るというとんでもない条項があった。それで彼は4年間に200曲のタンゴを作曲したが、4年目には精根尽き果て何も曲想が浮かばなくなってしまったという。そこで彼は契約を延長せず、1951年以降は以前のような演奏旅行に戻った。そして1957年、ザルツブルグでの演奏中に脳卒中で急逝した。



前述のように、ファシスト支持者であったエドアルド・ビアンコは大戦勃発後もドイツに留まり、活動を続けた。1940年に彼はドイツ放送局のラテン・アメリカ向け宣伝短波放送のために多数の録音をした。また1942年にナチ・ドイツ占領下のオランダを演奏旅行し、また短編映画を製作した。彼は1943年にアルゼンチンに戻り、テアトロ・ナシオナルに雇われた。しかし戦争の真っ最中の1943年にどうやって大西洋を渡ったのだろう。1949年—1950年にはフリアン・プラサ、アティリオ・スタンポーネ、アルフレド・マルクッチらからなる楽団を編成してヨーロッパ・中近東を巡演し、録音もしているが、経営的には大赤字であったという。

エドアルド・ビアンコ      これ以後、彼の楽団活動は無く、1959年にアルゼンチンで亡くなった。

ベルナルド・アレマニー楽団のバンドネオン奏者であったエクトル・ヘンティーレ（Héctor Gentile）も大戦中ドイツに留まり、クアルテート・アルヘンティーノを組織して、1943年1月から7月にかけて前述の宣伝短波放送のために多数の録音をした。但しその多くはタンゴではないようだ。彼がその後どのような運命を辿ったかは不明である。

1920年代にパリに渡ったアルゼンチン・タンゴ人の中で、ターノ・ヘナロ（Tano Genaro）、マリオ・



ターノ・ヘナロ



左から、カルロス・アクニャ、フアン・デア  
ンブロッジオ、アルヘンティーノ・レデスマ



マリオ・メルフィ

メルフィ (Mario Melfi)、ファン・デアンプロジジョ (バチチャ) (Juan Deambroggio “Bachicha”) は戦争中もフランスに留まった。ドイツ占領下であってもパリは戦火にさらされなかったので、少なくとも戦争の前半までは、演奏・録音活動を続けることは可能であったのではなからうか。但しメルフィは戦時中、スイスに逃れていたという話もある。ターノ・ヘナロは1944年初頭にパリで亡くなっているが、メルフィとデアンプロジジョは戦後も、おそらく1960年代まで、演奏・録音活動を続けた。デアンプロジジョは1963年11月に、メルフィは1970年9月に亡くなった。

パリで大成功を取めたマヌエル・ピサロ (Manuel Pizarro) は自分のキャバレー「シェ・ピサロ」も、ブルヴァール・ド・クリシーの豪華アパートも放棄して、1940年にフランスを出た。出国の際に外国人が持ち出せたのは5万フランまでであった。彼は始めバルセロナに行き、次いでエジプトのアレキサンドリアとカイロに行き、オンボロ貨物船に乗ってアフリカ大陸を東から西に回り、ブラジルのペルナンブク (Pernambouc) を経て、1942年4月11日にブエノス・アイレスを出てから20年ぶりに故国に戻った。彼は8年間ブエノス・アイレスに留まったが、すでに「今浦島」の状態、彼の演奏スタイルはもはやブエノス・アイレスでは受け入れられなかった。そこで彼は再びパリに戻る決心をし、1950年にエクトル・グラネ (Héctor Grane) らを連れて再びパリに戻り、演奏活動を再開し、それは1970年代まで続いた。アルゼンチン人であるよりフランス人であった彼はニースに引退し、1982年に亡くなった。



マヌエル・ピサロの戦後録音のLPの一例

ピサロ、メルフィ、バチチャ、の戦後録音を聴くとどれも同じようであって、互いに区別がつかない。また演奏曲目にもフランス語のタイトル (=フランス製タンゴ) が多い。

第2次世界大戦に参戦しなかったアルゼンチンは食料輸出国として大いに富を蓄えた。1945年当時、アルゼンチンの外貨保有高は5000億ドルを越え、アルゼンチンは世界で最も豊かな国であった。そのことが1950年代の第2期タンゴ黄金時代をもたらしたというのは間違いのないところであろう。しかしペロン政権がその富を使い果たすと共に第2期黄金時代も終わった。

第2次世界大戦終結から11年後の1956年にオスバルド・プグリエセは自作曲、**戦争を遊ぶな (No juegues a la Guerra)** (作詞はモデスト・モラレス・ミラモンティ (Modesto Morales Miramonti))、をホルヘ・マシエルの歌入りで録音した。この年はペロン政権が倒れ、軍が権力を握っていた時代であり、プグリエセは恐らくそのことを背景にこの曲を作ったのであろう。この曲は聴いてみると名曲とは言い難く、曲想も何となくシレンシオに似ている。歌詞内容もシレンシオに比べれば理屈っぽく、詩情に乏しい。それ故、この曲の真価は曲想や歌詞ではなく、プグリエセが我々に対して発したメッセージとしてのタイトルそのものにあると考えたい。

時代を超えて輝くタンゴ\*

## ～小松真知子とタンゴクリスタル～

山本幸洋（東京）



小松真知子とタンゴクリスタル（左から、小松真知子、北村聡、小松勝、吉田篤）

継続は力なりというが、ここ四半世紀の日本タンゴ界を引っ張ってきた存在として、小松真知子とタンゴクリスタルは特筆されるべきバンドである。リーダー／ピアニストである小松真知子とギター／アレンジを担当する小松勝のふたりを核とし、息子である小松亮太を筆頭格に若く優れたミュージシャンを育てながらバンドを継続させていくのは、古今東西の名流バンドにしばしば見られる沿革である。音楽家としての確かな技量、メンバーを束ね引っ張っていくリーダーシップ、安定した活動の場を得る運営力。半世紀前ならともかく、バンドの経営が難しい現代において世界のタンゴ・シーンに誇るべきバンドと言える。

本稿ではタンゴクリスタルの軌跡を記し、さらなる発展へのエールとしたい。幸いなことに小松ファミリーは当アカデミーのメンバーであり、新たな取材を行うことができた。お話を伺うのは実に楽しく、ついつい脱線したり、時系列があっちこちに行ってしまうので、年表と参加ミュージシャン表、アルバム紹介を後半にまとめ、小松真知子・勝両氏の言葉を活かしてお届けしたい。



## 育 ち

**真** 父親がラヴェルとかドビュッシー、フランス近代音楽が好きで、その影響はあります。小さい頃にアコーディオンを弾いていたから、坂本政一さんのバンドに初めて行ったときに、バンドネオンを知っていたので、そのままバンドに誘われちゃった。タンゴにもいろいろあるけど、最初は勝さんに教えてもらったピアソラを好きになって、ピアソラをタンゴだと思ってたけど、「ラ・クンパルシータ」がタンゴだとは知らず、だけど藤沢嵐子さんは歌声も子供の頃からテレビで知ってました。嵐子さんは、母親と同年、大正14年生まれなんです。

**勝** 僕は音楽は好きだったんだけど、どれが好きということはなかったですね。ただ、タンゴを聞いたときは、何かこうきましたね。もっともショックが。

## プロの世界へ

1958年にティピカ東京に参加し、タンゴ歌手としてデビューした菅原洋一は、まもなくして歌謡曲へ転向、70年に「今日でお別れ」で日本レコード大賞を獲った。そんな折り、再び菅原にタンゴを歌わせたいという動きがあったが、藤沢嵐子が辞めたティピカ東京はすでに活動を停止しており、小澤事務所所属の坂本政一とポルテニヤに白羽の矢が立った。オクテート編成となっていたポルテニヤはホテル高輪で毎日ダンス音楽をやっていたが、専属ピアニストがいなかった…。

**真** まず小学校のクラブでアコーディオンをやっていたんだけど、その音楽の先生にピアノに転向しろって言われて、桐朋まで行きました。ヤマハの、先生を教える先生（指導講師）の資格を取ったにもかかわらず、雇ってもらえませんでした。新卒の女性が同い年の女性を教えるわけにいかないって言われて。（笑）今なら女性蔑視で問題になるかもしれませんが、そう言われてすぐに引き下がってしまいました。就職先がなくなってしまい、友達の伝手でポピュラー・ピアノの仕事を始めました。高輪プリンスホテルのトリアノンでピアノとヴァイオリンとチェロで演奏活動を始めたんです。ところが、外人から知らない曲ばかりリクエストされるので楽譜を買いあさりに行きました。コードネームも、ろくに知らずに、こういう響きだからこういう和音をつけるんだな、と考えて手あたり次第弾き始め、すっかりのめり込みましたね。もともと映画とかシャンソンとか、エディット・ピアフとか、大好きだったから。それこそ、「ママ恋人が欲しいの」なんてほとんど歌詞も知っていたもの、昔から。子どものとき聞いただけなのにね。ミーハーです。

**勝** 和声感覚がわかる。これは重要な問題なんだよ。色合い、音、曲の色合いを感じることに。

**真** そのうち、隣のホテル高輪というところで、ポルテニヤがピアニストを探してるって話が…。

**勝** ホテル高輪には俺がいたんだよ。

**真** 1972年の、11月1日と2日にホテル高輪に来てくれないかって言われたの。

**勝** そうね、菅原洋一さんの伴奏のためにタンゴ・バンドがあったの。ところが、ピアニストが居着かないの、いいヒトが。それでいろんな人を、学生にも声かけていろいろ探してみましたね…。

**真** 当時はまだホテルのラウンジにはダンスのためのバンドとBGMのソロピアノ、交互の生演奏があったのね。でも毎日、菅原さんが出るわけじゃないから、バンドのタンゴ演奏を目当てのお客さんは減るいっぱい。菅原さんがレコード大賞を取ったから、ホテル高輪にそのバンドが残っちゃったんだ。

勝 そうなの。「今日でお別れ」でね。

真 だから、タンゴ・バンドというよりはダンス・バンドになっていった。ドラムやギターも入れて、リズム隊を強化して。

勝 そうそう。せっかく箱（固定の仕事場）があるのにこれがまわっていかないということになってきた。ひとりで自由のきくピアニストがとにかく居着かない。

真 私なんか行くようになって2日目には坂本政一さんと小澤社長が来て、このバンドに入りませんかというから、何言っているんだろう、私何にも弾けないじゃないと思いました。

勝（ピアニストとして）座ってくれないと、格好つかなかったんだよ。

真 とにかくバンドらしく見えるようにということでしょう。ポルテニアに参加しました。

上海バンスキングじゃないけれども、本当にバンドのにおいが立ち込めていましたよ。みんな合間にマージャンしているの。ホテルの支配人まで一緒に！

今の若いミュージシャンなんかじゃあり得ないことばかり、みんなぶかぶかたばこを吸って、お酒も飲む人は飲みながら、ただ出番だけ30分5回ぐらいやるからね。

勝 そうそう。5回だったね。

真 誰も将来のことなんか考えてないみたいだった。そんな雰囲気も新入りの私には魅力的だったけれど。

## 音楽の世界へ

では、勝さんがプロの音楽家になったのは、どういうきっかけだったのだろうか。

勝 ボクは神戸製鋼系の会社で経理をやっていたサラリーマンだったんです。でも2年もしたら急に辞めたくなくて、新聞の広告か何かを見てイトウ音楽事務所という呼び屋のところへ行ったの。そうしたら次の日からいきなり名刺…チーフ・ディレクター小松勝と書いてあるんですよ。これを持って、これから公演会、北海道から九州まであるんですが、あの楽団連れて回って来いと言うんだよ。ボクひとりですよ。連中ずらーっと連れて事故のないように、毎日、無事に済みましたと電話をかけて。バスも電車もいろいろ、その手配も全部やるんですよ。僕の手帳もうびっしりですよ。今みたいにインターネットで調べればいい時代じゃないですからね。次の日にどうなるか判らないというのはすごくスリルがある、楽しかったね、マランド楽団のマネージャーをやって…。

真 コンチネンタルだけどタンゴに触れたわけね。でもその前に立ちんぼやったり、ジャズ・ギターやっていたじゃない、昔。

勝 うん、クラブのバンドというのは人数でお金をもらっているから、最初のころボクは弾けないけどそっと座っているだけでお金をもらったんですよ。譜面を読んだこともなかったんですが、毎日譜面を持って帰って練習して、それで弾き始めたのが始まりなんです。ナイト東京という日本で初めてのホストクラブ、東京駅にあったんですけども、そこでしごかれて、それで何となく弾けるようになったんですよ。小澤音楽事務所へはどうしたんだっけかな。

真 ほら、中田智也さんのバンドから引き抜かれたんじゃない？

勝 思い出した。俺は中田智也さんから、お前何も譜面も読めないから勉強しろって行って、平吉毅州先生を紹介してもらったんだよ、芸大の先生を。

真 「ラ・シルエッタ」っていうタンゴを書いた平吉……

勝 うん、タンゴもちょっと好きでやっていたわけね。その先生に教えてもらいに行ったんだった。

真 ト音記号の書き方から教えてもらった。

勝 (笑) 大先生に。

## タンゴに惹きこまれていく、そしてタンゴ衰退期

おふたりに共通しているのは、タンゴは音楽を始める動機ではなかったことだが、いつしかタンゴの魅力に取りつかれていったことだ。そのあたりを伺ってみよう。

真 ポルテニアのエキストラに行くようになってから、「カナロ・エン・パリ」を聴いたの。ラララ〜♪というあのフレーズを聞いたときに、これは何だ、ラテンとヨーロッパの香りと両方あるぞ、そして勝さんに聴かされたピアソラの「モダンタンゴの20年」に特にしびれましたね。ああいうヨーロッパの香りも高く、しかも、ちょっと悪魔がかっているようなロマンティシズムが元から好きで理解できた。ダリエンソなんかはその頃は良さがわからなかった。タンゴリズムのスポーツ的快感も大きな魅力なんだけれど、私には「19世紀ロマン派の影を宿している」タンゴに夢中になりました。もう（進むべきは）タンゴよ、ってそのとき思いました。高輪プリンスでクラシック、ホテル高輪でポルテニヤというふうに両方行くようになったの。クラシックの仕事をしていたときもポピュラーをリクエストをされることもあったし、ホテル高輪ではタンゴバンドに入ってポピュラーも弾くように。いろいろ弾くようになって、もう楽しくて、…。

勝 そこは小澤事務所が仕切っていたわけ。

真 当初から何でも弾けるようになろうと思って、すごい楽しみにして。結婚し亮太が生まれてすぐ仕事を再開しました。亮太の手が離れてからポピュラーのほうの仕事をしながら、ジャズの人にコード進行とか習ったんです。ジャズのコード進行のおしゃれさの秘密を知りたくてね。このころ多くのバンドは解散に追い込まれていたけれど、小さなユニットやソロならまだまだ生演奏の需要はあった時代。ヘンリー・マンシーニとか、いい映画音楽もたくさんあったし、勉強したいネタがたくさん。勝さんがオルケスタ・ポルテニアを引き継いだり、先輩ミュージシャンからも誘ってもらえて、さらに早川真平さんにティピカ東京にまで入れてもらった。

勝 そう。それはまともにタンゴに向かう人がほかにいなかったんだ、結局。

真 周りはタンゴの衰退期と言っていたけれど私には初めての経験で、新鮮でしたね。

勝 坂本さんが辞める時、君に譲るからって譜面もらったんだ。

真 そう。ホテル高輪もお客さんが来なくなってしまうと、サパー・クラブとかダンス・ホールの時代ではなくなったのよね。



明日へのメッセージ／京谷弘司トリオ 1982年  
FARRD LM-1391

LADO; A

Recuerdo

Romance de Barrio

Berretín

Que Falta de Respeto!

Otoño Porteño

LADO; B

Tal Vez un Día

El Motivo

Payadora

Sur

Adios Nonino

勝 昔はキャバレーでもタンゴやってたんだけどね。ところでアレンジも最初はコピーだよ。そのうちにアクションつけたいなと。

真 アレンジも数をこなすことで、上手になったわよね。志賀さんにはヴァイオリンを徹底的にフィーチャーしたものを書こう、そういうはっきりした目標があるからコピーとは違う腕を磨けたのよね。

勝 集中して取り組めるし、面白かった。

## 京谷トリオを経てクリスタル結成へ

真 アルゼンチン大使館で、ピアソラの初来日公演の歓迎レセプションに、志賀さんのモデルノスがでたのよね。志賀さん、京谷さん、勝さん、私。また、同時期京谷トリオに誘って頂きましたが、この頃が少人数編成バンドの始まりではないかしら。実験でもあったんですね。京谷さんも意欲的に譜面を書き、また（ディノ・）サルーシにアレンジを頼んで。勝さんの新曲「TAL VEZ UN DÍA = 邦題：いつかある日」の命名は藤沢嵐子さんです。その時嵐子さんは「ADIÓS NONINO」を練習していて、その歌詞の最後に出てくる言葉がTAL VEZ UN DÍA なんです。熊田洋さんの曲も入れてね、意欲的だった。このトリオでは勝さんがエレキ・ベースを弾きました。

勝 そうそう。

真 京谷さんとは家も近くよく練習しました。それを、黄色い帽子をかぶった小学生の亮太が見ている。こどものときからバンドネオンを知っていたのは確か。当時タンゴ以外のポピュラー&クラシック音楽をやるバンド（後の「ステンドグラス」）も始めたの。だからタンゴもポピュラーも両方やるバンドを新しく立ち上げようと思いました。バンド名は最初はクリスタル5（ファイヴ）という名前にしました。ピアノ・バンドネオン・ヴァイオリン・ギター・コントラバス、5人のキンテート。タンゴクリスタルが生まれるきっかけとなりました。「クリスタル」は英語にもスペイン語にもある言葉なので、だれにでも覚えてもらえる、ということで選びました。つまりはじめはタンゴだけを目指してたわけじゃないの。でも、徐々にタンゴ指数が高くなっていった。銀座コリドー街のライブ・ハウスや、できたばかりの新宿ミノトールでおおいにライブしました。ミノトールでライブをやっているときにあるディレクターの目に留まって、ちょうど（タンゴ・アルゼンチーナか？）タンゴがブームのようになって、キングからCDを出さないか？って誘っていただいたの。アルゼンチンもコンチネンタルもいけるから、ただし一枚を二日で録る！ってことになって。

勝 そうそうそう。

真 87年、キングからアルゼンチン編とコンチネンタル編と二枚制作。

勝 録音の追い込みには30分で1曲なんてこともあったね。

真 しかも、LP、カセットテープ、CDと3種類制作。一番売れたのは、コンチネンタル編のカセットテープ。今とはだいぶメディアの状況がちがいますね。25年前ですからね。同じ頃、去年（2011）閉店した銀座の音楽サロンWINに出会い、その運営母体ITO



アストル・ピアソラ初来日公演(1982年)レセプションにて：左から勝、志賀清、真知子、ピアソラ、京谷弘司

コーポレーション企画協力によるコンサート、海外レセプションパーティ出演、自主CD制作など忙しくなりましたね。

もっと前、ヤマハからピアノ自動演奏システムの『アルゼンチンの詩情』『コンチネンタルタンゴ=世界の音楽シリーズ』というアルバムを阿保郁夫さんの紹介でリリースしました。

勝 外国の、どこだっけ？ 真知子の音が流れたんだよね。メンバーがさ、あれ？真知子さんのピアノだ！っていう

真 サイパン島のガレリアで「アディオス・ムチャーチョス」

勝 ヤマハのピアノプレーヤー（自動演奏装置）だね。いつ頃の録音だっけ？

真 80年か81年、だと思うけど、...

### クリスタルが目指したのは

真 ここ10年ほど、コンサートのタイトルに「時代を超えて輝くタンゴ」と、つけることが多いです。昔も今も、一番の望みはタンゴがエンターテインメントとして当たり前存在すること。私たちは成り行きでここまできた感が強いけれど、あと少し、時代を超えて、人に寄り添ったタンゴを語りたい。誰もが愛する曲はもちろん、忘れられた名曲を再現したい。80年代始め「ジュビア・デ・エストレージャス」とかピアノをフィーチャーした曲をやってみたいと思っていました。ティピカ東京でオルランド・トリポディさんを呼んだとき、私は感銘を受けて、ツアーと一緒に廻らせてもらって、サルガンにも習って。そのときに勉強したいのはこれだって思ったの。これがタンゴなんだ！と。タンゴに目覚め、すごく幸せと思ったわね。

勝 オレ達は、タンゴを始めてタンゴはこうあると積み重ねてきた結果、今があると思うんです。流行っているからタンゴやろうっていうんじゃなくて。オレ達は本モノを見てきたからな。

真 あとから亮太にいわれたけれど、どうしてバンドネオンを呼ぶときに最初からガイジンを呼ばなかったんだ？って、随分いわれましたよ。親にも厳しいですからね、あの人、ホントに（笑）これだけ資料があって、どうしてもっと突き詰めないんだって（笑）それはアンタに任せるから、私の方は人間関係作ったり、仕事を作ったりだけで、人生のほとんどの時間を費やしたね。楽しい反面、自分からアクション起こさないと仕事が無い、仕事が無ければ誰にも会わない、80年代くらいから今に至るまでメジャー以外の音楽家は、そんな辛酸をなめてきましたね。



オルランド・トリポディ楽団と  
(1981年)

左から  
カチョ・ジャニーニ  
柚木秀子  
ファン・カルロス・バジェーロス  
オルランド・トリポディ  
小松真知子

勝 そうそう

真 綱渡りみたいな人生よね。亮太がバンドネオンを始めるまではほっときっぱなしで、手帳には自分のスケジュールは書いてあっても子供のスケジュールは書いてない（笑）申し訳ないな、とは思っていたけど（笑）。その代わり、音楽を始めたときには最大限、出番だと思った。ああしなさい、こうしなさいと言ったわけではないけど、構いました、私は。本人も燃えましたね。

勝 音楽家は自分がやる気にならなきゃどうにもなんないからな。環境良かったよ。

真 ここしかないっていうポジションに、バンドネオンを弾く男の子がいた、それが音楽家になったかった。うちの仕事をガイジンがやりたいと思うなんて、そんな自信はなかった。たまたまやったのが、成り行きでそこまできた。

勝 日本の曲をタンゴにしたのも良かったね。

真 生粋のアルゼンチン・タンゴを学ぼう、そして伝えようと夢中な時、コンチネンタル・タンゴやってって言われたのよ。少し戸惑ったけど、私たちはお客さんの願いは是非叶えたい。そこでおしまいをコンチェルト風にしたりして、「黒い瞳」をアレンジしました。聴く人の気持ちや時代に寄り添う、その思いをレパートリーに込めたい。

真 亮太が良く言っていたのは、今年はこのメンバーでこれをやるっていうやり方はできないの？って。私たちにはメジャーがついているわけじゃないし、もちろん応援してくれるヒトはいるけど、バンドなんてのは運営が難しいものなんだから。半分、趣味のように注ぎ込んできたんだけど。お客さんが何を聴きたいかを常に念頭においてきたの。

勝 そうそう

真 タンゴクリスタルの沿革も、仕事が出来てからバンドを作ったって感じなんですよ。最初に仕事ありきで、何を求められているのかと。

勝 そう、お客さんは何を聴きたいんだろう？ということもいつも考えてきた。

真 お相撲さんがね、一日一番っていうじゃない、で、皆さんに喜んでもらえるような相撲を取りたいって。まじめに取るだけならプロなんだから当たり前。日本にエンタテインメントのタンゴが根付くのが、いまの私にとって一番の望みかな。みんながアルゼンチンのことを熱く語るのも良いけど、いま初めて聴くヒトには馴染みにくいわけ。

勝 ボクはね、お客さんの年代を見てレパートリーを変えることはいつでもできる。レパートリーたくさんあるから。オリジナリティもあるし。

真 2003年くらいまでは、船に乗ったときだけお客さんの年代に合わせて、人気があるのでBGMにもメイン・ショウにもコンチネンタル・タンゴを取り入れてましたけど、いざ録音となるとコンチネンタル・タンゴはやらないようにしていました。「ジュビア・デ・エストレージャス」とか「鍵盤の悲しみ」とかは自分のウリだと思うので以前からやっていましたけど、途中でプグリエーセをやり始めて、あるときスウィングを会得できたんじゃないかと思ったときに、ほかの曲の弾き方まで変わっちゃうほど楽しかった。

## タンゴの真髓

真 ジャズっていうのはインテンポでしょう。インテンポの中に歌うでしょう。そして即興演奏が生命。インテンポの快感を主体にしている古典スタイルのタンゴ楽団も魅力だし、それも弾けなくて

はいけないけど、タンゴは同じリズムでも動くんです。しなるといふか。それをタンゴ奏法の常識として身につけないとね。それから緩急のサイクルが短く呼吸するところがある。だからジプシー音楽や、ヴァイオリンの揺れる型、あの揺れが好きな人じゃなくちゃだめなの。

**勝** ああいう感覚がないとね。さばさば割り切れないと気が済まない人には向かないね。フレーズをどう弾くか、そこがポイントだね。

**真** 亮太にも『昭和タンゴ・プレイバック』というアルバムがありますが、一番多いのは、コンチネンタル・タンゴとアルゼンチン・タンゴはどう違うの？という質問です。クリスタルではミニ昭和史も交え第一部コンチネンタル・タンゴ、第二部アルゼンチン・タンゴと言う構成でのコンサートをよくや



タンゴクリスタル1996年 左から、勝、亮太、真知子

ってます。これはタンゴの啓蒙活動だと考えています。タンゴを身近な音楽にするためにはアルゼンチン人が来て実演するだけでは、絶対足りない

**勝** アルゼンチン・タンゴはやっぱりリズムですよ。ところで、サルガンもうちのこの部屋に来たよね。はい、君、何を知りたいの？なんて言ってね

**真** サルガンは部屋に入るなり真っ先にピアノに向かったわよね。すごいですね、ああいう人をピアニストって言うんですよね。もう素晴らしいですよ。サルガンに来ていただいてレッスンしてもらって、それでリズムの謎が解けました。スウィングの意味が。

**勝** あれは、身体にしみ込まないとダメだ。タンゴが面白いのは、拍の長さ短さをどうとらえるのか、感じるのか、アクセントをどこに置くのかがおもしろいですねえ、センスだから。

**真** タンゴは、ここから急ぐぞって、勝手にテンポを変えたりするのよね。

タンゴミュージシャンはひとりひとりが指揮者でありアレンジャー。それが理想かな。

**勝** (くさびを打つ込むように) クンッ！クンッ！そこにスウィングがでるんですね。

**真** ミロンガもいろいろな変化球があって、強くするところを時々変えるんですよ。でも、振り子のように動かなきゃいけない。あれは、サルガンの側に見ていたら解ったんだけど、深いですよ、スウィングが。

**勝** リズムの取り方は深いね。それとフレージングも、リズムに乗せるだけじゃなくて、リズムを操るようなのがグッときますね。人間のここ(胸)にくるの。タンゴはパッションですよ、それがなければタンゴじゃない。リズムは重要です。

## 小松真知子、小松勝、タンゴクリスタル年表

年号	おもなできごと
1946	勝、東京都目黒区で生まれる
1949	真知子、東京都足立区で生まれる
1956	真知子、ピアノを始める
1958	真知子、小学校のリード合奏団に入団しアコーディオンを担当。蛇腹楽器と出会う
1960-61	真知子が参加していたリード合奏団、バロック音楽で全国優勝。
1964	勝、某鉄鋼系会社経理課に就職
1966	勝、音楽事務所に転職、マランド楽団のツアーを切り盛りする。ジャズギターを始める
1967	勝、中田智也氏主宰のタンゴ楽団に入り、平吉毅州氏に作・編曲を師事。 このころ、勝は50年代ピアソラ作品をコピーして演奏。モダンタンゴにのめり込む。
1968	真知子、桐朋音楽大学ピアノ科に入学
1970	勝、小澤音楽事務所に転職、坂本政一とボルテニアに加わり、ホテル高輪で演奏。
1972	真知子、桐朋音楽大学ピアノ科を卒業、ピアノ教師、ポピュラー音楽家としてスタート 真知子、ホテル高輪にエキストラ出演、そのまま坂本政一とボルテニアにスカウトされる 結婚
1973	長男、亮太生まれる
1974	勝、真知子、志賀清とタンゴ・モデルノスに加わる
1978 ?	真知子、ピアノ・プレーヤー用アルバム（自動演奏ピアノ・ソロ、ヤマハ）2枚を発売 真知子、「アーティストシリーズ：小松真知子・アルゼンチンタンゴの詩情（こころ）」発表。阿保郁夫監修 真知子、「世界の音楽シリーズ：コンチネンタルタンゴ編」発表
1980	藤沢嵐子復帰。その準備段階から真知子のピアノだけでの練習を積む 真知子、勝共に早川真平とオルケスタティピカ東京に加わる そのステージに招かれたオランダ・トリボディ（P）、カチョ・ジャーニーニ（BN=後に亮太の師）から大いに学ぶ
1981	来日中だったオラシオ・サルガンを自宅に招き、レッスンを受ける
1982	真知子、勝、京谷弘司(BN)リーダーアルバム『明日へのメッセージ』レコーディング参加 (亮太、フルートを始める)
1985	真知子、弦楽器とピアノのクラシック&ポピュラーユニット「スタンドグラス」を立ち上げる (亮太、音楽基礎理論を岡部守弘氏に師事、指揮者を目指す)
1986	小松真知子とクリスタル5を結成、後に「小松真知子とタンゴクリスタル」に改名
1987	キング・レコードより2枚のデビュー・アルバムを発表 銀座WINでタンゴ生演奏を開始、2011年秋までタンゴクリスタルの本拠地となる U.S.A各地（NewYork, WashingtonDC, Okurahomaetc.）で行われた式典で演奏。1991年迄 (亮太、バンドネオンを始める)
1988	虎ノ門ホールで初の単独コンサートを開催、ゲスト：藤沢嵐子 これを聴きに来たオマール・バレンテと親交を結ぶ 亮太、タンゴクリスタルに参加
1990	アルバム『アルゼンチンタンゴ集』を発表 ブエノスアイレスで開催された"日亜物産展"で公演
1991	藤沢嵐子最後の熱唱となったコンサート「タンゴ '91」を主催。虎ノ門ホール 歌曲はすべて嵐子案で亮太のみの伴奏で「過ぎし昔」、真知子のみの伴奏で「嘆願」
1992	亮太、BsAsに短期留学、カチョ・ジャーニーニの下で学ぶ 外航クルーズ"にっぽん丸"、"ふじ丸"に乗船、以降、毎年クルーズのメイン・ショーで活躍
1993	小松亮太とザ・タンギストゥを結成、多数のライブ活動で話題になる
1994	アルバム『タンゴライブ集』を発表
1995	(亮太、インディーズで初CD「Ryota Komatsu & The Tanguists」発表)
1998	(亮太、自己名義の初アルバム『ブエノスアイレスの夏』をリリース) (香港・アメリカ等でも発売される。以後、国際的に活躍)
1999	ブエノスにある国立セルバンテス劇場、市立アルベアール大統領劇場で公演
2000	(亮太、クリスタルを離れ、自身の活動に専心。ヴァイオリン奏者：近藤久美子と結婚)
2002	アルバム『バイレ・デ・タンゴ』を発表
2004	アルゼンチン人歌手、マキシモ・ファイナとのコラボ始まる。(～2008年末)
2011	結成25年を記念し初DVD『若い精鋭と綴る「なつかしのタンゴ名曲集」』をリリース



## タンゴクリスタルに参加した主なミュージシャン

岡本昭	バンドネオン		1986～1988
門奈紀生	バンドネオン		1987～1992
天野紀子	ヴァイオリン		1986～1988
岡本エリ	ヴァイオリン		1987～1989
小林美和子	ヴァイオリン		1987～1992
松永孝義	コントラバス		1986～現在
田中伸司	コントラバス		1986～現在
中藤節子	ヴァイオリン		1987～2002
小松亮太	バンドネオン		1988～1999
清水寛子	ヴァイオリン		1990～1993
井手上康	ヴァイオリン		1991～1994
小池真紀	ヴァイオリン		1994～2001
ポーチョ・バルメル	バンドネオン	*アルゼンチンより招聘	1999～2001
会田桃子	ヴァイオリン		2000～2003
北村聡	バンドネオン		2000～現在
早川純	バンドネオン		2002～現在
吉田篤	ヴァイオリン		2002～現在
小泉ヒロカズ	ヴァイオリン		2002～現在
鈴木崇朗	バンドネオン		2004～現在
田辺和弘	コントラバス		2004～現在
沖増菜摘	ヴァイオリン		2008～現在
宮越建政	ヴァイオリン		2008～現在

## 共演した歌手

藤沢嵐子			1988～1991
阿保郁夫			1972～
柚木秀子			1974～
ロベルト杉浦			1990～2002
Sayaca			2000～現在
マキシモ・ファイナ		*アルゼンチンより招聘	2004～2008
小島りち子			2008～現在



**アルゼンチン・タンゴの詩情**  
ヤマハ YPA-1017 ○○年

1 ラ・クンパルシータ	6 恋人もなく
2 ウノ	7 パリのカナロ
3 バンドネオンの嘆き	8 ウナ・インスピラシオン
4 スール	9 クリオージョの誇り
5 ラ・ブニャラーダ	10 アディオス・ムチャーチョス



**Tango Cristal!**  
タンゴ・クリスタル!  
～コンチネンタル・タンゴ編～

**タンゴ・クリスタル! ~コンチネンタル・タンゴ編~**  
キング K32X-161 1988年

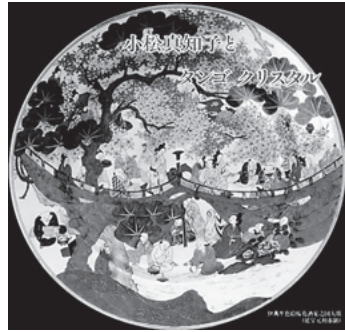
1 碧空	9 ジェラシー
2 夜のタンゴ	10 黒い瞳
3 真珠探りのタンゴ	11 オレ・グアバ
4 ぼらのタンゴ	12 奥様お手をどうぞ
5 小さな喫茶店	13 夜のヴァイオリン
6 夢去りぬ	14 赤い靴のタンゴ
7 小雨降る径	15 ポエマ
8 荒城の月	16 朝の3時



**Tango Cristal!**  
タンゴ・クリスタル!  
～アルゼンチン・タンゴ編～

**タンゴ・クリスタル! ~アルゼンチン・タンゴ編~**  
キング K32X-162 1988年

1 エル・チョクロ	9 ラ・クンパルシータ
2 ドン・ファン	10 銀狐
3 バンドネオンの嘆き	11 クアルキエール・コーサ
4 恋人もなく	12 下町の月影
5 カミニート	13 アディオス・ムチャーチョス
6 台風	14 フランド・エスベロ
7 ひじ鉄砲	15 たそがれのオルガニート
8 星くずの雨	16 クリスタル



**アルゼンチンタンゴ集**  
WIN KMC-1003 1992年

1 月下のコンサート	9 来るべきもの
2 チケ(粹好み)	10 アディオス・ノニーノ
3 ラ・ボルドーナ	11 ロカ・デアモール
4 コントラティエンボ	12 ある古い歌の伝説
5 ケ・ヌンカ・ファルテ	13 鍵盤の悲しみ
6 シルエタ・ボルテニ	14 ノクトウルナ
7 7月9日	15 マラ・フンタ(悪い仲間)
8 ラ・クンパルシータ	16 思い出



**Tango**  
Machiko Komatsu  
& Tango Cristal

**タンゴライブ集**  
WIN KMC-1005 1994年

1 星くずの雨	11 靈感
2 バンドネオンの嘆き	12 真珠探りのタンゴ
3 碧空	13 プラームスのタンゴ
4 夜のバイオリン	14 フレバレンセ
5 天使のミロンガ	15 黒い瞳
6 リベルタンゴ	16 荒城の月
7 フェノスアイレスで私は死	17 破局
8 小雨降る径	18 ネグラーチャ
9 城ヶ島の雨	19 パリのカナロ
10 ラ・ジュンパ	20 ラ・クンパルシータ




**Baile de Tango**

Machiko Komatsu  
&  
Tango Cristal

**バイレ・デ・タンゴ**  
WIN KMC-1005 2002年

1 バ・ケ・バイレン・ロス	9 エル・チョクロ
2 泣き虫	10 あなたの影になりたい
3 カベルネ・ソーヴィニニ	11 ノスタルヒコ
4 君待つ間	12 お下げ髪
5 いつまでもここに	13 知られたくないわたしの悩み
6 キーチャ	14 女神
7 輝くばかり	15 バイル・デ・タンゴ
8 さまよう小鳥たち	16 ラ・クンパルシータ



**25th Anniversary**  
Machiko Komatsu & Tango Cristal  
25周年 若き精鋭と纏る「なつかしのタンゴ名曲集」

2010.9.17 (Fri) 銀座ヤマハホール  
主催 I.T.O. WINカルチャー

**25周年 若き精鋭と纏る「なつかしのタンゴ名曲集」**  
I.T.O. V-1009138 2010年

Pert I 昭和を彩るタンゴ  
ヴァイオレッタに捧げしタンゴ  
バラのタンゴ  
出船～波浮の港へ  
水色のワルツ(歌:小島りち子)  
夜のプラットホーム  
マドンナの宝石  
ハバナラ(歌:小島りち子)  
黒い瞳  
チャルダッシュ

Pert II アルゼンチンタンゴとその周辺  
カフェ・ドミンゲス  
デレチョ・ビエホ(ダンス:クリスティアン&ナオ)  
エル・チョクロ  
巡礼(フォルクローレ)  
エル・エスキナーン(ミロンガ)  
オルガ(ワルツ ダンス:クリスティアン&ナオ)  
私はマリア(歌:小島りち子)  
エバリスト・カリエゴに捧ぐ  
ラ・クンパルシータ

レパートリーの特長をいくつかみてみたい。「ラ・クンパルシータ」「エル・チョクロ」「バンドネオンの嘆き」が多いのは当然として、同様に3回以上レコーディングしているのはロシア民謡「黒い瞳」。コンチネンタル・タンゴというよりは、昭和のタンゴのイメージであろうが、哀愁漂うメロディは人気が高いことを伺わせる。

コンチネンタル・タンゴは「小雨降る径」「碧空」「夜のヴァイオリン」「真珠探りのタンゴ」「ぼらのタンゴ」を複数回レコーディングしているが、「小雨～」や「小さな喫茶店」は小松亮太の近作でもファミリーで演奏しており、クリスタルの特長を受け継いでいると言っていじらう。また、「荒城の月」、ライブでもお馴染み「城ヶ島の雨」など日本の作家のタンゴ化はクリスタルの十八番と言っていじらう。

ピアニストの観点としてはオスマール・マデルナ「星くずの雨」「月下のコンサート」が目立つが、オスバルド・ベリンジエリのレパートリーとして知られる「恋人もなく」の存在感もある。オラシオ・サルガンを連想させるのは「ラ・ブニャラーダ」、オルランド・トリボディは今後のお楽しみだろう。オルケスタの観点では「思い出」「ラ・ジュンパ」「ラ・ボルドーナ」「ノスタルヒコ」「エバリスト・カリエゴに捧ぐ」などオスバルド・ブグリエーセ楽団への傾倒も感じられる。

作曲家別では、アストル・ピアソラが断トツで多く10曲を超えている。多くを94年作『タンゴライブ集』で演奏しているが、ピアソラが没してからそれほど日が経っていないし、ないよりもクラシック界から巻き起こったブームに先駆けたもの。

# オルケスタ・ティピカの歴史 (No. 10) [最終回] HISTORIA DE LA ORQUESTA TÍPICA

タンゴ器楽の発展

## Evolución instrumental del Tango

ルイス・アドルフォ・シエラ著

弓田 綾子(訳)  
島崎 長次郎(監修)

### 歌手たちと楽団～ LAS ORQUESTAS DE LOS CANTORES

1940年代の後半、タンゴは絶頂期を迎えたが、その時代の特徴的なことの一つは、オルケスタ・ティピカの歌手たちが華々しくその名をステージで飾るようになったことである。

オルケスタと肩を並べた歌手たちが、さらに主役の座に就こうとしていた。すなわち彼らはそれぞれの楽団から独立し、ソリストとして活動するようになった。そして、今までの“オルケスタ付歌手”という扱いではなく“歌手とオルケスタ”のように互角表現になった。当時のキャ

バレーの看板などには、マエストロと専属歌手の名前を連ねることが多くなり、歌手の存在が特にクローズアップされた。いわゆる“連名看板”の時代の到来だ。

フィオレンティーノはアニバル・トロイロ楽団で活躍し、そのセンチメンタルな下町風の独特な歌い方で名を広めたが、その後若きバンドネオン奏者でアレンジャーのアストル・ピアソラと共にアニバル・トロイロ楽団を辞め、フィオレンティーノ＝ピアソラの連名による新たな活動を開始した。

こうして新時代の突破口を開いたフィオレンティーノの後には、錚々たる歌手たちが続々とソリストとしての活躍の場を求め、それぞれの楽団から独立をした。

彼らの新たな活動場所を記してみると、アルベルト・カスティージョはエミリオ・バルカルセ、リカルド・タントゥーリ楽団の専属歌手となった。続いてトロイロ楽団を退いたアルベルト・マリーノはウーゴ・バラリス、アンヘル・バルガスとエドゥアルド・デル・ピアノ、アルベルト・モランはアルマンド・ラカーバとアルマンド・クーポ、そしてパスクアル・マモーネ、ロベルト・チャネルとアンヘル・ドミンゲス、アルヘンティーノ・レデスマとマリオ・デマルコ、エクトル・



*Florantino*

Orquesta Astor Piazzola



Alberto Castillo



Alberto Morán



Angel Vargas

パチェーコとカルロス・ガルシーア、ミゲル・モンテーロとホセ・リベルテラ、ホルヘ・ドゥラン及びロベルト・フロリオとオルランド・トリポディたちが競い合い、マエストロと肩を並べ互角の位置を確保し、華やかにステージやポスターにその名を飾った。

## 小編成楽団～ LOS CONJUNTOS REDUCIDOS

興行会社はその頃、大編成楽団の経費高に頭を悩ませ、ソロ奏者の演奏家たちによる小楽団に力を入れるようになった。大楽団衰退後のムシコ達に救済のためでもあったが……。

バンドネオンとピアノ中心の伝統的な組み合わせのフル・バンド“オルケスタ・ティピカ”から、比較的自由なトリオ、クアルテット、キンテート、そしてオクテートまでの小楽団が出現した。

シリアコ・オルティスはタンゴ黄金時代の30年代、二つのギター伴奏と共に自らのバンドネオンでトリオを組み、ゆっくりと感情を込めてレガートで演奏する彼のトリオは、大編成楽団の型を破り独特なパフォーマンスで成功をおさめた。

また、タンゴに欠かせないセンチメンタルなビオリン奏者のエルビノ・バルダーロも、ギターのガストロン・ロボ、及びオスカル・アレマンらと共に器楽タンゴの面白さを誇示し、“トリオ・ビクトル”の専属となり活躍した。

1936年、今は存在しない“シントニア”という週刊誌によるアンケートで5人のマエストロたちが人気投票で選ばれた。フリオ・デ・カロとエルビノ・バルダーロ (Vi)、カルロス・マルクッチとシリアコ・オルティス (Bn)、フランシスコ・デ・カロ (Pf) らが“Los virtuosos (タンゴの名匠たち)”の荣誉ある称号を与えられ、歴史に残るレコードを残した。

そんな中、ピアノ奏者のロベルト・フィルポは、長い間にわたり楽団をもってタンゴの前進に多大な貢献をしてきたが、ここにいたって自己の楽団の抜粋メンバーによる四重奏団を編成、タンゴの伝統あるかつての古典演奏のスタイルに回帰した。一方、同時期、メキメキとその名をはせたフランシスコ・カナロは、従来の楽団のほか、その抜粋メンバーの二つのビオリンとバンドネオン、それにピアノ、コントラバホによる5人編成の“キンテート・ピリンチョ”を立ち上げる。



オスバルド・フレセドやフリオ・デ・カロは、このような楽団動向に共感するものゝ、自らの基本姿勢を決して崩すことはしなかった。また、アニバル・トロイロのバンドネオン、ロベルト・グレーラのギター、エドムンド・サルディバルのギタロン（25弦のギター＝後にエクトル・アジャラと交代）及び、コントラバホのキチョ・ディアスらで4重奏を編成。更にパンチート・カオ（Cr）は、オラシオ・マルチビーノ（Gt）、アルド・ニコリーニ（Cb）とコンフント“ロス・ムチャーチョス・デ・アンテス（昔の若者たち）”を編成した。



Aníbal Troilo (b), Roberto Grela (g),  
Edmundo Zaldívar (guitarrón)  
y “Kicho” Díaz (cb).

オラシオ・サルガン、ペドロ・ラウレンス、及びエンリケ・マリオ・フランチャーニは、それぞれの自身の楽団を解散した後、ウバルド・デ・リオ（Gt）、ラファエル・フェロ（Cb）らと“キンテート・レアル”を編成した。彼らの演奏はシンコーションとコントラティエンポ（裏リズム）を優先し、斬新で魅力的な表現様式を打ち出して人気を博した。



他にもホルヘ・カルダーラ（Bn）、ウーゴ・バラリス（Vi）、アルマンド・クーポ（Pf）、キチョ・ディアス（Cb）たちは、クアルテート“エストレージャス・デ・ブエノスアイレス（ブエノスアイレスの星たち）”を編成し、内外から注目された。

レオ・リベスケル（Vi）、レオポルド・フェデリコ（Bn）、オスバルド・ベリンジエリ（Pf）、オマール・ムルタ（Cb）ら錚々たるメンバーで“ロス・ノタブレス・デル・タンゴ（タンゴの名手たち）”を編成し、タンゴの新たな表現に挑戦した。

アニバル・トロイロ楽団で活躍していたトト・ロドリゲス（Bn）は、トロイロと相似した演奏を心がけ、オスバルド・タランティーノ（Pf）、オルランド・ゴーニ（Pf）、エクトル・レア（Gt）たちもトロイロ楽団で研鑽した上で素晴らしい成果を示した。

他にもフリオ・アウマーダ（Bn）は、マルシリオ・ロブレスとファン・メアウディ（Gt）、エウヘニオ・プロ（Cb）らと共に、器楽四重奏の基調を創り上げ、その証となったレコードが僅かながら残っている。

こうして大楽団の一員だった彼らはそれぞれの道を歩み、小編成楽団の可能性にチャレンジし貢献

した。

## 室内四重奏団と七重奏団～ EL CUARTETO DE CAMARA Y EL SEPTIMINO

弦の四重奏=二つのバイオリン、ビオラ、及びチェロとなるが、この重要かつ難しい器楽編成にもかかわらず、編曲者によって聴きやすい演奏となり、聴衆の心に響き渡ったが、これは編曲の技術に負うところが多く、かつては楽団の指揮者自らが編曲をしていたが、徐々に編曲は専門家に委ねるようになった。ここに素晴らしい演奏家と編曲者がいたことを見落としてはならない。

編曲者のパスクアル・マモーネはその弦の響きを巧みにアレンジし、4人の演奏家と共に四重奏を編成した。その名は“プリメール・クアルテト・デ・カマラ・デ・タンゴ（最初のタンゴ室内四重奏）”メンバーはレオ・リペスケルとウーゴ・バラリス (Vi)、マリオ・ラーリ (Vo)、ホセ・ブラガート (Vc) たちである。



また、編曲・指揮をしたアルヘンティーノ・ガルバンの七重奏“ロス・アストロス・デル・タンゴ（タンゴのスターたち）”は、彼のセンス溢れるそのオリジナル性豊かなアレンジ譜の元に、各楽器の旋律を重視した演奏表現は当時のタンゴ界に注目され、新たな旋風を巻き起こした。

メンバーはエルビノ・バルダーロとエンリケ・マリオ・フランチャーニ (Vi)、マリオ・ラーリ (Vo)、ホセ・ブラガート (Vc)、そしてフリオ・アウマーダ (Bn)、ハイメ・ゴシス (Pf)、及びラファエル・デル・バグノ (Cb) らで編成されており、アルヘンティーノ・ガルバンにとって、このような卓越した演奏家と出会うことで理想的なアレンジが可能だったことは倖僥だった。そして“ロス・アストロス・デル・タンゴ”は隣国モンテビデオでも大きな人気を博した。

ピアノ奏者、かつ編曲者のルイス・パスケはオルディマル・カセーレス (Bn)、エミリオ・ペジェヘーロ (Vi) ら新進気鋭の彼らたちと、アルヘンティーノ・ガルバンと同じ器楽構成の七重奏を結成し、意気を示した。

こうして当時のトップ・クラスの演奏家や編曲者によって、タンゴ界にはかつて見られなかった新時代への確かな胎動が芽生えたのである。

## その他の革新派と伝統派～ OTROS RENOVADORES Y TRADICIONALISTAS

いわゆる革命的な音楽の流れの中で、比較される二つの流れを記しておこう。古典派と革新派である。

革新派の最も代表とされるのはアストル・ピアソラとエドゥアルド・ロビーラ（共にBn）である。彼らは“バングアルリスタ（前衛派）”と呼ばれ、強い自己主張を表現しながら、躍動的なリズム・アクセントでモダン・タンゴへと開花させて行った。しかしながら、この革新派の演奏に対し、多くの聴衆の風当たりは厳しかった。

エドゥアルド・ロビーラ=洗練されたテクニックを持つバンドネオン奏者、かつ経験豊かな編曲者であるが、A.ロディオ、O.ゴニ、M.カロー、O.マデルナ、J.バツソ、及びA.ゴビラ錚々たる演奏家たちと活動しながら、やがて革新的とされたその演奏が、次第に芸術的構想へと向けられ、彼らの手によって徐々にではあるが、革新派のタンゴが世に認知され、さらに広まって行った。



そして、エドゥアルド・ロビーラの異なるコンビネーションの器楽編成によるオクテートは“アグルパシオン・デ・タンゴ・モデルノ（モダンタンゴのグループ）”と呼ばれた。メンバーはオスバルド・マンシ (Pf)、レイナルド・ニチューレ、エルネスト・シトン、及びエクトル・オヘダ (Vi)、マリオ・ラーリ (Vo)、エンリケ・ラノー (Vc)、フェルナンド・ロマーノ (Cb) ら名手揃いである。彼らは革新派の進歩論者たちの意見も考慮しつつも、常に古典タンゴの形式と節度に目配りしながら、自らの方向を目指して行ったといえる。

一方、これに対し伝統派はどうか……。

当時古典タンゴへの執着を強くしていたファン・カンバレリ、アルフレド・コルディスコ、エンリケ・モラ、ヘロニモ・ボンジオーニ、及びホセ・フェリペティ（ナタリン）、更に老マエストロ・ロベルト・フィルボら錚々たる演奏家たちであるが、彼らは革新派に対抗するように四重奏楽団を編成しながら、伝統タンゴの真髄を求め、古典タンゴへの回帰と復活を願って、ひたすらに燃焼して行ったのだった。



## 日本のタンゴ～ EL TANGO EN JAPON

第一次世界大戦（1914年）後、数年の間にパリで大流行したタンゴは、またたく間に日本に到着し、人々の注目するところとなった。

パリの“ベル・エポック期（古き良き時代=平和と繁栄の絶頂期に憧れを込めてこのように呼んでいた）”に、モンマルトルの夜の歓楽街には夜毎タンゴが演奏され続けていた。最初は下層の音楽とソッポを向いていた観衆からも、ついに大喝采を受けるようになった結果、やがてパリは“タンゴの第二の故郷”と呼ばれるようまでになった。

では、日本にタンゴはどのような経路でやって来たのだろうか……？

当時、パリに遊学（1920年～1926年）していた目賀田綱美男爵が日本へのタンゴの紹介者であった。

彼は付き合い上手な貴族といわれ、パリの社交界で“この人あり”と勇名をはせながら、かたやパリの日本大使館で文化担当官の役割をも担っていた。

こうして、すっかりタンゴの愛好家となった目賀田男爵が、やがて帰国することになるが、その際に沢山のタンゴのレコードを持ち帰った。“A media luz (淡き光に)”などの当時流行の新しいバージョン持参であった。

そして、パリで学んだダンスを自ら教師を務めながら、日本の社交界にその華麗なるステップを紹介し皆を楽しませると同時に、彼は上流階級の人たちを対象に、友好のためのサークルをその普及のために取り組んだが、こゝで播いたその種は後に大きく実を結んだ。

日本のタンゴは単純なダンスから進展したものの、音楽家の坂本政一と早川真平はバンドネオンを習得し、演奏面の研究を重ね、各々が後にタンゴ楽団を編成し、タンゴの普及に大きく貢献した。



▲新宿のカフェ「シャンテ」に出演中の坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ボルテニア

こうして受け入れられた日本のタンゴ界にかつてない大きな旋風が巻き起こった。それはアルゼンチンの楽団が、初めて日本でのステージに出演する、という契約が実現することになったのだ。

1954年、ファン・カナロのコンフントは日本に向け活動を開始した。メンバーはもちろんファン・カナロ（指揮）、オスバルド・タランティーノ（Pf）、アルトゥーロ・ペノンとアルフレド・マルクッチ、及びラモン・トレイラ（Bn）、ウーゴ・バラリス、エミリオ・

ゴンサレス、エンリー・バレストロ（Vi）、ルフィーノ・アリオラ（Cb）、歌手にマリア・デ・ラ・フエンテとエクトル・インスアらである。彼らによって日本へのタンゴ楽団上陸の突破口が開かれ、これ以降、続々と数々のオルケスタが腕を競い合い日本の土を踏むようになった。

フランシスコ・カナロ、オスバルド・プグリエーセ、フランチャーニ＝ポンティエル、フロリンド・サッソーネ、フルビオ・サラマンカ、エンリケ・マリオ・フランチャーニ、カルロス・ガルシア、ファン・カンバレーリ、ダリエ





ンソ楽団（飛行機では絶対に旅行をしないというダリエンソはその決意を変えず、指揮者不在のまま）、そして歌手のエドムンド・リベーロたちの活躍に、日本のタンゴ界は大きく沸き、そして彼らには申し分のない高い金額の契約が交わされた。

ラプラタ川流域のボカで生まれローカル色の強かったタンゴは、遥かに遠い日本にも定着し、今や日本はパリに次いでタンゴの“第三の故郷”の地位を確実に築きあげた。

## 最後の10年～ LA ULTIMA DECADA

ここ最期の数年、タンゴは優秀な演奏家たちによって、小編成のコンフント（トリオ、クアルテート、キンテート）編成へと向かっていった。

各楽団は時代の流れと共に本来のメロディーを、ピアソラ風にアレンジする一方、古典タンゴの伝統的なリズムと“Vanguardista（前衛派）”の両面を上手く取り入れながら活動していた演奏家をここに記してみる。

オスバルド・ベリンジェリ (Pf)、フェルナンド・カバルコス (Cb) らは、レオポルド・フェデリーコ (Bn)、エルネスト・バッファ (Bn) たちのトリオで活躍した。

ホセ・コランジェロのクアルテートはアニバル・トロイロの最後のピアノ奏者だったホセ・コランジェロ (Pf)、アニバル・アリアス (Gt)、ネストル・マルコーニ (Bn)、オマール・ムルタ (Cb) の多彩なるメンバーである。

ピアノ奏者オランダ・トリポディとエクトル・オルテガ (Gt)、及びファン・カルロス・バジェホス (Cb)、バンドネオン奏者のダニエル・ビネーリとホセ・モサリーニ（オスバルド・プグリエセ楽団のメンバー）の指揮によるキンテート“ヌエボ・タンゴ”。



El Sexteto Tango en Michelangelo: Plaza, Balcarce, Herrero, Ruggiero, Lavallén y Rossi.

移り変わる奏法を繰り返す革新的演奏家のロドルフォ・メデーロス（彼もプグリエーセのバンドネオン奏者）、有能な編曲者オマール・ルピ (Bn) によって指揮されたラプラタ市のコンフント“キン・タンゴ”には、ワルテル・エレンコ (Vi)、オラシオ・オマール・バレンテ (Pf)、ロマン・エイラス (Gt. eléctrica)、及びネストル・メ

ンディ (Cb) らが活躍していた。

“アグルパシオン・デ・ソリスタ (ソリストのグループ)”には、ホルヘ・カレーラス (Pf)、マヌエル・スタルマン (Cb)、ルーベン・ルイス (Gt)、ホルヘ・スリブスキ (Fl)、そしてアンヘル・フェルラウテ (batería=打楽器) らのメンバーである。

“セステート・タンゴ”、オスバルド・プグリエーセ楽団で活躍していた6名による六重奏団、それはフリアン・プラサ (Pf)、オスバルド・ルジェロとビクトル・ラバジェン (Bn)、オスカル・エレーロとエミリオ・バルカルセ (Vi)、そしてアルシーデス・ロッシ (Cb) の錚々たるメンバーである。彼らは作曲や編曲にも力を注ぎ素晴らしい演奏家のグループである。

また、革新派のタンゴに対し、一貫して伝統派の姿勢を崩さず古典タンゴの復活に力を入れ、成功した演奏家に、バンドネオン奏者のアドルフォ・ペレス (ポチェーロ) がいた。しかし残念ながらその活動はほぼレコードだけに限られていた。

一方ではリズムで躍動感溢れるクアルテート “パケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス (若者たちが踊るために)” の演奏に聴衆の人气が集まった。メンバーにはドミンゴ・ルーリオ (ブエノスアイレス・フィルハーモニーのフルート奏者)、レオポルド・フェデリーコ (Bn)、ウバルド・デ・リオとドミンゴ・ライネス (Gt) らである。

クアルテート “ロス・ポルテニートス”には、サントス・リペスケル (Bn)、ロベルト・ギサード (Vi)、ウバルド・デ・リオとドミンゴ・ライネ (Gt) たち。このメンバーは古典、新しいモダン派の高い演奏テクニックの両面を持っていた。

“クアルテート・デル・センテナリオ (1910年の意味)”には、エミリオ・ブランカ (Bn)、エドゥアルド・アンヘル・バージェ (Gt)、アンドレス・サゲッセ (Vi)、エミリオ・マガルド (Fl) らがいた。

“ロス・トゥーバ・タンゴ (チューバによるタンゴ)”には、ギジェルモ・インチャウステイ (Bn)、アンヘル・ロムロ・ディアス (Tb)、ロメロ・ピルーソ (Fl)、ネルソン・ムルーア (Gt) たち。

“ロス・グアポス・デル・ノベシエントス (1900年代の不良たち)”は現在、トトロドリゲス (Bn) の周りのメンバーで編成、他の3人はコンフント “ロス・トゥーバ・タンゴ” を兼任していた。

これらの小編成楽団は革新派と伝統派の融合を巧みにほどこして活動していた。更に、ここに偉大なる懐かしい演奏家たちの名を掲げてみよう。

四重奏を代表する、アニバル・トロイロ、レオポルド・フェデリーコ、ロベルト・グレーラらの巧緻なテクニックとエレガントなリズムは多くの聴衆を魅了した。そして、当時の彼らにとっては、演奏テクニックが存分に発揮出来た良い時代だったといえるだろう。



典型的な六重奏の“セステート・マジヨール”も優れた演奏家で編成された楽団でその名を広く知られていた。中心的存在のルイス・スターソとホセ・リベルテラ (Bn)、ファン・マサリ、後でオスカル・パレルモと交代 (Pf)、マリオ・アブラモビッチとマウリシオ・ミセ (後にエドゥアルド・バルサクと交代) (Vi)、及びキチョ・ディアス (後にオスバルド・アウリシノと交代) (Cb) らは現代主義、革新派のいたずらな影響を受けずに古典派タンゴの伝統を守り、常にタンゴ界をリードしていた。



また、同じように古典派のタンゴとモダン派の狭間に翻弄されながらも、バンドネオン、弦、及びピアノを重視し、クラシック的な編成に力を注いだマエストロに、アルフレド・ゴビやオスバルド・ピーロたちがいたことも忘れてはならない。



アティリオ・スタンポーネは、ピアノ奏者であり編曲、指揮者のタンゴ界を代表する一人である。ペドロ・マフィアの楽団に入団しその名を博したが、後に革新的なアストル・ピアソラの新楽団に籍を置き、各地を巡演した後に、やがてブエノスに戻り、バンドネオン奏者のレオポルド・フェデリーコと共に演奏活動を開始した。だが、革新的演奏に傾倒した彼の演奏に対し、少しずつ聴衆の心が離

れて行ったのは残念。

ギター奏者、かつ、有能なアレンジャーのオラシオ・マルビチーノ (現在は別名アライン・デブライ=アラン・ドブレイを名乗っている) は、“タンゴ・ア・ラ・エウロペア (ヨーロッパ風のタンゴ)”の単調なリズムの上に、粗雑な安易のものを混ぜ合わせ演奏していた。金儲けのためとはいえ多国籍企業会社に操られた彼らのような演奏家もこの時期にはいたのだ。

このように最後の10年間は小編成楽団編成が急増するが、一方では革新派と伝統派の両面を上手く取り入れながら、演奏家は独自のスタイルを保持し、お互いが激しく競い合っていた。

## 結びにあたって～ PUNTO FINAL

現代において、魅力的な音楽タンゴを世界に広めようとして貢献した音楽家に、オスバルド・プグリエーセとオラシオ・サルガンがいたことを忘れてはならない。



プグリエーセとサルガンのオーケストラは、タンゴの黄金期を飾り、半世紀を通して不断の活躍を続けたマエストロである。そして、器楽タンゴの活動を通じて極致を極め、最高レベルに達した。

若い演奏家に伝えたい。タンゴは単に音楽学校で学んだだけでは中途半端の域を出ず、タンゴに不可欠の真髄を極め、聴衆を説得するには至らない。タンゴ音楽はギリギリの深いところで心の叫びを汲み上げ、その人生を語り、歌うもので、他の音楽とは別のものだと思うからだ ……。



結びにあたって、器楽タンゴの将来に関し、推測するのは極めて難しい。従って、本当の意味でのタンゴ・オーケストラについての記述は、この辺で終わることにする。

オーケストラ・ティピカの歴史、並びにタンゴの異なる編成による演奏の領域について述べたが、タンゴの音楽的発展の過程を形成する様々な様式と、数えきれない名前の全体を包含するには、まだ充分とはいえない。しかも沢山ある概念の中で決定的な結論に到達するのは困難なので、単純に記述的な記録の方法をここではとった。

世の中には音楽家の名前やその評価、または演奏の形式、タンゴの事柄には関心がなく、もっぱら絵画的な作風、興味本位な逸話を取り上げて述べているケースが多いが、私は、他の作家たちが顧みないテーマを取り上げ、それを出発点として真の姿のタンゴ音楽家のことを述べたつもりである。

(完)

[参考] 「オルケスタ・ティピカの歴史」 掲載内容

バックNo.	シリーズNo.	掲 載 内 容
2 1	1	出発点 タンゴの居場所を獲得する 最初のコンフント サロンのダンス 通りの手回しオルガン 音楽隊とロンダ の一行 ピアノのためのタンゴ・クリオージョ
2 2	2	ピアノ バイオリン バンドネオン 最初のバンドネオン 奏者たち ピアノ・バイオリン・バンドネオン
2 3	3	河畔のカフェ オルケスタとカフェ ラ・プラタ流域の典 型的なオルケスタ レコード・ブーム
2 4	4	運命の転換 パリのタンゴ キャバレー 最終的なオルケ スタ コントラバホ スタイルの芽生え
2 5	5	歌のタンゴ バンドネオンの虎 典型的な六重奏 カーニ バルの踊り マックス・グルックスマン社のコンクール 名人芸の先駆者たち
2 6	6	オスバルド・フレセド、一つのスタイルを確立する フア ン・カルロス・コビアン <small>の</small> 新しい構想 フリオ・デ・カロ の学校 偉大なスタイリスト、ペドロ・マフィア 一つの スタイルの創造者、カジェタノ・プグリッシ 記憶に残る 他の六重奏団
2 7	7	映画館における楽団 伝統派の流れ トーキー映画に伴う 危機 エルビノ・バルダロの六重奏団 セステート、その 課程を守る 大編成楽団への試行
2 8	8	編曲者たち タンゴの音楽家たち 大流行のダリエンソ・ スタイル 永久の名前、アニバル・トロイロ 違ったタイ プのタンゴ、カルロス・ディ・サルリ オルケスタの概念 の極致、オスバルド・プグリエーセ ロマンティックなビ オリン、アルフレド・ゴビ、ダゴスティーノ、デ・アン ジェリス、サッソーネ、タントゥリ 40年代
2 9	9	ミゲル・カローと彼のスター立ちのコンフント ルシオ・ デマーレとアントニオ・ロディオ オラシオ・サルガン、 その創造の才能 指揮者と演奏家たち 大楽団への新たな 経験 大胆な更新者、アストル・ピアソラ 見え始めた大 きな暗闇
3 0	1 0	歌手たちと楽団 小編成楽団 室内四重奏団と七重奏団 その他の革新派と伝統派 日本のタンゴ 最後の10年 結びにあたって <以上>

## 日本のタンゴ楽団（7）



- 25 「1957年（昭和32年）頃の東京のタンゴ楽団の状況について～」
- 26 『日本のタンゴ史の一面』
- 27 五十二年前の東京・青山でのタンゴのつどい
- 28 タンゴを育てた蔭武者

蟹江 丈夫 (元会員・故人)

### 25

#### 「1957年（昭和32年）頃の東京のタンゴ楽団の状況について～」

1952年にミュージシャンたちが日本ミュージシャン・ユニオンを結成、タンゴ部会も設立され、部会長に早川真平氏が選ばれたが、早川氏は先ず一歩引いて、原孝太郎氏に先輩ということで顔を立ててその地位を譲った。その当時の名簿を、当時ユニオンの事務局長をされて居た松野正俊氏からいただいたが、驚くほど多くのタンゴのプロのミュージシャンの存在が明らかにされて居る。その上、関西地区（大阪・神戸）、中部地区（名古屋中心）を加えると膨大な数になる。それだけにまた、ミュージシャンの働く場も在ったということにもなるのである。

当時、どこの楽団にも属することなく、フリーで働いていたミュージシャンも多く、これらは個人会員というかたちでユニオンに入って居た。それだけでも五十人近くも居たのであるからオドロキである。

楽団で拾ってみると、青木武政（アコーディオン）と東京コンチネンタル。青木さんは、松本新室内楽団のエースでもあった。安藤邦夫（ピアノ）と東京サロン・ストリングス。川崎フロリダ出演の川崎章とオルケスタ・リオ。オルケスタ・ティピカ東京（早川真平）。オルケスタ・ティピカ・ポルテニヤ（坂本政一）。オルケスタ・ティピカ・ポルテニート（坂西公一）。オルケスタ・ティピカ・パンペーラ（鎮目典幸）。オルケスタ・ティピカ・サンテルモ（池田光夫）。オルケスタ・ティピカ・カンドンベ（佐藤金造）。オルケスタ・ティピカ・コリエンテス（小沢泰）。オルケスタ・ティピカ・ルナ（前田延）。オルケスタ・ティピカ・ノベーナ（島昭彦）。オルケスタ・ティピカ・ブエノスアイレス（伊吾田勇三）。オルケスタ・ティピカ・オルガニート（相馬昭三）。ロス・ミロンゲーロス（藤岡啓郎）。ベルデ・イ・ス・オルケスタ（緑川嘉信）。吉野章とその楽団。桜井潔とその楽団。楽団南十星。頭山光楽団。松本新室内楽団。斉藤恒夫とニュー・タンゴ・メロディアンズ。内藤一郎東京ノベルティ・アンサンブル。原孝太郎と東京六重奏団。本堂藤三タンゴ・アンサンブル。楽団カサブランカ。吉野達弥楽団。土方平八郎～新撰組ではナイッ～とタンゴ・アンサンブル。白石十四男とブルー・メロディアンズ。佐々木典年と楽団シロー。北村維章とファンタジア。奥田照親とコムパニェロス東京。高屋イ・ス・アルヘンティーノス。立川齧乗楽団。武永善之助楽団。中島安則とラテン・リズム・キング。とにかく、名簿上だけでもこの三～四倍はある。これだけ多くの人たちが、タンゴで飯を食えたのだから、ある意味ではよき時代ということになるのかも知れない。

昨日、オルケスタ・ティピカ東京のバイオリン奏者として、また、日本で初めてピアソラ作品のア

レンジに取り組んだ赤堀文雄氏逝去との一報が、小松亮太君から入った。またひとりタンゴ界の巨星が墜ちて行く報に、ひとしおの寂しさが感じられる。

一方、八十六才のバンドネオン奏者・佐川峯さんが、九月六日に東京・新宿の安田生命ホールで自らのオーケストラを率いてコンサートを開催との案内が届いた。いかにもタンゴらしい、悲喜こもごもの世情の物語が初夏の風とともに吹きすさんで行く。そんななか、日本のタンゴ界（演奏面）は不死身との心強さが感じられる。

=====

## 26

### 『日本のタンゴ史の一面』

1945年（昭和20年）以前～戦争終結前の我が国のダンス・バンドといわれて居るものの存在は日陰者といわれた感じ、それを職とするものは控え目な生活を強いられた。太平洋戦争の始まる昭和16年頃までは何とか息をしていることが出来たが、前年の1940年（昭和15年）10月31日のダンス・ホール閉鎖を以って、生活の糧を得る場は失われてしまった。それでも映画館のアトラクションなどで息をついた者も居たが、多くは軍事工場など全く場違いのところで働くこととなり、希望のない厳しい生活環境のもとにさらされることになった。大陸と呼ばれた中国本土や東北部（旧・満州国）では、まだダンス・ホールやキャバレーが盛んで、そこで生計を立てて居た者が殆どであった。そんななか、全国的にステージ活動や唯一の放送NHKなどに出演できた楽団は幸せであった。

桜井潔とその楽団、松本新室内楽団、楽団南十字星などは、結構何だかんだ忙しい日々を送って居たようである。戦時慰問活動というのが盛んで、各地で軍隊や勤労団体などの慰問事業の主役として活躍して居た。当時、淡谷のり子さんが軍歌は歌えないといって軍部ににらまれて、苦しい生活を余儀なくされて居たのも、後日談のなかで有名な話となっている。バンドネオン奏者はこれらのとばかりをまともに喰らって、その殆どは召集されて陸・海軍に身を置くこととなり、大半は帰らぬ人となってしまった。身体不調をととなえ続けてうまく兵役を逃れた人も少なくなかった。

バンドネオン奏者であった坂本政一さんもそのひとりで昭和18年から終戦迄、うまく兵役から逃げ切った。早川真平さんは昭和13年頃陸軍兵士として中国で働いたため、その後の兵役は免れることが出来た。しかし慰問音楽隊などに入り、東宝系の仕事であちらこちら引っ張り回されて、しんどい日々の連続であったとよく語られて居られた。戦争末期には、外国の曲は殆ど演奏することが出来ず、日本民謡や軍歌、南方民謡などがレパートリーの主流で、早川真平さんは運良くジャワやフィリピンの民謡の楽譜を多く手にされて居たので、それをフルに使って息をついて居たとのことである。

レコードの旧譜リストなどで調べてみると、桜井潔楽団や楽団南十字星、吉野章楽団、緑川嘉信とベルデ・イ・ス・オーケストラは戦争末期までその名のもと、ビクター、テイチクなどで録音が続けられて居たのは大したものである。

小泉幸雄（アコーディオン）～今の首相とは関係ナイッ～



もその楽団とともにテイチク・レコードで昭和18年（1943年）になっても盛んに活躍、多くのレパートリーがリリースされ続けて居た。レパートリーは、日本モノ（歌謡曲、軍歌、民謡など）が殆どであったが、中に「ラ・クンパルシータ」「碧空」などを垣間みることが出来る。ぜんぜん関係のない日本語の曲名で、アルゼンチン・タンゴの「コンフェシオン」「ラ・タブラーダ」なども録音されて居た。残念ながらすぐに廃盤にされてしまっている。

淡谷のり子さんの「炭焼きの唄」（ロス・ピコネロス）も同じ運命を辿っている。ポリドールのレコーディング・オーケストラの演奏で、タンゴ「ココリチェ」を聴いたことがあるが邦名は失念してしまったが、ご存知の方が居られたらご教示願えれば幸甚である。ドナート作の「ルエゴ」も2～3の邦名でリリースされて居る。いずれも戦争が激しくなってからのリリースだけにプレス数も少なく、中古レコードも殆ど見かけることも出来ない。戦後発売のベルデ・イ・ス・オルケスタの「クシコス・ポスト」や高橋忠雄先生の「クバナ娘」～テイチク（原曲はフランシスコ・カナロの演奏の珍しいルンバ：ネグリータ・デ・ミ・アルマ）もセコハンでお目にかかったことが全くない。最近、レコード・ディスコ・グラフィの歴史的に網羅されたもの～と云っても完全無欠ではない～も刊行されているが、実物の存在が確認出来る機会が少なくなって来たのは残念なことである。

文化面で各種資料がどんどん出て来て居るのは大変喜ばしい限りであるのだが、しっかりし整理統合されているものは散見されるのみである。タンゴや日本に於けるタンゴ・レコードの資料の集大成が急務であると、広く呼びかけたいと思うのは私ひとりではないと思う。



淡谷のり子(昭和13年)

=====

## 27

### 五十二年前の東京・青山でのタンゴのつどい

戦後という言葉もやや遠のいて来て、あらたに朝鮮動乱だとか、赤色の魔手が近づくなどという言葉がマスコミに使われはじめた頃、タンゴはポピュラー音楽のひとつのジャンルとして大きく取り上げられるようになって来たが、それでも、まだ今日のように情報が豊富に入手できる状態ではなかった。

当時の若いタンゴ・ファン～主に大学生～のあいだでは、プグリエーセ、トロイロ、そしてアストル・ピアソラの名前がチラホラ語られるようになって来た。

マスコミもようやく民放がラジオの面で大きな役割を果たすようになりつつあったが、タンゴの面では高橋忠雄、高山正彦両御大の天下で、放送、レコード解説ともこの両氏が牛耳っておられた状態である。

1950年4月に高橋忠雄氏の『ラテン・アメリカ音楽の時間』というのがNHKラジオで毎週日曜日の夕方5時から第2放送で始まり、第1回はファン・ダリエンソ楽団の「ラ・ビルータ」で幕が開けられた。この時間で「ポルテニヤ音楽とは、、、オルケスタティピカとは、、、」という言葉が丁寧に高橋忠雄氏のソフトな口調で解説された。何となくタンゴやラテンを聴き流していたファンにとって、まさに高



山正彦先生の言葉を借りれば『干天の慈雨』ともいうべき有り難いひと時であった。この時間を聴くために遠くにいても一刻も早くラジオのもとへと飛んだファンも少なくなかったと思う。たまにスッ飛んでラジオのもとにたどり着いても野球放送のために中止ということで、烈火のごとく怒り爆発でNHKに電話をかけたファンも多く当時のNHKの窓口の担当者は「タンゴ・ファンは恐ろしい、、、」とディレクターに泣きを入れたこともあったほどであった。

この時期、高橋忠雄氏は熱心なリスナーたちを自らが数年前から催しておられた小規模なタンゴのつどいに招待されるようになった。このつどいこそ『中南米音楽研究会』そのものであったのだ。この会は1940年10月（昭和15年～紀元2600年奉祝の年）に東京・銀座の十字屋楽器店のミーティング・ルームで発足した。しかし、世相は戦時色が濃くなり、世間に気兼ねしながら開催しなければならない状態に追い込まれていった。当時、幹事のまとめ役をつとめておられた加藤正彦氏（十字屋楽器店員でレコード・フロアのマネージャー）は警察官や憲兵の姿を気にしながらの開催はあまり気持ちのよいものではなかった、と語っておられた。ただ、高橋忠雄氏が三井系の御曹司だったので、これを隠れみのに何とか太平洋戦争激化の昭和17年初め頃まで続けることが出来たそうである。会員は当時ビクターからリリースされた中南米音楽アルバムの購入者やアルゼンチン・タンゴのレコード購入者に声をかけて輪を広げ、会をまとめていったと当時の苦労話を聞かせていただいた。

戦後は、戦前からの会員に加えて、加賀百万石の当主の前田利健氏や松平、徳川のご当主らそうそうたるメンバーで東京・青山の華頂宮邸で高橋忠雄氏のレコード・コンサートが継続された。そこには早川真平氏らも顔を見せたりで、なかなかのものであったが、トロイロやプグリエーセ、フランチャーニ/ポンティエール、カルロス・ディ・サルリ、ドミンゴ・フェデリコ、ホルヘ・カルダーラなどの新進に加え、ダリエンソ、ピアジ、フィルポの新録音などを他に先がけて聴くことが出来、新しいアルゼンチンからの情報などがジャーナリストの津田正夫氏らからもたらされて、何がなんだか分らなかった我々には大いに勉強になった。当時、月給が三千円くらいだった頃に会費が百円くらいと少し高かったが、それでも魅力は大きかった。

この会には五十名近い参会者があり、毎回賑わっていた。旧宮邸のサロンで音響も良く、焼け跡だらけの街の中に異彩を放つこの華頂宮邸のコンサートはまさにオアシスそのものの感じで、我々当時の新米の若者にとっては開催日が待ち遠しいすばらしいコンサートであった。



鎌倉市浄明寺2丁目にある 旧華頂宮邸（昭和4年建立）  
華頂博信侯爵はここに数年住んだ後 東京に移られたという。  
その 東京・青山の旧宮邸は消失している。

28

### タンゴを育てた蔭武者

太平洋戦争が終わり、文化国家日本という言葉がかっ歩し始めたころは、NHKラジオがそのパロメ

ーターの役割を果たして居た。何でもかんでもNHKといわれた時代があった。それだけに「やりたい放題」などと陰口がささやかれて居た時期でもあったのだ。

今日と違って番組と次の番組との間に時間切れや間が空いてしまうのは日常茶飯事の出来事で、マスコミをはじめ誰も文句をつけるものは居なかった。間の空いた時の対応はレコード音楽であった。1947年(昭和22年)ころはニュースまでの間などに『時間までレコード音楽をお送りします』と云って、曲目も演奏者も紹介されることなく、ただレコードが二~三曲流された。これが今日考えると不思議なことに、殆んどがアルゼンチン・タンゴであった。ことにロドルフォ・ピアジのレコードが多かった。これはレコード棚の出しやすいところにそのレコードがあったからとのことで、当時のディレクターの三枝(さえぐさ)、牧野両氏を初めスタッフがタンゴ好きであったことにもよるようで、一時はブエノス・アイレスの放送局だってこれほど多くタンゴは流さないだろうと云われたりしたこともあった。

その時使われたレコードは殆んどが戦前、国内盤としてリリースされたもので、前述のピアジをはじめ、ダリエンソ楽団の『アタニチュ』、ドナートの『チケ』、カナロの『ドン・ファン』、ドン・パンチョ 5toの『ホアキーナ』などが耳に残って居る。

強烈な印象を受けたのは、エドガルド・ドナートの自作自演の『エル・アコモード』であった。なぜこの曲が何回も使われて流されたか今日となっては知る由もないが、何となく耳についた人の数は半端な数ではなかったことだけは確かである。かくいう我々もこんなところでタンゴに対する心意気を育てられたのかも知れない。

なにしろラジオしか無く、しかもNHKオンリーの時代であったのだから、リスナーの選択する余地は皆無であった。音楽の分野でもディレクターの考えがそのままに伝えられたのだから、大変な恐ろしくなるような時代であったのだ。

この時期、アルゼンチンではアニバル・トロイロやオスバルド・プグリエーセ、カルロス・デイ・サルリが台頭して来たのであったが、わが日本に於いてはその名前が語られることすらなかった時代であった。

アルゼンチン・タンゴ・アルバムがビクターからリリースされたのは、1948年後半になってからのことであった。一般のタンゴ・ファンはレコードを手にするには至難のことであり、古レコード店のタンゴのレコードは新譜の倍近い値で売られていたのだから、リスナーにとっては苦難の時代だったということが出来よう。

=====

## 編集部から

蟹江丈夫氏は2011年9月8日にご逝去されました。しかし「日本のタンゴ楽団」シリーズには今日では貴重となった有益な情報が数多く含まれおり、また全シリーズの執筆がすでに完了しているので、氏のご逝去をもって継続中止とはせず、「元会員・故人」であることを注記の上で掲載は継続いたします。なお原稿の執筆時点から年数が経っているため、一部の記述は必ずしも現在の状況ではない箇所もあることをお断りしておきます。

# 映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様

～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～

その1

飯塚久夫

アルゼンチン・タンゴと映画とは深い関わりがある。あのカルロス・ガルデルをアルゼンチンのみならずラテン・アメリカ各国の大スターたらしめたのも映画のおかげと言っても過言ではあるまい。ガルデルをはじめ、タンゴ歌手には映画によってそのスターダムの命運を変えられた人々も多い。よく知られているところだが、例を三つ挙げてみよう。

## ■カルロス・ガルデル

ガルデルが初めて映画に出演したのは、1917年5月から7月にかけて撮影され、17年9月28日にコリセオ劇場El Cine Coliseoで封切られた「桃の花 FLOR DE DURAZNO」という映画である。当然オリジナル版は無声映画であったが、後に音が入れた。詳細は別途記述するが、いずれにしてもこの映画は記録的興味程度である。

1930年になって「エンクアドレス・カンシオネス ENCUADRES CANCIONES」（製作：ムービートーン、監督：エドゥアルド・モレーラ、撮影：ロベルト・シュミット）というガルデルが10曲余りのタンゴを歌うシーンを集めた映画が作られたが、あまり評判は良くなかった。

既に確立されていた歌手としての地位に加え、彼を映画俳優としても大スターに押し上げたのは1931年の「ブエノスアイレスの灯 LUCES DE BUENOS AIRES」（製作：パラマウント、監督：アデルキ・ミラル、脚本：マヌエル・ロメロ、ルイス・バジョン・エレラ、撮影：テド・パレ、音楽：ヘラルド・エルナン・

マトス・ロドリゲス）であった。その挿入歌「トモ・イ・オブリーゴ」は大ヒットとなり、映画館でその曲のシーンになると何回もフィルムを巻き戻して観衆に見せねばならないほどであったという逸話が残されている。

## ■ティタ・メレージョ

ティタ・メレージョも1933年の映画「TANGO」に出演してスターとなり、それから約20年間は歌手より女優としての道を歩む。歌手として本格的に録音を再開するのは54年の映画「アバスト市場」の中で歌った「人の噂 SE DICE DE MÍ」が大ヒットしてからである。この曲はフランシスコ・カナロ楽団でカルロス・ロルダンが既に43年に録音していた。しかしこの映画の効果で、後に彼女はテレビのトーク・ショーにも出るようになり、そのテーマとしてこの曲が使われ、彼女以外に歌う人もいなくなり、彼女の十八番となったほどである。

## ■リベルタ・ラマルケ

リベルタ・ラマルケは、1926年、17歳の時からナシオナル劇場の舞台で活躍し、もともと女優としてのスタートであったが、同じ26年（30年説もあり）には無声映画「アディオス・アルヘンティーナ ADIÓS ARGENTINA」（マリオ・パルパニョーリ Mario Parnagnoli監督）に出演した。その後も引き続き映画俳優としての活躍が続くが、46年2月に時の大統領夫人エバ・ペロン（エビータ）との確執によりメキシコに移る。しかし、それが却って映画女優としても

アルゼンチンのラマルケ、からラテン・アメリカのラマルケ、として広く人気を博することになる。メキシコで最初に出演した映画はスペイン人ルイス・ブニュエルLuis Buñuel監督による「グラン・カシーノGRAN CASINO」であった。合計で66本の映画に出演すると共に「ハロー・ドーリーHELLO DOLLY」などのミュージカルやテレビ・ドラマにも出演し、ペロン失脚後の55年に帰国した時には超大スターとなっていた。

ラマルケを他国に追いやったつもりが、とんだ皮肉な結果を招いたのである（55年には既にエビータは帰らぬ人となっていたが（52年7月26日没））。

## ■タンゴと映画

本稿では、歴史的な全体状況や個別の映画の内容紹介など、映画から見るタンゴの諸相についてシリーズで述べていくこととしたい。

まずは、しばらくクラウディオ・エスパーニャ Claudio España 著「映画の半世紀MEDIO SIGLO DE CINE」（1984）を参考にその端緒を見ていく。

## ■映画「TANGO」への道のり

最初のタンゴ長編トーキー映画はホセ・アグスティン・フェレイラ José Agustín Ferreyra による「ムニエキータス・ポルテーニャス MUÑEQUITAS PORTEÑAS」と言われている。封切りは1931年8月7日、レナシミアント Renacimiento 劇場でのことであり、まだ完全なトーキーではなかったのが実情である。

そして数本の映画を経て前述の「ブエノスアイレスの灯」もブエノスアイレスで上映された。

その後、映画「TANGO」に辿り着くのである。これがアルゼンチンで完全に歌、演奏が全編トーキーで製作された最初の映画である。この映画は1932年から33年にかけて撮影され、33

年4月27日にリアル劇場Cine Realで封切られた。監督のルイス・モグリア・バース Luis J. Moglia Barth は無声映画で育ったが、トーキー映画の旨味にいち早く気付いた人であった。プロデューサーのアンヘル・メンタステイ Ángel Mentasti の資金力による貢献も大きい。彼はアルゼンチン・ソノ・フィルム社の創業者となる。

## ■「TANGO」

この映画はリベルタ・ラマルケを始め、ティタ・メレージョ、アルベルト・ゴメス、アスセナ・マイサニ、メルセデス・シモーネ、ルイス・サンドリーニらが出演し、楽団もファン・デ・ディオス・フィリベルト、ファン・ダリエソ、ペドロ・マフィア、オスバルド・フレセド、エドガルド・ドナート、エルネスト・ボンシオ、ファン・カルロス・バサン、ルイス・ビスカと豪華な顔ぶれ、加えて当時一流の踊り手ベニート・ピアンケ Benito Bianket（通称エル・カチャファス EL CACHAFAS）が出演している。

かつて「中南米音楽社」が輸入したのでお持ちの方が多いかも知れないが、今回はこの映画の内容から紹介していくこととしたい。



## ◎ 神田神保町 古レコード屋めぐり ◎

荒川 孝一(東京都)

私が大学を卒業した頃も就職難の時代でした。昭和33年(1958年)3月の卒業式の間際に中小企業の印刷会社によく入社できました。3ヶ月の工場での実習のあと営業部に配属され、数社の担当先の中に日本ビクター株式会社のレコード宣伝部があった。ポスターやパンフレットの印刷の仕事が主だったが、レコードのジャケットの仕事も多少受注しており、在版リストを見るとタンゴのEP盤が2点だけあった。1点は(EP-1041) ARGENTINE NIGHTS ディ・サルリのオルガニート・デ・ラ・タルデとグリセータ、ガルデルのミ・ブエノス・アイレス・ケリード、ロス・アセス・デル・タンゴのア・メディア・ルスの4曲、そしてもう1点は有名な高山正彦大先生が「タンゴ・名曲とレコード」(東京創元社)の誌上で『親、女房を質に入れても』買うべきレコードです。いや「買わねばならぬレコード」であります』と絶賛していた、TANGO ARGENTINO (EP-1078) ディ・サルリのラ・クンパルシータとア・ラ・グラン・ムニェカ、フランチャーニ・ポンティエールのア・ロス・アミゴス、ニコラス・ダレサンドロのインスピラシオン の4曲があったのは嬉しかった。そして手持ちのレコードに針キズがあったので新しく購入したことをなつかしく思い出す。これらのレコードはAGEシリーズが発売されたあとに廃盤となってしまった。



またビクターの仕事をしていると宣伝部の方に購入伝票にサインをしてもらい新橋の営業所へ行くと3割引で購入が出来た。時々出た3枚組のボックスのように高額なものは大変とくをした感が強かった。そして一年後に入社してきた早稲田の後輩の妹さんが東芝音楽工業に在職していたのでお願いするとこちらも3割引で購入できたので各レコード会社が大量に新譜を売り出すので安月給の者には大変助かりました。

昭和53年(1978年)に卒業後20年近く勤めた会社を退職し、大学の同期生が経営する印刷会社に転職しました。会社の所在地は千代田区神田神保町です。

靖国通りの古書会館9階には富士レコード、白山通りにはレコード社、その向かいにはトニーレコード、さくら通りにはササキレコードとレコード探しには大変便利な所でした。

島崎会長も良く富士レコードには出向いておられ掘出物があった時には連絡をいただきました。

「ラ・クンパルシータ」のS P盤ではアルゼンチン盤のオルケスタ・ティピカ・ビクトル (79657)、日本コロムビアの淡谷のり子 (A251)、原孝太郎と東京六重奏団 (A329)、テイチクのディック・ミネ (テイチク 179)、日本ビクターの三味線豊吉の異色盤 (V-41036) 等でいずれも程度の良いものを手に入れることが出来ました。心より感謝しております。

また富士レコードではタンゴコーナーではなくたまたまヨーロッパ・コーナーをのぞいた時に「ラ・クンパルシータ」のタイトルのCDを見つけた。ドイツのワーナーミュージック (®&©1994) 全12曲で女性歌手のARJA SAIJONMAA が全曲フィンランド語で歌っているが、ラ・クンパルシータ以外はヨーロッパの曲で有名曲は夜のタンゴ、ジェラシー、黒い瞳でクセのない素直な歌いぶりなので大変聴き易い。伴奏はコンフントでバンドネオンは入っている。このCDは他店では出なかったようで掘り出し物の一枚です。

トニーレコードは二階にS Pコーナーがあったが何だか掃除が行きとどかないホコリの中で探し物をしている様な印象が残っているが宝物の様な二枚のS Pを見出した。一枚はファン・ダリエンソのアルゼンチン・ビクトル盤でNACIÓ EN POMPEYA (60—1900 ~ 1949年録音) でこの曲は友達から私のテーマ曲と言われた曲で (タンゴ・ランディア2004年春号に掲載) 非常に嬉しかった。もう一枚は、かつてポルテニア音楽同好会で休憩の前にプログラム以外で珍しい「ラ・クンパルシータ」を一曲かけた時があったが、その時使用された一枚でアメリカのコロムビア盤 (35478) ラモン・リッテのバンドネオンとその楽団、というレコードで同好会でやる前に入手していた。これも悪条件の中で探した苦労に対しての賜物だったかもしれない。

地元のレコード店巡りを続けているうちにかつて購入をしなかった欧米や日本の楽団の「ラ・クンパルシータ」入りのレコードが目につくようになり、それではこれらも集めてしまおうと蒐集し始めると約70枚のLPが集まった。しかし長年CDばかり聴いていたため、レコードプレイヤーの調子が悪くそのままにしておいたが、最近、同期生が毎年2、3名が他界をしている。私の余命もそんなに長くはないのではと思うようになり、この際、使用できる様に整備して、それ以外のホコリをかぶったLPと一緒に聴こうと思っています。



# 全国リレー随想（10）

ESSAY

## 私のタンゴ

三浦幸三（東京都）

### タンゴに出会う頃

動乱の昭和時代から戦後の復興時代は娯楽に疎まれていたが、戦後進駐してきた連合国のお陰でさまざまな外国の音楽が聴けるようになった。

私が社会人として公務員生活に入った1950年代（昭和27年）には早川真平とオルケスタ・ティピカ東京、原孝太郎と東京六重奏団、池田光夫とオルケスタ・ティピカ・サンテルモ等多くのタンゴ楽団が活躍していた。

私とタンゴとの出会いは当時新宿文化映画館で上映のアルゼンチン映画でビルヒニア・ルケ主演の「タンゴの歴史」を観賞の折幕間に生出演した「池田光夫とオルケスタ・ティピカ・サンテルモ」の演奏を聴いたのが始めて聴いたタンゴであった。

当時、社会人として新人の我々仲間は主に新宿界隈に出かけ音楽喫茶を回るのが常であった。現在のように娯楽に恵まれていなかったし、パチンコなどは子供の遊びであった時代である。

先輩に連れられて行った名曲喫茶「らんぶる」「田園」ではセミクラシックの音楽を聴き、タンゴ喫茶「ラ・セーヌ」「新宿コンサートホール」他では「藤岡啓郎とキンテート・ロス・ミロンゲロス」「小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス」「原孝太郎と東京六重奏団」「坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニア」「早川真平とオルケスタ・ティピカ・東京」など多くの楽団演奏でタンゴが聴けた良き時代であった。

ラジオ放送ではラジオ東京（現TBSラジオ）が「ポルテニヤ音楽の時間」で高山正彦氏の解説でタンゴを、NHKでは「リズム・アワー」で高橋忠雄氏の解説を聞いて益々タンゴに傾注していった。

### 音楽とダンス

当時は音楽を聴くだけで踊ることには縁が無かったが、戦後復興の事業として空き地だった新宿歌舞伎町（後に付けられた町名）で博覧会が開かれ、今は無くなった新宿コマ劇場が建つ前の空き地で東京都教育庁主催の野外ダンスパーティーがあり誘われたのが踊るきっかけとなった。博覧会終了後の空き地にコマ劇場は1956年（昭和31年12月）オープンされた。その後1961年（昭和36年11月）タンゴファン待望のフランシスコ・カナロ楽団が来日、新宿コマ劇場にアルゼンチン大統領、日本の皇太子ご夫妻（現天皇皇后両陛下）ご臨席のなか公演が行われた。次第にタンゴを聴いているときに覚える躍動感リズム感に出来るならタンゴを踊ってみたいと思うようになった。

当時発行されていたタンゴ雑誌「中南米音楽」（現ラティーナ）を見てタンゴファンの会があることを知った。しかもタンゴを聴いて踊れる会であったので願ったり叶ったりで早速入会したのが、タンゴ同好会「すいよう会」であった。入会当時は数多くあったタンゴ楽団が交代で出演して生演奏で

踊れた。演奏のほかはレコード演奏で解説もあり聴く方、踊る方ありであったが、後にレココンと踊る会に分かれて例会が行われた。私は両方に出席していたが後に会長から踊れない会員のために講習会でレッスンしてほしいとの要望があり引き受けた。

## ダンス教師資格取得

当時タンゴを踊るといっても踊り方は社交ダンス種目のタンゴで、現在踊っているタンゴダンスではなかった。1970年（昭和45年）から始まった民音タンゴシリーズで来日した第1回ホセ・バツソ楽団を初めとして毎年本場からの来日ごとに「すいよう会」に来会、ダンスパーティーで演奏するも何も違和感なく踊っていた。また、アルゼンチン帰りの会員が本場のタンゴダンスを披露してもステージ以外のタンゴダンス（サロンダンス）を見ていない会員には馴染まない有様であった。

社交ダンスを教えるとなると教師資格を問われる時代でもあったので、会員の有志で教師ライセンスを取得するために勤務の傍ら社交ダンス教師協会に入会して受験した。ダンスの理論と16種の実技試験の結果、合格し教師資格を取得、東京都公安委員会に教師登録してダンスのボランティア活動が始まった。

タンゴ同好会「すいよう会」ではダンス講習会が5クラスも併設されて一時期数百人の出席があって盛況であった。

## 本場のタンゴ

1978年（昭和53年）タンゴすいよう会ではブエノスアイレスへ第一回「タンゴツアー」を催行、当初は隔年催行されるようになり、私は1984年（昭和59年）第四回の「タンゴツアー」に初の海外旅行として参加した。趣味とは言え現役国家公務員が国外旅行することは公務以外許されることではないので民間外交を果たす形態をとるべく当時の安倍外務大臣と個人的に師事した安井参議院議長の書簡を携えブエノスアイレスの日本大使館に表敬訪問することにした。

現在と違ってタンゴが好きだけで地球の裏側まで行くタンキチ（タンゴ気狂い）と揶揄される時代なればこそ、アルゼンチンの我々を迎える歓迎ぶりは大変なものであった。ブエノスアイレスの空港にはタンゴ界の重鎮オスバルド・プグリエセ夫妻をはじめマリアーノ・モーレス、グロリア、ディアス、ロス・ライカスらが出迎えてくれた。われわれに歓迎の意を表し白いカーネーションを用意してくれファン冥利につきる至福のひとつときだった。

滞在期間中は連日の歓迎イベントでは女性歌手グロリア・ディアス、ビルヒニア・ルーケ他、マエストロ、マリアーノ・モーレス、オスバルド・プグリエセ、カルロス・ガルシーア、他の錚々たるアーティストが大挙出席されたのには感激大興奮した。続いた音楽会やライブ・スポットに寸暇を惜しんで通ったのは言うまでもない。

また、TV局見学のおりにはタンゴダンス界大御所のカルロス・リバローラ先生が出演しており、急遽番組内容を変更して、われわれもTV出演の機会を得て踊った折のミニコンペでは一位となって賞品を頂くなど大きな収穫となった。

また、カルロス・ディ・サルリ夫人他バイアブランカのディ・サルリ会の方々40人がホテルに駆けつけて下さり日亜の初めての交歓会「ディ・サルリを偲ぶ会」を開くことができ感激を新たにした。席上フェリクス・ベルデイのバンドネオン演奏で、ディサルリの娘さんと踊ったのはよき思い出になった。



その後、第十回「タンゴツアー」に参加した折には、前回以来親交を重ねたカルロス・リバローラ先生からダンスグループの方がたは大変お世話になった。

幾度か食事に招かれたりしたほか、グループが希望したタンゴレッスンではディンセル先生を紹介して頂いた。ロス・ディンセルはタンゴダンスを世界に紹介した「タンゴアルゼンチーノ」の主力メンバーのお二人であり、グループで是非レッスンを受けたいと希望していたので一同感激と感謝で受講してきたものです。



マルタ・ディ・サルリさん（カルロス・ディ・サルリの娘さん）と踊る筆者（1984年8月・BsAs）

## タンゴアルゼンチーノ

1987年6月（昭和62年）世界的なタンゴブームに火を付けた「タンゴアルゼンチーノ」の公演が実現した。タンゴファンが多くは幾度となく足を運んで観賞し改めてタンゴの素晴らしさを堪能した。これこそタンゴとばかりにダンスに傾注してしまう。早速有志を募りタンゴダンスの同好会を立ち上げた。すいよう会でも来日する楽団に随行するダンサーを招きタンゴレッスンを行ったり、タンゴツアーでは現地でもタンゴレッスンを行うなど本格的に行ってきたが社交ダンス中心だったので、改めてタンゴダンス専門にした会の発足であった。



BsAsの新聞で紹介された東京タンゴダンス同好会（1992年12月）

その立ち上げた東京タンゴダンス同好会は当初の数年間カルロス・リバローラ先生を招き講習会を、また赤坂のタンゴラウンジ「ノスタルヒアス」に数年間出演していた「ヒルポとアウローラ先生、ジョニオールとシルビア先生」を招いて開催してきた。リバローラ先生は現在まで20数年間に亘り年数回の来日、各地で続けてレッスンを行っており、現在では数名のオーガナイザー（organizer）により行われている。

## タンゴダンスと私

1989年（平成元年）公務員生活を卒業してダンスに遠慮なく打ち込める日々を迎えることになった。現役時代に趣味として得た経験と知識を活かすときが来た。ダンスプロとなって当初は社交ダンスについてダンス雑誌でダンス評論など執筆していた。後に商船三井の豪華客船（にっぽん丸、ふじ丸、新さくら丸等）でダンス教師（instructor）として三年間にわたり10回ほど乗船、ダンス指導を行ったり各地の旅行に随伴させて頂いたのはダンス冥利につける収穫であった。勿論タンゴダンスも教程に入れて行ったが時代を反映して評判がよかった。

当時はタンゴダンス普及の折に指導員が少なかったこともあり、区や市の文化センター、サークルからの講師依頼で多忙を極めた。



熱海温泉「ニューあかお」ホテルでタンゴを踊る筆者（1993年）



豪華客船「ふじ丸」船上のタンゴダンス講習会で踊る筆者（1998年）

2000年（平成12年）に入ると本場アルゼンチンでもアストル・ピアソラの影響もあって多くの若者にもタンゴダンスが浸透して来た。世界各国でもタンゴダンスが踊られるようになり主要各地でアルゼンチンタンゴ・フェスティバルが行われるようになった。不況のアルゼンチンではタンゴダンス世界選手権の開催を模索していた。

2003年（平成15年）第一回タンゴダンス世界選手権大会が行われるや日本でもタンゴダンス大会の窓口を、との話が雑誌ラティーナ社の本田社長を通じて相談された。とき恰も、私は2000年に発症した大腸がんにつき肺がんの術後だったが、それまで個々にタンゴダンス指導を行っていた先生方に組織化の趣旨を説明して賛同を求めた。それによって日本タンゴダンス教師協会（NAPTA）を立ち上げてタンゴダンス・アジア選手権大会開催に協力した。私は第一回アジア大会組織委員会委員として参加、第一回から第三回までの日本側審査員と第四回のチェッカーとして協力した。その後も教師協会は名称変更して大会運営に協力を行っている。協会は大会協力に終始することなく、ダンス教師としてタンゴダンスの伝道者として誇りの持てる組織を目ざしていたが、2012年の今日までに私自身はガン2回、脊柱管狭窄症2回に亘る全身麻酔による手術と、2回の脳梗塞と骨粗しょう症を患い、いまだに通院の繰り返しが続いている。初期の目的タンゴ啓蒙活動も今では一頓挫している。

教師協会会長の役職も創立一周年記念大会（会場・京王プラザホテル）を盛会裡に引退し若手教師に引き継がれた。

## タンゴセラピー

過日の新聞紙上でタンゴセラピーの記事が目についた。タンゴを踊って、病気を予防し治療に役立てる「タンゴセラピー」が、アルゼンチンを中心に広がっているとのこと。「タンゴを踊ることで運

動機能障害や複雑な動きの組み合わせが平衡感覚の回復に役立ち、骨粗しょう症や高コレステロールなどによる病気など、様々な治療にも効果があることが分かった」と心臓病専門医が語る。また、「異性のパートナーと体を密着させて踊ることは、一人で行う他の運動と違い抱擁があり精神的にもいい」と言われている。過日、NHK-BS1テレビで放映された番組でも「抱擁で心を癒すタンゴ」を湘南アルゼンチンタンゴダンス同好会の出演で紹介されていた。

タンゴは身体障害者らのリハビリにも使われているほか、ステップを覚えるなど記憶力を使うため、アルツハイマーにも効くという。

いま、私はタンゴセラピー（タンゴ療法）の言葉どおり、タンゴを聴き踊ることで右半身の痺れ痛みを忘れ、傘寿を過ぎたこん日でも、お陰さまで何とか舞踏活動を続けている。

次は東京都の黒木皆夫さんにバトンを渡します。よろしくお願いします。

(了)



眼鏡を外したプグリエーセ夫妻と（1994年プグリエーセ楽団創立55周年祝いで）

## 映画の紹介

### 【「わたし」の人生（みち）～我が命のタンゴ～】

父の認知症が発覚したことで、病気の進行と介護という現実から衝突が増え、家族は次第に離ればなれになって行く。そんなある日、父はリハビリの一環だというアルゼンチン・タンゴの教室に参加する……。実際のエピソードに基づいた希望と感動の物語。

監督／和田秀樹、出演／秋吉久美子、橋爪 功、他、8月シネスイッチ銀座他にて全国順次ロードショー

## アルゼンチン・タンゴの夕べ～哀愁漂うタンゴの名曲を集めて タンゴアンサンブル「アストロリコ」の演奏を聴く



2012年4月4日東京文化会館小ホール

鈴木 一哉

東京・春・音楽祭へのタンゴ楽団の参加は、2009年の京谷弘司、2010年のオルケスタ・アウロラ、昨年のタンゴ・クリスタルと続いて既に恒例となった感があるが、本年はタンゴアンサンブル「アストロリコ」が11人からなるオルケスタ・ティピカ編成で東京まで遠征した。角田昭氏による論考「Astroricoの20年」(TANGUEANDO EN JAPÓN No.28に掲載)によると、アストロリコの創立自体は1991年だったが、デビュー・コンサートが開催されたのは翌1992年の4月23日になってからのことだったとの由なので、本稿でとりあげるコンサートが開かれた2012年4月はちょうどデビュー20周年に当たっていたことになる。実は正式なデビュー20周年記念コンサートは5月1日に本拠地の京都でおこなわれたそうだが、このメモリアルな機会に相応しく充実した祝祭的なコンサートが東京でも実現したことは真に喜ばしい。アストロリコは折に触れて関東公演をおこなっているが、小編成(四重奏)となることが多いわけなので、何と言っても11人のフル編成での生演奏を堪能できた点が特に貴重だったのである。

今回のメンバーは、バンドネオン:門奈紀生、星野俊路、田中香織、生島大輔、ヴァイオリン:麻場利華、外蘭美穂、麻場友姫胡、ヴィオラ:木村直子、チェロ:木村政雄、コントラバス:大塚 功、ピアノ:平花舞依というラインアップで、演奏間の曲紹介などのMCは麻場利華さんが饒舌に盛り上げていた。ダンサーを全く参加させず、ロベルト・デ・ロサーノなどの歌手も敢えてはずして全曲をインスト演奏のみでそろえ、さらに、アストロリコの近年のレパートリーのいくつかの主要な柱のうちからヨーロッパ産タンゴへの取り組みと日本の名曲のタンゴ化というアストロリコ独自の個性的な方向性も選曲から除外して、あくまで本格的なアルゼンチン・タンゴ器楽曲中心でレパートリーを重厚に統一していた点には、クラシック関係のフェスティバルへの参加といういささか対外試合じみた特殊な機会を意識した強い決意がどこか感じられた。もっとも、小ホールの舞台の狭隘さと演奏者数の多さとを勘案するとダンスはもともと困難だったと思われるが。

さて、肝心の演奏内容とはいうと、総じて、大編成の持ち味を生かして強奏でのパンチ力を効かせた、スカットとする力演の連続であり、ホールの音響特性の良さもあってか楽器間のバランスが絶妙であった点も特筆された。多くの場面で、伴奏部では一定のコンパスをかつちりと保持しつつ、その上で弦楽器陣を中心にメロディ部分に細やかな表情をつけていくことによりタンゴ的なリズムのゆらぎを実現するスタイルをとっていたと思う。一方で、そうした一定のコンパス上でしばしば長く展開されていたバンドネオン隊のバリエーション的なパッセージには、言い古された形容を使うと「電飾を思わせるような」機能的な細密さの一方で一種の抽象性を感じさせてしまう箇所もあったようだ。ともかく、

全体としては、リーダーの門奈さんのお人柄の反映であろうか、きっちりとした折り目正しさを感じさせる清潔感に溢れた演奏が素晴らしい感銘を残した。

具体的なプログラム構成は以下の通りだった。

前半 (A)：①オランダ・ゴニに捧ぐ (ア・オランダ・ゴニ) ②パブロ③カフェ・ドミンゲス④芸術家の心 (コラソン・デ・アルティスタ) (v) ⑤素敵な格好 (ピンタ・ブラーバ) ⑥スイパーチャ⑦パレルモの夜 (ノーチェ・デ・パレルモ) ⑧メタ・フィエロ (m) ⑨エントラドール⑩おまえが魔術師なら (シ・ソス・ブルーホ) ⑪来るべきもの (ロ・ケ・ベンドラ)

後半 (B)：①ラ・ジュンバ②リベルタンゴ③敬愛なる市民 (エル・デイスティンギード・シウダダーノ) ④ガウチョの伝説 (レジェンダ・ガウチャ) ⑤吟遊詩人 (パジャドーラ) (m) ⑥二人日和 (ダル・ブエルト) ⑦思い出 (レクエルド) ⑧夜明け (エル・アマネセール) ⑨二人のために (パラ・ドス) ⑩パタ・アンチャ⑪スム

以下、ポイントになる演奏曲目をピックアップして簡単に触れておこう。

まずは、アストロリコが以前から集中的に取り組んできたプグリエーセ楽団のレパートリーとピアソラ作品はやはり今回のプログラムでも要所を締めていた。

プグリエーセ関連については、プグリエーセ楽団メンバーの名作群からプグリエーセ作A⑦、B①、デマルコ作A⑧、B⑩、バルカルセ作A⑩、プラサ作B⑤、ルジェーロ作B⑨と、特にリズム的な強靭さが要求される名作を数多く取り上げて、力感が漲る正攻法の解釈で真正面から挑んで押し通していたところに、アストロリコが長い期間にわたってプグリエーセ・スタイルに取り組んできたことの歴史の重さを感じた。

ピアソラ関連については、A⑪でオクテート・ブエノスアイレスの前衛的なアレンジをオルケスタ・ティピカ編成にアダプトして利用している (同曲のオクテート・ブエノスアイレス版のアレンジの復活自体は99年に小松亮太が既におこなっていたわけだが、今回はオルケスタ・ティピカ版という点において独自色が発揮されていた)、また、B⑪もピアソラ九重奏団、プグリエーセ楽団が残した名演のいずれの単純なコピーにもならない編曲を探求しており、ともに今回のコンサートにかけける意欲を強く感じさせる快演であった。また、新たなイントロをつけるなど随所にアイデアが溢れる編曲を追及したB② (麻場利華さんの編曲だったはず) でのスケール感溢れる熱演も忘れがたい。

さらに、近年のアストロリコの重要なテーマである40～50年代のオルケスタ・ティピカによる名曲・名演奏の再現も、今回のコンサートの重要な柱を構成していた。ダゴステイーノの名曲を同楽団による55年録音の編曲をアダプトして実現したA③、ドミンゴ・フェデリコ楽団による52年の録音を細部まで再現したB④などが、この方向性での代表的な成果と言えるだろう。当時の時代の空気感までも甦らすことは困難であるとしても、現代のオルケスタ・サウンドとして存分に聴かせる立派な演奏であったと思う。タンゴ・ファンにお馴染みの古典タンゴA②、A⑥、B③、B⑧をしっかりとプログラムに加えていたのは、プグリーセやピアソラ作品による先進的な路線とのバランスをとることと、ピアソラによってタンゴ世界を知ったクラシック・ファンらにも古典曲の深さに触れてほしいという思いのあらわれであろうか (弦楽器陣が舞台前面にまで出てきてのB⑧でのユーモラスな音声模写は、温かい笑いをさそって、会場の空気の親密度・一体感をコンサート終盤に向けて高める役割を果たし

たのではないかと思う)。

その他にも、早川真平作曲のA⑦、オルケスタ・ティピカ東京のテーマ曲だった刀根研二編曲によるカステジャーノス作曲のミロンガA⑧が並べられているところに、日本のタンゴ界の先達への敬意が明確に表明されていると感じられた。

また、門奈さんの自作B⑥は映画『二人日和』のサントラ曲であるが、オリジナルは四重奏での録音だったものを今回はオルケスタ編曲で豊かな響きで聴かせてくれた。祈りを感じさせる静謐なミロンガである。続くプグリエーセ作A⑦も同映画の重要ポイントで用いられていたタンゴということで、ここでは並べての演奏となったのであろう。

アンコールは長尺のアストロリコ版クンパルシータで、各メンバー紹介を兼ねたソロ回しをたっぷり聴かせて、心地よくコンサートを締めくくった

全体的に見渡すと、ゴビ作A①もプグリエーセ楽団の編曲を使っていたはずだと思うので、前半・後半のそれぞれ冒頭がプグリエーセ・サウンドで開始されて、さらに前半・後半のそれぞれ最後はプグリエーセ楽団メンバーの傑作2曲を並べた後にピアソラ作品で閉じるという相似したクライマックス設定をとっていたという点で、非常によく練られたプログラム構成になっていたと感じた。様々なスタイルによる現代のオルケスタ・ティピカ・サウンドを堪能させてくれる大変に充実した一夜であり、アストロリコの今後の活動の充実にもさらなる期待を感じさせた。



★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

## オーケスタYOKOHAMA

# タンゴ・コンサート「昭和、そして今」、を聴く

齋藤 富士郎

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

5月5日の子供の日（タンゴの節句）に横浜市開港記念会館で開催された、オーケスタYOKOHAMAによるタンゴ・コンサート「昭和、そして今」を聴いた。オーケスタYOKOHAMAは本職は塾経営者である齋藤一臣氏が率いるタンゴ楽団で、今回は楽団結成30周年記念のコンサートでもあるという。オーケスタYOKOHAMAのメンバーにはプロとアマチュアミュージシャンが混在しているので、厳密に言えば「セミプロ」集団である。今回のコンサートでの楽団メンバーは末尾に示した。この中で平田耕治氏と佐藤利幸氏はNTA会員でもある。また平田耕治氏はこの楽団で育ったプロのバンドネオン奏者である。この楽団にはこれまでNTA会員の河内敏昭氏がビオラ奏者として参加されていたが、ご自身の事情で今回からは参加されなくなったということである。大変残念なことである。また当初出演予定であったバンドネオン奏者の並木 恵氏も体調不良ということで、氏に替わってオーケスタ・デ・タンゴ・ワセダOBの清川博貴氏（現役東大生）が加わった。更に今回はNTA会長の島崎長次郎氏がコメンテーターとして登場する場面があった。

横浜市開港記念会館の会場は本来は音楽会場というよりは式典などを行うための施設であるが、そのことは演奏上は何の問題にもならなかった。ただし、ダンスのためのスペースは狭いように思われた。かなり広い会場であるが、それでも補助席を用意するくらいの大入り満員で、当日売りの券は無かった。ただし聴衆の大部分はオーケスタYOKOHAMAの「友の会」を通しての参加であると見受けられた。

プログラムも末尾に示したとおりであり、今回のテーマの「昭和、そして今」を考えた選曲がなされている。第一部の途中で島崎会長が登場し、齋藤一臣氏との質疑応答の形で、昭和初期にタンゴが日本に紹介された経緯を解説された。

第一部は恒例のMeta Fierroで始まり、次いで今回が始めての試みということでコンチネタル・タンゴの「夜のタンゴ」が演奏された。El AcomodoとAdiós Argentinaは昭和初期の人気タンゴの代表として、El Internado とMucho Mucho はファン・ダリエンスを、A La Gran MuñecaとBahía Blancaはカルロス・ディ・サルリを代表する曲として取り上げたと説明された。それに続き、日本のタンゴとして「夜のプラットフォーム」を元宝塚歌劇団星組の叶 千穂さんが歌い、最後にダリエンス・スタイルでのNací en Pompeyaとディ・サルリ・スタイルでのLa Cumparsitaで締め括った。

第二部の最初の5曲は齋藤一臣氏が最も影響を受けたプグリエセのスタイルによる演奏で、それに続くLa Racha, Un Placer, Recuerdoは河内敏昭氏の編曲によるもの、9 de JulioとLa Cumparsitaはオスバルド・レケーナの編曲によるものである。どちらも当楽団のために特に編曲されたものであると

いう説明があった。

筆者はこの楽団の演奏を聴くのは昨年が続いて2度目である。昨年場合は正直言って「やはりアマチュア楽団」という印象は拭えなかったが、今回は昨年と比べて格段の進歩が見られた。

プログラムの最後の5曲を除けば、編曲はそれぞれダリエンソ、ディ・サルリ、プグリエセのコピーではあるけれども、演奏はそれなりに中々立派であった。特に、ディ・サルリ・スタイルは一聴すると単純なようでも実際に模写するとなると結構難しいものであるが、オルケスタYOKOHAMAはそれを見事に再現していた。ただし、どの楽団をコピーした場合でも、テンポは本物よりも遅くなりがちであった。これは当楽団に限らず、日本のタンゴ楽団が本場のオルケスタのスタイルをコピーした時に一般的に起きる現象で、以前から指摘されていたことである。実際、聴いてみればわかるが、ディ・サルリ楽団の演奏などもテンポは結構速いのである。テンポを本物並みに早めれば更に聴き応えあるものになるだろう。

この日の演奏で特筆すべきものはプログラムの最後の5曲である。前に述べたようにこの5曲は河内敏昭氏とオスバルド・レケーナの編曲になるものである。プログラムが進んでLa Rachaに至った時、楽器の演奏技術が特に変わったわけでもないのに、それまでとは全く異なる印象を受けた。それは借り物ではなく、自分たちの音楽を演奏しているのだという印象である。タンゴ楽団が一本立ちするためにはやはり自分たちの編曲で演奏することが基本であることを改めて感じた。オルケスタYOKOHAMAがセミプロ楽団を脱し、「友の会」に頼らずに、いろいろな演奏会に出演できる機会を豊富にするためには、独自の編曲を用意できる体制を整えるべきではないかと感じた。そうやって始めて「プロのタンゴ楽団」と言えるようになるのだろう（メンバーが他に本職を持っていることは関係は無い）。

オルケスタYOKOHAMAの演奏技術は大変立派であるが、難を言えば、河内敏昭氏が抜けた後もう一人弦楽器奏者を補充すると更に一層充実するであろう。バンドネオン4人に対してバイオリン3人ではやはり音量で弱いところがある。それと飯泉昌宏氏のギターの音色が殆ど聴こえなかったのは残念である。これもやはり編曲の問題であろう。

オルケスタYOKOHAMAは来年の5月5日も同じ会場で演奏会を開くことになっているという。そこで注文だが、今回の演奏会で入り口での受付がスムーズに進まず、演奏が始まって未だ受付が完了せず、演奏中に入場する人が多かった。冒頭に述べたように、この会場は本来の音楽会場ではないので、会場への入り口は狭い。そこに多数の参会者を受け入れれば当然混乱する。その上、参会者を「友の会」の会員と非会員とで分けて受け付けたので余計混雑した。次回からはこのような混雑が無いように配慮を願いたい。

いろいろ苦言は呈したが、これだけのメンバーと、これだけのレベルのタンゴ楽団を30年間にわたって維持・運営して来られた齋藤一臣氏の努力には心から敬服する。オルケスタYOKOHAMAの今後の一層の発展を改めて祈念するものである。



Y オルケスタ  
YOKOHAMA

タンゴは  
ヨコハマで

タンゴコンサート  
「昭和、そして今」

2012年5月5日(主祝)  
開場 13:30 開演 14:00  
横浜市開港記念会館

S席 4000円、A席 3000円、B席 2000円、C席(学生席) 1000円

主催: NPO 法人三田教育研究所  
後援: 横浜市中区役所

チケットのご予約、お問い合わせは  
045-316-8339

## 楽団メンバー紹介

バイオリン・マエストロ: 齋藤 一臣

バイオリン : 専光 秀紀

バイオリン : 石川 麻衣子

コントラバス: 齊藤 直樹

ギター : 飯泉 昌宏

ピアノ : 斎藤 晶

バンドネオン: 平田 耕治

バンドネオン: 清川 博貴

バンドネオン・フルート: 古野 奈巳

バンドネオン: 小川 真人

ダンス : 荒木陽一・MANA

ダンス : 佐藤利幸・中山満起子

元宝塚歌劇団星組: 叶 千穂

日本タンゴ・アカデミー : 島崎 長次郎

### スタッフ

舞台監督: 砂川哲郎

舞台監督アシスタント: 小林真大

照明: 八子増美

音響・総合監督: 久保典央

音響スタッフ: 藤田翔、鶴岡正章

## プログラム



### 楽団結成 30 周年記念 タンゴコンサート「昭和、そして今」

#### 第一部

(熱い鉄のように)  
*Meta Fierro* がんがん行こう

夜のタンゴ

*El Acomodado* コネ

*Adios Argentina* さらばアルゼンチン

*El Internado* (インターンの) 医学生

*Mucho Mucho* もっとたくさん

*A la gran muñieca* あばずれ女へ

*Bahia Blanca* バイア・ブランカ

(あの) 夜のプラットホーム

*Naci en Pompeya* ポンページャ生まれ

*La Cumparsita* ラ・クンパルシータ

#### 第二部

*Sequime si Podés* ついてこれるものなら

*Ojos Negros* (インディオの) 黒い瞳

*Para Dos* 二人のために

*Morena* 麦わらの山

*Desde el Alma* 心の底から

*La Racha* 突風

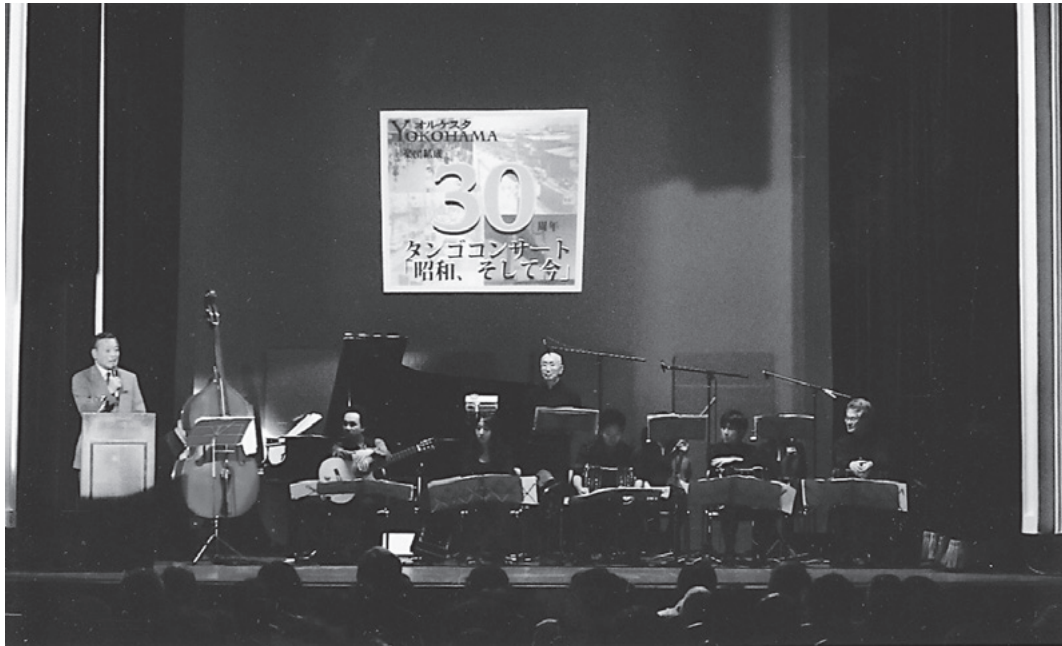
*Un Placer* 喜び

*Recuerdo* 思い出

*9 de Julio* 7月9日

*La Cumparsita* ラ・クンパルシータ





齋藤一臣氏と島崎長次郎N T A会長との質疑応答



佐藤・中山ペアのダンス。中央のバンドネオン奏者は平田耕治氏

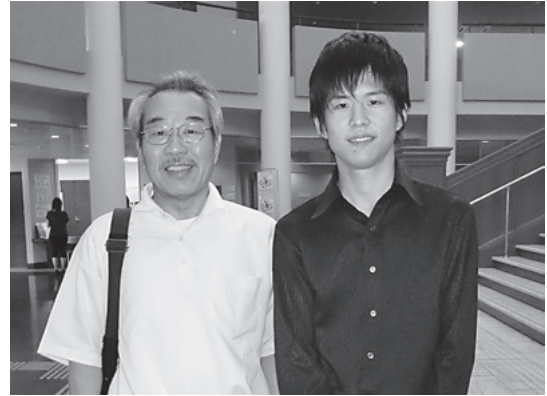
# 三浦一馬ライブ・レポート

西川 薫

5月20日、若手バンドネオン奏者三浦一馬のリサイタルを埼玉県三芳町文化会館で聴いた。彼はこの項執筆時点で未だ21歳でありながら、すでに5年のキャリアを積んでいる。筆者はプロ・デビュー以前に新聞の埼玉地方版で「少年バンドネオン奏者」の存在を知り、デビュー後もその活動に注目してきた。彼に関して最新のライブを通して感じたことを少し述べてみたい。

## 三浦 一馬（バンドネオン、作曲、編曲）の足跡

1990年6月、東京生まれ。現在は埼玉県久喜市在住。ピアノ演奏家の両親と幼・小学校の一時期をイタリア（フィレンツェ）に暮らし、現地校に通う。学齢前からピアノを弾き始めたが、小学校4年（10歳）の時にTVで見た小松亮太のバンドネオンの音色に感動し、彼に弟子入りをする。2005年（中学3年）11月に自費CD「Libertango」を制作、全曲ピアソラとフェデリコの作品で固めており、曲目解説も本人自身の筆になる。この年、文化庁の新進芸術家国内研修生に選ばれる。



2007年3月17日（16歳）、三浦自身のプロデュースにより久喜総合文化会館大ホールでプロ・デビューを飾る。この年の夏、ヤマハ音楽振興会から演奏活動助成を受けている。その後の活動は精力的で、福祉施設、学校コンサート、美術記念館ライブ、関東・関西の交響楽団との共演（N.マルコーニのバンドネオン・コンチェルト日本初演も遺す）など着実に力をつけていく。2008年10月、イタリアで開催された国際ピアソラ・コンクールにおいて史上最年少で準優勝を果たす。昨年5月には別府アルゲリッチ（アルゼンチン出身のクラシック・ピアノ奏者）音楽祭で彼女と共演もしている。将来を囑望されたバンドネオン奏者であることは、すでにビクターより2枚のアルバムをリリースしたことで明らか。

三芳町はさいたま市の西15kmほどに位置し、武蔵野の美しい雑木林と、整然と区画された畑を残す、人口38,000人ほどの町だ。会場となった文化会館は席数503の本格的音響設備を備えたホールだが、開催地での知名度不足と交通の便に難があり、6割程度の入りであった。過去に経験した彼のリサイタルでは考えられない数値だ。

さて、「ピュア&パッション」と題した当日のプログラムである。第一部は松本俊明（作曲・ピアノ）のピアノ・ソロですべてが自作曲。筆者は寡聞にしてこの演奏家を知らなかったし、勿論作品も知らない。語る知識もなく、また、本誌の目指す方向性からもこの部分はパス。最後列で聴きながら、リチャード・クレイダーマンが脳裏に浮かんだ。

三浦が登場した第二部は息のあったピアノのBABBO（イタリア語でパパ～三浦の父はまぎれもなく卓越したクラシックの演奏家だ）とのデュオで始まった。1曲目の「オブリビオン」は彼が最初に取り組んだ練習曲で、これまでに発表した3枚のアルバムすべてに採り上げている。ピアソラ・コンクールでフリー曲として選んだ曲でもあり、彼がことのほか大事にしている曲といえよう。静謐と寂寥感たゆたう演奏にフロアは水を打ったような静けさで、印象深い幕開けだ。2曲目が「アディオス・ノーノ」。導入部のBABBOのピアノ・カデンツァを省いた省エネ演奏で、これは残念。曲が終わり立ち上がって一礼すると、二人とも下手に引きあげた。クラシック・リサイタルでは見慣れた風景だが、最初は「あれ、なッ何?!」と、とまどったものだ。

再び現れた三浦はソロでマルコーニ親子の合作「グリス・デ・アウセンシア」をリリースモ溢れる演奏で披露したが、しかし何とも知名度が低い。筆者はマルコーニの2度の録音で知るのみだ。ここでBABBOのピアノが加わって残りの3曲、「名もなき英雄（小曾根真）」、「アストランド（L.バカロフ）」、最後にピアソラの「乾杯」と続いた。前2曲はネットで調べたところ、日本のジャズピアニストによるタンゴと、ブエノス生まれでイタリアに定住し映画音楽で名高い作曲家の作品とあった。「ピアソラ気取り」というニュアンスか。フェデリコ、アグリ、ベリンジェリらタンゴ人にストラッタ指揮：ロイヤルフィルハーモニーの音をかぶせた同名の録音があるが、それとは別だ。

さて、ここで感じた気懸かりな点である。馴染みのない曲が並んだこと、それ自体は作品に光を与えるという観点で納得するが、これら3曲はいつものような曲名紹介、由来、ステージにあげた理由などの説明なしに演奏だけを淡々と進めてしまったことにある。なまじ固定観念にとらわれず、聴衆自身が自由に想像を膨らませて貰えたらよい、とする行き方もあるが、難渋な曲だけに一工夫が欲しかった。

この後ピアノが松本俊明に代わり、彼の作品2曲、アンコールは今回もスピード感溢れる「リベルタンゴ」で締め括った。

いつも感心するのだが、とにかく指が動く。デビュー時に比べ身長が伸び（178cm）、キータッチにも一段と力強さが増している。三浦の母は、「子供の頃に比べるとボタンをかなり楽に押さえられるようになったことや、手の大きさだけではなく、奏法の工夫を試みていることが進歩であろう」、と語っている。今回もその練習量に裏打ちされた漲る自信とテクニックで、重厚な、また、きらびやかなサウンドを披露した。

いつものように8割以上が女性、しかも若い世代の比重が極めて高い。彼のコンサートの開演時間が今回のように日盛りの時間帯に開催されることが多いことも要因の一つに挙げられよう。ただ、彼女ら女性観客の多くが、音楽や演奏の質に対する関心より、三浦をアイドルとみなす所謂「追っかけ」と思えてならない。今はいいが、10年後、20年後に必ず壁に突き当たる。その時を見据えどう乗り越えていくか、音楽世界で確固たる地歩を固めておくことが大事であろう。

筆者が覗くことの出来なかった2月3日紀尾井ホール「オール・ピアソラ・プログラム」を鑑賞した友人は、次のような感想を寄せてきた。

「三浦一馬は良くここ迄作り上げたなって感心しました。彼の緊張感が伝わって来て、これもよい意味で若さだと思いました。共演者もすごく満足したと思います。私の感想はこの演奏会には大満足でしたが、これから彼はどんな方向に行くのかがすごく気掛かりです。彼のように何にでも優れて（出てくる音、練習での集中力、人間関係等々）いると、却ってものが見えなくなってしまうのではないかと心配してしまいます。私自身は、彼自身のスタイルが固まって、第一音が出ると、ああ、彼だっ！、て分かるような音楽家になって欲しいのです。これってジャズっぽいかなあ。」と評している。

三浦は今回のリサイタルに先立ち、一月前に同会場でマイナーな楽器バンドネオンの認知度を上げるためのレクチャーを開いている。参加者はわずか70人ほどでその殆どがこの楽器とは初めての出会いであったが、自作の解説チラシ、プロジェクターを使っただけの映像解説、楽器の分解提示など、バンドネオンの地位向上に寄せるひたむきさははっきりと伝わった。

その彼は、「目指している音楽はタンゴよりクラシックに寄っている。バンドネオンをタンゴの世界だけに留めておくのはもったいない、だからタンゴ演奏家より、“バンドネオン演奏家”としてジャズやクラシックも研究し、いつかバンドネオンの知名度をピアノやバイオリンのような存在にまで高めていきたい」と話している。その心意気や良し。彼は熟練の音楽家達の注目を集め評価も高いし、どんなジャンルの音楽にも順応できる基礎と研究は出来ているだろうが、ただ、器用貧乏、八方美人になってはならないし、バンドネオンと歩む自分の立ち位置をシッカリ見定めてもらいたい。

この楽器を擬人化すれば、バンドネオンはタンゴと出会ったことで他人はもとより自分も気付かなかった潜在能力を引き出し、かつ余人には及びもつかない表現能力を身につけた。だからバンドネオンにとってタンゴは一番大切な世界、アイデンティティだ。それ故タンゴ愛好家の一人として、三浦には一級のタンゴ演奏家とのコラボで、彼独自の切り口で、130年に亘るタンゴの世界を表現して欲しいと願う。レパートリーにはグアルディア・ビエハだってあるんだから。

最後に「ラティーナ」昨年12月号に、当アカデミー会員鈴木一哉氏による三浦一馬の紹介記事が掲載されているので、再読をお勧めする。

2012.5.25

参考：三浦一馬オフィシャルサイト [kazumamiura.com/](http://kazumamiura.com/)



# パブロ・シーグレルの夕べ

鈴木 一哉

NHK文化センターが震災復興チャリティーとしてピアソラ没後20年を契機に企画した『巨匠パブロ・シーグレルの夕べ』が、改修による一時閉館を来年にひかえた上野の奏楽堂で開催された（2012年6月28日）。今回の来日のメインの目的（ピアソラ没後20年目の命日7月4日におこなわれる記念コンサート）とは独立した催しであり、インタビューとミニ・コンサートを組み合わせた形を取ることで、多面的にシーグレルの素顔に接することが出来る貴重な機会となった。

冒頭、当日14時にニューヨークから到着したばかりだったシーグレルがただ一人舞台に登場してシューマン作曲『子供の情景』から第1曲「見知らぬ国と人々について」を弾いて開始した第1部（インタビュー）は、アカデミーの飯塚久夫副会長が、主役のシーグレルをしっかり前面に立てながら、一方で単なる聞き手という立場にとどまらず的確な質問事項や途中で再生される音源の選択など全体の構成まで総合的に担当して進行していた。その構成は、ピアソラ没後20年という視点からピアソラの生涯を古い時代から辿っていくことを縦糸に、それに対してシーグレルの意見や思い出など興味深い話をひきだしていくことを横糸にして、立体的に組み立てられて



Pablo Ziegler: Quintet & Trio for New Tango

ていたと思う。途中で使用された音源は、時間の関係で長尺の演奏は除外せざるを得なかったが、ピアソラの46年のオルケスタ「オルゲージョ・クリオージョ」、フランチェニ＝ポンティエル楽団「パラルシルセ」、プグリエーセ楽団「ノニーノ」（61年録音）、70年のレジーナ劇場ライブから「ブエノスアイレスの夏」、83年のウィーン・ライブから「フラカナパ」、88年のアルバム『ラ・カモーラ』から「フガータ」、最後の締めとして82年の来日公演ライブから「エスクアロ」というもので、ピアソラのルーツが古典タンゴに繋がっていることをしっかり再確認させるところから出発していた点に共感を覚えた。また、「ノニーノ」に関連して、プグリエーセが毎日の練習で「わが両親の家」を必ず弾いていた例を引いてシーグレルに練習でよく弾く好きな曲はありますかと飯塚副会長に促されて、ショパンのエチュード（op.25-9）をクラシック的な演奏から開始して徐々にジャズ的（？）な即興へと変容させていく形で実演してもらえたのは楽しい息抜きになっていた。飯塚副会長によるインタビュー中のシーグレルの発言の一部を要約しておく、「ピアソラと一緒に演奏をしていくうちに伝統タンゴにも共感を持つようになった」「室内管弦楽団版のブエノスアイレスの四季は、オルフェウス室内管弦楽団からの委嘱で編曲したが、当初はバンドネオンを含まない編成のためだったものを、今回の

日本公演のために新たにバンドネオンを加えた形に改訂した」「キンテートのメンバーは、(ピアソラ以外は) 2人はジャズ、2人はタンゴの出身で、それぞれ個性が強かったが、ピアソラの音楽を通じて絆を深めて、5人の間で葛藤はあったものの、知性によってコントロールして、互いをそれぞれに尊重して優れたアンサンブルを実現できていた」「休暇のときにプンタ・デル・エステでピアソラと一緒によく鮫釣りをしたが、アストルは大きい鮫、私は小さい魚を釣るという役割分担があった(笑)。そのとき二人で話していたのは、次のヨーロッパ・ツアーはどうしようとか、自分達の音楽の方向性についてなどだった」(記憶に頼った部分もあり一字一句を正確に再現しているわけではない点をご容赦ください。)

第2部(演奏)は、シーグレルとバンドネオンの北村聡のデュオが中心だったが、7月4日のコンサートに参加するためシーグレルと同便で来日した打楽器奏者/ドラマーのフランコ・ピンナがカホン(手で叩くだけでなくブラシも使用)で一部の曲目(①④⑤)に参加してリズムに多彩さを加えてくれた。シーグレル、北村ともにタンゴ的な身体感覚に裏打ちされたインプロヴィゼーションを広範に導入するという最近のシーグレルの音楽的方向性をミニマムな編成の中に凝集した演奏を展開していた。演奏曲は、以下の通り：

① **Michelangelo 70 / ミケランジェロ70 (Piazzolla)**

② **La Fundición / ラ・フンディシオン (Ziegler)**

③ **Introducción al Ángel / 天使の序章 (Piazzolla)**

④ **La Rayuela / 石蹴り遊び (Ziegler)**

⑤ **Libertango / リベルタンゴ (Piazzolla)**

**アンコール Elegía Sobre Adiós Nonino / アディオス・ノニーノによるエレジー (Piazzolla / Ziegler)**

第1部の最後で、飯塚副会長による質問「現在はニューヨークに拠点を置いて活動なさっていらっしゃいますが、今後については、どのような夢を持っていらっしゃいますか？」に対して、「ニューヨークに移り住んで長くなりますが、様々な一流の音楽に触れるのに適した場所であり、私にとってはそうした様々な音楽からの影響を吸収しやすいところです。小さい頃から夢を追いかけて生きてきましたが、今も夢はあります。それはブエノスアイレスを拠点とした音楽を世界に広げていくことです」と答えていたシーグレルには、今後もその夢を追いかけていく充実した活動を期待したい。

# 偉大なるタンゴギタリストとの別れ

## — ウバルド・デ・リオ追悼 —

杉山 滋 —

クラリン紙が2012年4月24日にオラシオ・サルガンとのデュオで名高いウバルド・デ・リオが逝去したことを報じた。享年83歳であった。彼はまちがいなくアルゼンチンタンゴにおける最高のギタリストの一人であり、まぎれもなくステージのうえで60年以上にわたって個性あふれるスタイルを持ち続けた人であった。

ウバルド・デ・リオは1929年3月11日にブエノスアイレスに生まれた。13歳で正規の音楽教育受け、14歳で早くもプロとして働くことになる。15歳の頃ラジオ・ベルグラノー局の専属楽団のメンバーになり注目される。多くの歌手たちと伴奏ギター奏者として共演しているが、なかでもネリー・オマール、アスセナ・マイサニ、イグナシオ・コルシーニなどタンゴ黄金時代からのトップ歌手といつでも放送で一緒だった。1947年から1955年までウーゴ・デル・カ ril の専任伴奏者として行動を共にし、モンテビデオなどへの公演にも出掛けている。同時に1950年にはジャズピアニストのラロ・シフリンのバンドにギタリストとして参加する。この時期にビクターに録音を行ったが、残念ながら発売には至らなかった。その前後には小さな店で働き、ボンゴ、コンガなどを



取り入れたキューバ帰りのミュージシャンとキューバ音楽を演奏したり、ジャズやブラジル音楽などさまざまな色んなジャンルの人々と交わり、タンゴ以外の音楽の幅を拓いている。2年ほどの後、セントロのパラグアイ通りとサンマルティン通りの角にあったクラブ「ジャマイカ」でジャズとタンゴの仕事をするようになった。その店には初期のアストル・ピアソーラなども出ていた。また、オラシオ・サルガンがシリアコ・オルティスと共に出演していた。タンゴ好きの店のオーナーは、サルガンとデ・リオを結びつけ1957年にデュオとしてデビューさせ、そのあと3年間コンビで演奏を続けることになった。

ピアノとギターという組み合わせは当時珍しい印象を残した。このデュオを拡大することでより一層自分たちの音楽表現の幅を拓き、内なるタンゴの心を深めるためにエンリケ・フランチャーニ、ペドロ・ラウレンス、ラファエル・フェロを加え「キンテート・リアル」を結成する。1959年9月1



日、ラジオ・エル・ムンドで初演デビューすることになる。コントラバスのフェロは2年間共に演奏し、最初のアルバムをCBSコロムビアに録音した後に退団、キチヨ・ディアスに代わった。(さらに後年にはオマール・ムルタになった) これより前の1952年、デ・リオが「ティビダボ」に出演していたときにアニーバル・トロイロが来店して、音楽劇「モローチャの中庭」でギタリストが必要なので出て欲しいと誘われた。しかし契約に縛られていて不可能なので、代わりに親しかったロベルト・グレラを推した。それが後のトロイロ＝グレラ四重奏団になったというエピソードがある。いづれにしてもトロイロが四重奏団を再編成したときにはデ・リオが参加しRCAに1968年の録音が残されている。

1960年代以降デ・リオの活動はキンテート・レアル中心になるが、ウンパ、ウンパと呼ばれる



リズムとスラーを効果的に用いたプレーは、デ・リオとサルガンのデュオが核で成り立っていることは明白です。そうしたなか1960年代後半に3度の来日を果たし高度に練られたアンサンブル、モダンなセンスとともに決して失われることのないタンゴ心に軸足を置いたプレーはいつ聞いても素晴らしい。オリジナルメンバーの他界にもめげず補充を重ねて活動を続けてきた。その中心の一人がデ・リオである。うえに述べたように、内容の濃いプレーを1969年来日時に日本コロムビアで45回転ダイレクトカッティングLP2枚を録音しているのは大きな遺産であろう。今でこそ高音質のCDが普及

して手軽に楽しめる時代になっているが、聴き直してみると12インチ片面トラック切れ目無しでの作りで極度の緊張を強いられる中で見事な仕上がりに脱帽する。

デ・リオの持つタンゴのすべてを聴くことが出来るのは、やはりサルガンとのデュオである。アンブを通してデ・リオのギターはサルガンが作り出すシンコペーションに息を合わせたリズムを叩き出す。ときには掛け合いで華やかなフレーズを披露する。そして思いっきりテンポバートの絶妙な間の取り方で聞く者の陶酔を誘うといった名人芸である。言うまでもなく当然のごとく完全暗譜で、お互いの気持ちが通じ合っているのでアイコンタクトで演奏が進み、曲の流れによどみはなく生き生きとしたプレーが繰広げられる。毎週末ごとに「クラブ・デルビーノ」でライブを行っていたが、2003年にサルガンが現役を引退してこの名コンビもついに幕を引くことになった。しかしサルガンの息子セサル・サルガンとデュオを組んでその後も演奏活動を続けているのは、永年苦楽を共にした盟友に対する畏敬の念として、その息子を慈しみ育て上げることが自らの残されたタンゴ人生に於ける使命であると感じていたのかもしれない。しかしデ・リオも志半ばで、サルガンとその息子を置いたまま神に召されてしまったのだ。

2010年に公開された映画「伝説のマエストロたち」の中でエルネスト・バッファと共演する姿が昨日のこのように思い浮かんでくる。大きな目玉をむいて周囲を見廻していたデ・リオも今は居ない。ただただ残念でもう暫らくは元気でいて欲しかった。静かに冥福を祈るばかりである。

## 「タンゴの古典186曲」

泉谷隆男

## 対訳歌詞集

大澤 寛

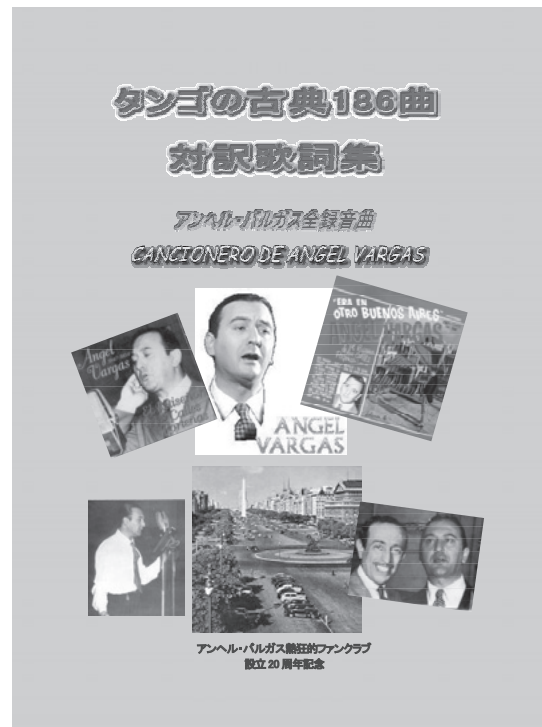
胸を弾ませて紹介したい労作が刊行された。

「アンヘル・バルガス熱狂的ファンクラブ」の設立20周年を記念して、同クラブ代表泉谷隆男氏による訳詞集「タンゴの古典186曲・対訳歌詞集（アンヘル・バルガス全録音曲）」が刊行された。格付け会社ふう言えば、日本のタンゴの世界の知的水準を優に2段階以上押し上げた労作である。

バルガスが唄ったものの全てということだが186曲といえ私などの知っている唄のタンゴが殆んどカバーされる。邦訳の際の工夫・苦心は「あとがき」にも述べられている通りだが、綿密な作業の一つは原作者の書いた詩から僅かでも異なる言葉でバルガスが唄っている部分が原詩と対比できるようになっている。例えば「El motivo」の原詩とバルガス版とゴジェネチェ版の対比。タンゴの歌い手は興が乗って来ると平気でオリジナルの歌詞を変えて唄うことがよくある。最近ではネットで唄も

聴けるし歌詞も読めるが、歌詞を追いかけて聴いていると時々“あ、違うな”と思うことがある。この本ではそうした疑問が起きてもすぐに解決できる。そして歌詞そのものの邦訳は綿密な対訳形式をとり、原詩の各行と訳詞のそれがきっちりと対応する。そしてここに翻訳という作業をするものの悲しみといってよい事態が出現する。直訳ではどうしても対応できないものごと、どうしても日本語らしい日本語にならない部分に出くわすことである。訳文が冗長になることや注を多く加えることを避けながらの泉谷氏の手捌きは見事である。

そして歌詞タイトルの邦訳がこれまた惚れ惚れする。最近の外国映画の題名の邦訳を読んで工夫の無いのに悲しくなるのは私だけではないだろう。「ペペ・ル・モコ」を「望郷」、「イル・グリド」を「さすらい」と訳した先人のセンスは何処へ行ったのだろうか。そこで泉谷訳のタイトルを楽しんで頂きたい。思わず“うまい、これだ！”と叫んで膝を打ちたくなるものばかり。「こうなったわけ」(El motivo)「或る女」(La fulana)「君住むあたり」(Rondando tu esquina)「今度で終わりよ」(Nunca más)「グラスで一杯」(Un copetín)等々、挙げだしたら限がない。どうかこの本を手にして楽しんで頂きたい。欲を言えば目次の<歌詞索引>にも邦訳を付記して欲しかった。さらに読者の食欲をそ



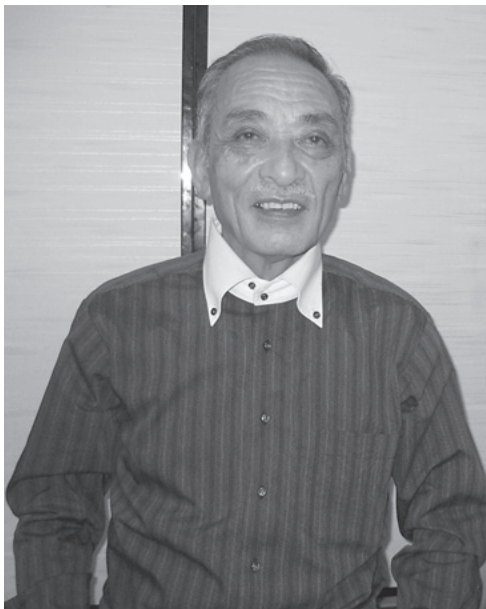
そのものになったと思う。

186曲の全対訳という大技に加えて小技も冴えている。「No placé (N.P)」(入賞なし)の馬の名前“Desobediencia”(服従しない・いうことを聞かない)が“キカンキテイオー”となっているのも嬉しい。「Manoblanca」(マノブランカ)「Pingo lindo」(かっこいい駿馬)「Pinta blanca」(ぶちのシロ)など競馬の唄に愛着が感じられるのはひょっとすると泉谷さんも競馬ファンか。そして注が少ないとは言っても随所に“これは!”と眼を見開かされるものがある。「クリオージョの決闘」(Duelo criollo)の脚注には実に驚かされる。

巻頭の写真集「バルガス会思い出のアルバム」も楽しい。バルガス教の教祖様と神様のツーショットに始まり、日本のタンゴ界の発展に尽くされ今は故人となられた方がこのバルガス会にも貢献されている姿も懐かしく拝見出来る。そして巻末の<関連資料>もアンヘル・バルガスの詳細なディスコグラフィから過去のバルガス会の記録や国内外での写真集など、そして「ノチェーロ・ソイ」(代表・宮本政樹氏=NTA会員)の誕生秘話も出て来て思わず読みふけてしまう。



タンゴの歌詞を日本語に置き換えるという同じ趣味をもつ者として、剛腕と言っている泉谷さんの知的体力に深い敬意と羨望の念を



抱きながらこの紹介文を認めているが、ここで日本タンゴアカデミー会員だけでなく全国のタンゴ愛好家の皆さまにご提案申しあげたい。それは“大いに重箱の隅を突つこうではないか”ということ。これほど上質の材料を使って料理人の包丁捌きの冴えわたる料理の詰まった重箱なら隅々まで突つき回して味わった上で“これはこうなのではないか”“ここはこう訳したらどうか”“この邦訳が生まれた背景は”といった意見を遠慮なく正面からぶつけよう。泉谷さんがあの笑顔で受けて立たれるのは確実。そうした作業が積み重ねられることで日本タンゴ界の「格付け」がさらに上がる。(2012年6月18日記)

本書への問い合わせ・申し込み先は下記へ：

〒247-0026 神奈川県横浜市栄区犬山町50-5 泉谷隆男  
TEL：045-892-6425 メール：angelito.izu@nifty.com

## 原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド・エン・ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド・エン・ハポン」の次号の締め切りは11月末日、「タンゴランディア」は9月末日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。掲載にあたっては執筆者の文章を（スペイン語のカタカナ表記も含めて）全面的に尊重しています。また当会機関誌は会員全員の参加による同人誌的性格を持っていますので執筆者には特に原稿料というものはお支払いしていません。

## 編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第30号をお届けします。弓田綾子氏の翻訳になる「オルケスタ・ティピカの歴史」は本号を以って完結となりました。長い間のご愛読ありがとうございました。代わって次号より大澤 寛氏の翻訳になる「カルロス・ガルデル」が始まります。ご期待ください。更に、本号より新たな連載企画として高場将美氏の「タンゴ作詞家列伝」と西村秀人氏の「現代タンゴ群像（1955～1990）」も始まりました。ご愛読ください。

（齋藤 富士郎）

日本タンゴ・アカデミー主機関誌 **TANGUEANDO EN JAPÓN**

第30号 2012年7月発行（非売品）

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤 富士郎（編集長）

〒195-0072 東京都町田市金井 6-17-2

TEL/FAX 042-736-7445 f-saito@mjq.biglobe.ne.jp

島崎 長次郎、大澤 寛、弓田 綾子、佐藤 進、西川 薫



דה